
You & I -Reverside Drunker-

Y

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You & I -Reverside Drunk

r -

【ZIPコード】

N10200

【作者名】

Y

【あらすじ】

人型ロボットIRIAと共に他愛ない日常を過ごしていた女子高生、水無瀬優紀。

Pandora Protonion - (通称PP) のユーザーでもある彼女はオンラインゲームの最中、ふとしたことから今いる現実に違和感を抱き、その原因を調べ始める。

現実であるはずのものが虚構であり、夢であるはずの物に確かさがある。

緩やかな改変を経て、彼女の目に映し出された世界の姿とは。

Start Day?

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。
また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼして
はならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければな
らない。
ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限り
でない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第一条に反するおそれ
ないかぎり、自己をまもらなければならぬ。

2058年の「ロボット工学ハンドブック」第56版 『われは
ロボット』より

学校……………そ、うか、学校だ。

「学校、行かなきゃいけない時間だよ

とても無機質な、私を呼ぶ声。

「起きて優紀ちゃん

ある日の夏……。

> i22180-2360 <
絵師：ななゆう
http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&illust_id=17695791

「ん……んつ……おはよウIRIA」

「おはよウ優紀ちゃん」

私は水無瀬優紀。
みなせういき

どこにでもいるような普通の女子高校生なのです。
そもそもこの無機質な声で話すのは人型生活サポート用ロボット、IRIA。

ユニケーションロボット、IRIA。
サイズは私の身長の半分くらい。

でも人型、とっても可愛らしい姿。
いつからか忘れたけれど、ずっと一緒にいる大事な妹分。

「優紀ちゃん、ご飯できる」

「ありがとう、すぐに行くな」

そうして部屋を出て行くIRIA。

私は着替えるためにクローゼットを開けて制服を取り出す。

「…………ふう」

着替え終える私。

これで学校に行く準備は完了だ。

もうすぐ夏休みだ、学校にいつても特にこれといったことはない。

だからといってサボることもない。

ただなんなく流されて過ごす日々。

それには意味なんてないのかもしれない。

「うーん……案外そんなもんかもしれないなあ……」

なんて独り言をつぶやかしつつコンビングへ向かへ。

「今日は苺ジャムのパンですよ優紀ちゃん」

「苺ジャム……」

苺ジャムは嫌いではない。

いや、どちらかといつと好きなほうだけど……。

「えっと、田口お米は？」

「ありますよ?」

「なんでそれを出さないの?」

「いえ……特に意味はないんですけど……」

「あのね、IRIA

ため息をつきながら私は「」の時たま駄田口ボ娘に説いてあげる。

「IRIAは充電好きだよね?」

「はーです、大好きですよ」

「それも家のコンセントであるのが好きなんだよね?」

「はーです、人間のようと言葉でうまく表現できかねますが

「それをアルカリ電池で充電されるとどうなる？」

「いいですけど……嫌ですね。なんといつたら良いのかわかりませんが」

「そうそれ、”別にいいけど嫌”なの。今私そんな気持ち。」

「申し訳ないです……」

「いいのいいの、どうしても嫌！ とかじやないしね」

片手をひらひら振りながらパンをかじる。

口ボリトだつて人間の子ビもと同じ。

わからないことは説明してやらなければならぬ。

ただ物分りが良すぎて融通が利かないことも多々あるがそれは仕方のないことだ。

ただこいつしてともに生活をしているとそれだけ私の行動パターンつていうのかな？

そういうものをインプットしていくものだから教育・指導はしなくてよい。

なのになぜ私がこいつしているのかといつと……。

「人間と見ているから……かなあ」

「私ですか？」

「んー、やつやつ」

いつの間にか声に出していたようだ、聞かれて困る内容ではないからいいけどね。

「私を、人間として……ですか」

「じゃあ聞くけどさ」

私はパンをおなかに流し込む。

「私とIRIAってどんな違いがあると感ひへ？」

私は問う。

人間とロボット。ロボットは喋る。

ロボットは私を起こしにくる。ご飯を作ってくれる。

私の気分に合わせきりちなくはにかんでくれる。

「えっと……それは……」

「演算しても駄目だと思う。これはやついう種類の問い合わせじゃないよ。」

「……はー」

おちこんだよつてつむき、返事をするRIA。

それは彼女にインプットされた

”この場、この状況で一番適すると思われる人間の真似事”だ。
所詮は真似事、この行動の意味などロボットにはわからない。

「じゃあ私は学校行ってくるから、帰ってくるまでの宿題ね」

私はそう言い残すとイスから立ち上がり、玄関へ向かう。

「これ、お弁当です」

「あ、ありがとうございます」

お弁当を受け取るとカバンの中へします。

「じゃあ、よく考えてみてね。いつきまーす

「はいです。いつてうりっしゃい」

玄関を出る。

さあ、一日の始まりだ。

半日、なにもしない学校といつ意味のない行為をする。
意味のない行為。
意味のない行為といえば……。

「なんであんなこと尋ねたんだろう……」

人間とロボットの違い。

そんなもの尋ねるだけ愚問。

ロボットは機械。そこにはプログラムしかない。

でも、それなら人間は？

”脳”という大きなハードディスクを持っているだけに過ぎない。

ロボットとは違い”感情”という拡張子のファイルを保存できるHDD。

そんな認識。きっとその程度のものなのだろう。
いや、それくらい凄いことなのだろう。

きっと、私の脳をUSBケーブルにつないでパソコンで中身を見てみたら

”0”と”1”だけが見えるのだろう。
いやいや、ちょっと特殊なプログラムだ。
”2”とか混じっててもいいかもしない。

「はは……二進数だよそれじゃあ……」

あるかもしねいよ二進数。

……ないな、うん。

神は人間をつくった。人間はロボットをつくった。
ならばロボットはなにをつくる？

人間がロボットが一進数、人間が三進数だと考えると
神は四進数ということになる。

それならばロボットがつくったものは一進数のものになる。

”0”だけでしか己を表せない存在。

ならさらにそのロボットにつくられたなにかがつくったものはどうなる？

……零進数。

すなわち無だ。

” ”で己を表さなければならない。
でも” ”は組み合わせなんて持たない。

” ”は一つなのだ。

人間はたくさんいる。

ロボットだってたくさんいる。

ロボットがつくったなにかはちょっとだけだけだ。でもさういふのなかがつくったものは一つしか存在しない。

「世界に一つだけ……か。まるで神様だね」

神に始まり神に終わる。
私たちは生み出しても、最後は神に行き着き、逆行しても神に行き着く。

全ては神へと回帰する。
神回帰論……なんてね。

「……馬鹿馬鹿しい」

だったら十進数とか十六進数とか凄いわ。
神の2倍も3倍も、4倍も上位の存在じゃないか。
考え方がそもそも違うのかも。

「なら私たちって何進数でできてるんだりうねえ……」

「無限進数」

「へ？」

ふと誰かの声を感じ振り向くとそこには……。

「おはよう水無瀬」

立木和真。
たつきがすま

私のIRIAに唯一興味を示してくれる同じクラスの男子。

「和真か……急に人の妄想にはいつてこないでよ」

まつたくもつて不埒な。
セクハラだ、セクハラ。

「いやいや、なんか興味深い内容だつたんでつい」

「いくら興味深い内容でもセクハラはいけないと思つ」

「え？ こまのつてセクハラになるのか？」

「うわせこ、ならないつての」

よく口が滑つておもつてこむことを駄々漏れにしてしまつ。
これは私の悪い癖だ。

「まあいいや……で、その無限進数つて？」

なにやら意味深な言葉だ。

それはなにを意味するのだろう？

「ロボットつか」

彼は語りだす。

「”0”と”1”の一進数でできるよな？」

それは私の考えていたことと同じ。
というか真理だ。

「なら人間つてどこのがロボットと違うのか・・・」

それも私の考えていたことだ。

IRIAの宿題にもした、愚問のテーマ。

「それは感情だ」

そう、感情。

人間には感情がある。

「感情つて拡張子のファイルはロボットには認識できない。それはなぜだらう?」

知らない……なんで?

「答えは簡単、大容量だからだ」

「それってどれくらい? 1ペタくらい?」

「S/I接頭辞で表すのならせめて一番大きい ヨタ y o t t a をもつてこいよ・・・」

「あ、ヨタ知ってる。途方もない事を表す”与太話”つてその一番大きいS/I接頭辞のヨタから引用したっていう」

「よく知ってるなそんなこと……まあそんなヨタなんかよりもっと大きなものだ」

「え? それって……」

「やつだ……”無量大数”ってやつだ」

「無量大数……つまり……。」

「無限……」

「そのとおり、感情は数字で表す」とはできない。だから感情はプログラミングすることができない」

「それが無限進数?」

「そう、俺たちの脳はそんな大きなものをインストールしているんだ」

『大層な考察だ。

本当にやつならどれだけ楽しいことか。

「でもさ、そんなに大きな容量保存できるならどうして数学の公式が覚えられないのさ」

「数学の公式なんてそんなに容量つかわないでしょ?」

「それは俺たちの脳が感情で埋め尽くされていいからだ」

「おお、なるほど。」

あまりにも容量の大きいファイル”感情”

こんなもんを積んでいるからほかの物事が記憶できない……と。

「なりぢりじて、ぢりやつて神は私たちをプログラミングしてんだるうね」

プログラミングが不能なはずの感情を、神はどうやってつくりた
のだろうか。

「多分、神は”無限”がなにかを知っているんだ」

「無限がなにかを知っている?」

「そう、俺たちは無限は数字で表せない大きななか、としか認識
できな……。でも神はその”無限”を数字以外のなにかで表すこ
とのできる数学者なんだ」

「なるほどね……その”なにか”ってやつをプログラムに組み込ん
で感情を作る……と」

「そり、つまり俺たちは”なにか”でできている。俺たちが理解し
えないなにかでな。まるでロボットが自分たちがなにでできている
のか知らないみたいに」

「それはつまり、自分より上位の者でないとなにでできているかわ
からないってこと?」

「まあ、そういうことになるんじゃないかな?」

「きなりえらい投げやりだなあ……。

「どうしたの急に?」

「学校」

彼の指差す先には学校。

そうだ、この考察、じつはまひ終わり。
ただの暇つぶし、妄言だ。

キーンゴーンカーンゴーン……

チャイムが鳴る。

急がないと遅刻になっちゃう。

「……でも」

でも、最後に気になつたことがあつた。

「ならば神はなにでできているんだろう?」

はははっ、きっとむちやくちや凄いなにかだな。
神って凄いやつなんだなあ……。

そんなことを考えながら今田とこいつ一冊がすきてゆく。
意味のない、意味のない……。
本当に意味のないことだ……全て。

k a n z y o u . e x e

F i l e N o t F o u n d . . .

Start Day?

さて、もうすぐ夏休み。

学校は半日で終わるし、しかも授業も内容のないものばかり。私的には意味のこと。

悪い言い方だと”時間の無駄”ってやつ。

普段妄想で時間の大半を使つてゐるようなやつがなにをいう。とか思つてゐるそこの人、私が妄想をするのはなにも四六時中じやないぞ。

登下校中とか、そういう時にしかやらないんだぞ。あんな朝からぶつとんだような話をしているがまあいつものことだ。

バカな話は私の栄養になる。もちろん精神的な意味で。

「おはよみつ優紀」

「おひす富子」

朝の挨拶を交わす。

この娘は須藤富子。

ボーイッシュなイメージにきりつとした目。そしてなによりかつこいいんだな、性格がさ。

「や、そんな本人の前でベタ褒めされたってなにも出ないよ?」

「あつれ、また口に出てた?」

「その癪直したほうがいいよ、なんかこう考えが丸出し……みたいな?」

ふむ……いかんいかん、私の脳内が丸出しなんて恥ずかしすぎる。

「いやだからまた口に出していい……」

「癖だから仕方ないんだよつべくややしい……でもつぶや
いちやうー！」

「あのねえ……」

あきれた顔の友人A。

朝からこんなバカと一緒になつてご苦労様です。

「ねえねえ、なんの話？」

そこに参上しますはおつとり系筆頭、天富春香さんですよ。
ボーッとした表情に某パンダのように垂れた目。
そしておもわず手に絡ませたくなつちやう髪い髪。

「へブン状態……！」

「なにを言つとるんだあんたは……」

「つるさい友人A、私は今脳内でこの垂れパンダの髪をだな……」

「誰が友人Aだ、そんでもつて伏字の使い方がどうにも間違つてるぞ」

「あ、おお……ツッコむねえ。でも脳内で髪触るのはいいんだ」

「ツツ」「ハハ」われんだけだつての。」

……はつー

「……」今まで来て私は春香をスルーしてこる」と云はづいた！
まづいじり覧、スルーされて涙田になつてゐる春香さんが田の前に……

「え、なに？」

別に涙田でもなんでもなかつた！
泣かないのはいい子だけどそれはそれで寂しい。

「もう慣れただけだよ……」

ですつて。

おつとり系の癖にあたふたしないとか何様のつもつだ！

「それで、なんの話をしたの？」

改めて尋ねる春香嬢。

え、なにそんなに気になりますか。

「「」のおバカのこつもの癖にこつての話だよ。今も現在進行中の。

「ああ、こつも考へてゐる」とが口に出ひやうつてこつ……

すこませんでしたね、色々と黙々漏れで。

「あ、やつこやれ」

富士がぽんと手を呂きながら携帯を取り出した。

「優紀は何レベルになつたの？」

「? レベルつて……?」

「なにボケてんのさ、Pandora Protorionモバイル版だよ。略してPモバ。」

「モバイル……版?」

まずijiで説明しておこう。

Pandora Protorion（通称PPとかパンプロと呼ぶ）というのは今世界中で大人気のメディアだ。

まずRPGゲームとして発売され、どんどん続編が作られていった。

漫画になり、そしてアニメ化、小説にもなり今や知らない人はいないぐらいの人気ぶりだ。

なにを隠そう、私もPPの大ファンであり全てのゲームはやりこんでいる。

PPシリーズのキャラたちが集つて戦う格闘ゲーム、PPCronos Fightってゲームが

あつて私はホームのゲーセンではチャンプとして君臨している。ちょっと話がずれたけど、ようは私はPPが大好きだつてこと。そのモバイル版……? なんてのは聞いたことないけど……。

「まさか優紀……知らなかつた?」

知らないよそんな情報!

「そ、それつていつからなの!?」

「金曜日の二一時」からだから……三日前くらいかな？」

すかさず携帯を取り出しへの公式サイトへアクセスする。画面をどんどんスクロールしていく。

概要……ふむふむ、携帯オンラインゲームなのか。

待て　いよいよギンク頭目が下品な名前を発見した

これつてまさか……。

「ねえ、和真は？」

ユーモア登録を済ませながら私は尋ねた。

立木君なりとおもてトイレに行くって言つてたよ。もつ授業始まるの……」

あの野郎、授業サボつてPモバやる気だなー

さつきの70レバは絶対和真だ！

くう……すぐこ進いついてせるからー！

凄く待ちどおしいこの時間。

ハンドパワーでも送り込んでやろうか。

「あのね優紀、念力送つたってメールはすぐに届かないって」

おおいつと、といひの行動までもが表に出てしまひとせ……反省

省。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

おひ、メールの着信音だ！

「今日の授業時間は有意義に過ぎないわ……」

おもわず怪しい笑みをこぼしてしまつ。

「わ……こいつ授業サボる気だ……」

「失礼なつ、ちょっと携帯触るだけだよ」

そろそろ授業の始まる時間だ。

さあて……れつづぱーりー！つてね。

そうして授業ゲームが始まった。

ポチポチポチと……。

携帯のボタンをひたすら押している私。

このP.P.Aの世界觀はファンタジーであり剣と魔法が飛び交つものである。

キャラクターたちはプロトという扱い捨てで話すとすれば魔力のようなもので戦う。

このプロトは”成すべきことがあるかぎり使える”便利な、そして強力なものである。

Pandora Protexionと、タイトルにもあるとおり重要なファクターであるのはお分かりいただけるだろう。

しかしこのプロトは敵も使っており、傷つけるための能力として扱われてきた。

第一作目、いわゆる無印PPのラストでプロトは”大人になれない者への救済措置”だということが発覚するのだ。

「力がないものはなにも成しえないが力あるがぎりなにかを成すことは可能である」

これはPPの重要な人物「パンドラ」の言葉であり、人々がプロトを使えるように仕組んだのはこの人物だ。

確かに力を持つことで今まで成し得なかつたことができるようになつた。

しかしその力のせいで傷つく人も増えた。皆が幸せにはなれないのだ。

傷ついた人は逆に高みを目指してやろうと決意する。するとプロトに目覚める。

そのプロトを使って幸せになれば誰かが不幸になる。

この悪循環こそが狂氣の男パンドラの狙いだつたのだ。

開けてはならない箱の中身は人を不幸にする能力だつたのだ。

そんな中、一人の青年が立ち上がつた。

光の剣士シユナイダーは人々ではなくパンドラこそが悪だと悟り、その討伐の旅出る。

ちなみにシユナイダーは私の一番好きなキャラだ。

ゲームのラスト、シユナイダーは仲間とともにパンドラ退治に成功するが彼は奇妙な言葉を投げかけたのだ。

「まだ子どもだな」と……。

パンドラは消えたが以前としてプロトは消えないままだ。

世の中の辛い現実を受け止め、自力で頑張ろうとする人にプロト

は発現しない。

つまりプロトを持つ者はまだまだ皆子どもであり、それを持たないことこそが大人の証なのだと……。

そうパンドラは言いたかったのかもしれない。

戦いを終えたシユナイダーたちのプロトはまだ消えない。

彼等もまた、やり残したことのある子どもだったのだ……。

と、これが初代PPの大まかなストーリーだ。

このストーリーが人気を呼び、続編がたくさん出た。

大人になるためのRPGというジャンルはいまでも色あせる」となく続いている。

今回そのモバイル版を今授業中にも関わらずプレイしているのとまずユーザーネームを決める。

私は優紀からとつて”You”にした。

次に使用キャラを決める。

使用キャラはもちろん初代PPの主人公シユナイダーだ。

シユナイダーは光の剣士と呼ばれており、プロトを使って光の剣を生成することができる。

癖の無く、使いやすい接近戦主体のキャラだ。

今回のPモバでもそれは変わらず序盤のモンスターをばつさばつさと切り倒す。

授業も4時間目といつところでもレベルは12になっていた。

「そういえばこれってオンラインゲームなんだよね……」

フィールドを見ると何人がが集まって一緒にモンスターを倒している。

経験値分配システムなるものでパーティ全体に経験値がいきつくそうだ。

さらにパーティボーナスというものがおり一定の数のモンスターを倒すと経験値が少し増えたりもする。

つまりにかしらパーティは組んでおいたほうが得なのだが……。

「富子と春香は……授業ちゃんと受けたるしなあ……」

ということは適当にパーティを検索してどこかに入れてもいいしかないわけだ。

「ん？ 受信メール一件……？」

一度ホームサイトに戻り個別アカウントページに戻ると一件のメールが届いていた。

どうやらパーティのお誘いらしい。
まず一件目のメールには……。

「Hello! PP World! 管理人より」と書かれて
いる。

どうやらゲームを始めた時に届くメールらしい。
ならばもう一件はなんだろう?
まずはタイトルに目をやる。
そこには「神様」とだけ書かれている。
内容はこうだ。

「ようやく出会えましたね。もう何年も待ちわびておつまました。
ナナよつ

と書かれている。

画面をスクロールするといのコーナーの招待を受けますか?との

文字があった。

「どうやらパーティのお誘いらしい。

ぱつと見ではただのいたずらメールかもしれないが優紀はこの言葉を知っていた。

「確かにこれってPP? 天使編の中盤で敵の堕天使がシユナイダーに
言つ台詞だよね……」

相手はそういうのPPファンらしい。割かしマイナーな場面の台詞をチョイスしてくるあたり少し自分と重なる部分もあるかもしねれない。

「いいよ、一緒に戦おうじゃない」

優紀はくすりと笑うとメールを送り返した。

「では俺の手を取るがいい。おまえが俺に……否、世界に相応しい器なのか確かめさせてもらひや」

相手に留つて原作どおりのゲームの台詞でメールの文章を送る。これでナナというコーディナーとパーティを結成したことになる。

同じパーティ内の仲間のステータスが表示される。

Y O U ↴ V 1 2 N A N A ↴ V 3 3

う……結構レベルに差があるなあ……。

こりや頑張らないと。

すると今度はパーティチャットのウインドウが開かれる。

「こりゃ

「まだ

ナナとこりう人物からのチャットだ。

「」これらも送り返す。

「よくあの場面がわかりましたね」

さらに返事が返ってくる。

どうやら私があの台詞の元ネタを知っていることこの间的話だ
る。ア。

「RPGは結構やりこみましたから」

「そうなんですか、私は?が一番好きなんです。YOSHIOさんは?」

「格ゲーのクロスファイトが一番好きかな? RPGならやっぱ初代
です」

「クロスファイトですか、私もやつたことがありますが全然下手です
ね」

「一応私ホームのチャンプなんですよ」

冒険そつちのけでRPGの話で盛り上がる一人。
そんな中、私の一言でチャットが一時的に止まる。
怪しまれた?いやでも本当のことだしなあ……。
しばりぐすると返事が届いた。

「……もしかして”姫”ですか?」

!?

なんで私のホームのゲーセンでの呼び名を?
確かにあそこは色々盛んなところだけ……。
どうしよう、なんて答えようか。

嘘をついてもなんだし……」

「はい、うつですよ。もしかして地元の方なんですか?」

とうとう無難に返す。

「そうですね、あそこのゲーセンにはたまに行きますよ

なんてこいつた……。普通に知られているじゃないか。

次はなんて変えそつか迷つてこたりながらメッセージが届く。

「あ、時間が来たので少し落ちますね。ではこれからよろしくお願
いします」

そうするとナナはログアウトしていった。

キーん「ローンカーンローン……。

ちょうどその時授業終了を告げる鐘が鳴り響く。

これで学校終了だ。

私もログアウトするとそれと同時に帰りの準備をする。

「あ、この優紀ー工サボる気か!」

教室を出ようとすると廊下をかけられた。

「じゃあね西子、また明日ー。」

有無を言わさず手を振ると私は走って逃げることにした。

H R なんて一番無駄な時間だからね。

さて、放課後はなにをしようかなあ……。

Game to Fight?

さて、やつてきたのは野中FRTといづゲームセンター。最近行つてなかつたので腕が鈍つっているかもしねない。

「おお、やつてるやつてる」

今日もゲーセンの中は人であふれかえつていて、もちろんP Pの格ゲーも盛り上がりつづだ。

この格ゲーのシステムは2D画面で、ボタンはS、M、L、Pの4つにスティックが2本。

Sは弱攻撃、Mは中攻撃、Lは強攻撃、Pはプロト攻撃（特殊行動）となつていて、

それぞれのボタンは各スティックに2つずつついており握るよう、押すボタンと親指で押すボタン配置となつていて、格闘ゲームにしては珍しいこの2本のスティックにも役割がある。

まず左側のスティックで移動やジャンプができる。

そして右側のスティックでは技を繰り出す際のコマンド入力を行うのだ。

この方式を取ることによつコマンドと移動が別になり技を出すときの誤移動などが減るので。

ここで格ゲーにおける基本知識を教えておこう。

まず「マハンドを隠す」とは載する際にいぢこじ下、右下、右などとほ言わ

すに電卓のテンキーをスティックに見立て236、とこつひこ方をするのだ。

電卓は基本的に

7 8 9
4 5 6
1 2 3

という並びをしておりこの場合は5を中心にして考えるのだ。

普通の格ゲーならしゃがみキックをするときには $\downarrow K$ （下入力しながらキックボタン）と

入力するのだがこのPPでは $2 \cdot 2 M$ （左を下、右も下入力しながら中攻撃）としなければならないのだ。

この一見すると面倒なこのシステムのおかげでしゃがみ上段攻撃（ $2 \cdot 8 M$ など）なる攻撃もできるのでよりテクニックの要求されるゲームになっている、というわけだ。

「さあて、今は誰と誰が戦っているのかな？」

たくさんのがんばりを搔き分け画面を覗く。

1PはPN・ホタテ貝選手のシユナイダー。

2PはPN・QMG選手のギューカク。

シユナイダーは近接戦闘が得意な剣士であり上位キャラである。一方のギューカクはパワーはあるものの動きが遅く使いにくい下位キャラである。

普通に戦えばギューカクに勝ち目はないのだが……。

このQMG氏は魔法闘士と呼ばれておりギューカクを使わせたら右に出るものはいないという人物である。

ホタテ貝選手はそもそもシユナイダーがメインキャラではないはずなのだが……。

「お、おっシユナイダーが押してる?」

試合はどちらもシユナイダー優勢の様子だが、OMG氏のギューカクが反撃にでる。

「弱弱中強、はい、はい、そこでハンマー入れてもひとつ入れて……」

ギューカクがコンボに入りその様子を口ずかぬように実況する。

「浮き上がりでHリアルほいほい……凄いいー」

ギューカクのようなパワータイプには珍しい10コンボを決めて大ダメージを『えそのまま倒しきる。

「うわー……これ私勝てるかなあ……」

成功率のかなり低いといわれているコンボを決めたOMG氏のギューカクに少したじろぐ優紀。

「お、姫だ!」「え? マジで?」「姫k t k r! -!」

優紀の登場にざわつく周りの空氣。
どうやらこのゲームセンターのホームチャンプの名は伊達ではないらしい。

「さてと、久しぶりだけど大丈夫かな……つと

当の本人は涼しい顔をしながら筐体にコインをセットする。
使用キャラはやはりシユナイダーである。

試合が始まる。

1PはPN・姫選手のシユナイダー。

2PはPN・QM・G選手のギューカク。

優紀は開幕バックステップをとり距離を離す。

ギューカク相手には接近戦はいわゆる死亡フラグである。
すかさずPボタンを入れ込み光の剣を生成する。

シユナイダーのPボタン、すなわち特殊行動は光の剣の生成である。

シユナイダーには光の剣ゲージというものがあり生成している間
は常に消費されていきゲージが0になると自動的に剣は無くなり一
定時間使えなくなるというものである。

剣を出している間は強く、出せない間の弱い立ち回りをどうカバーするかが優秀なシユナイダー使いの課題である。

まずは剣でけん制。この光の剣はなかなかリーチが長く使い勝手のいいものである。

一時剣は終い、すばやい動きで接近する。

ギューカクは大きなハンマーで叩き落とそうとするがシユナイダーはそれを回避し、裏側へ回るとそのままS、Mボタンを同時押ししてギューカクを画面端へ投げる（2ボタン同時押しで投げ行動ができる）。

バウンドしたギューカクに対し、すかさず剣を生成しSM-L23-L6-Lの基本コンボで攻撃を加える。

さらにその攻撃の隙をPボタンの剣をしまうモーションでキャン

セルしさうに「そこから2-L-236」でつなぎ

Pボタンの剣生成でキャンセル、さらにつづいて「236」の「コンボ」で大ダメージを「え劍をしまつ。

「おおっ！出たぞ姫スペシャル！」

ギャラリーからは歓声がおこる。

この何度も剣をしまつては生成し、しまつては生成しながらつなげるコンボは単純にダメージが高いだけでなくコンボ終了時に光の剣ゲージが満タンになつておりその後の立ち回りがかなり有利になるコンボである。

このコンボは優紀が開発したもので俗に”姫スペシャル”と呼ばれているのだ。

さらに優紀は214Pで上空から光の剣を生成するシャイニングレインを放ち相手を固め攻めを継続する。

その後もガードの崩し、立ち回りなどの徹底した動きでQMG氏にストレート勝利する優紀。

「さあ、どんどんかかつてきなよ！」

まるで子どものようにガツツポーズで喜び次の対戦相手を募集する優紀の姿はいつも思慮深そうなものは一切感じられない。

2人、3人と次々に対戦相手をKOしていくうちにどんどん時間がすぎていく。

気づけばもう午後のいい時間帯になつていた。

あまり帰りが遅くなるとIRIAを心配させてしまうかもしねない。

ゲームもそこそこに優紀は家にかえることにした。

い。

「ただいまー」

夏といえどもすでにしあたりが暗くなる時間、優紀は家に帰宅する。

「おかえりなさい優紀ちゃん」

「ただいまIRIA」

優紀はすっかり夕飯時の匂いにつられ思わずキッチンに顔を出す。

「今日の『』飯はなに?」

「はい、今日はから揚げですよ

見ると確かにたくさんのから揚げが揚げられている。

「つていうか凄い量……いまに始まつたことじやないけど

そう、IRIAはなぜかいつも料理をたくさん作る。
まあ食べてみたら結局いつの間にか完食しているのだが。

「はい、出来上がりです」

そういうとIRIAは食器をテーブルへと運ぶ。

私はとことんおひきをするといつも

「私の仕事ですから」

と、IRIAは譲りうつしないのだ。

そんなわけでついあえずテーブルにつく優紀。

「いただきまーす」

「はい、じゅわー」

優紀が食事を始めるとH.R.I.Aはいつも隣に座って食事の手伝いをする。

自分で食べられるからとこいつとこいつも

「私の仕事ですから

と、やはり譲りうとしない。

普段は素直なくせにこんなところだけは妙に頑固なのだ。
まあそんな日常にもすっかり慣れてしまつたので私はもうつなにも言わない。

こんなことを繰り返していたら私は料理はおろか食事の仕方まで忘れてしまつかもしれない。

「それはおおげさですよ優紀ちゃん」

と、いつの間にやら声に出してこたして言葉にH.R.I.Aが突っ込みを入れる。

「おおげさといえばこんな食事 자체がおおげさだとおもつんだよねえ……」

私は食事中、まったく手をあげることではなく終始H.R.I.Aに“あーん”をしてもらつのだ。

恥ずかしいところが、ひとつもない感じもある。

「それは私の」

「仕事ですから、でしょ？」

いつもの台詞を発しそうするIRIAの言葉にかぶせるよつと優紀が先に言つてやる。

「わかつてこいるのだつたらじつとしていてください。まー、あーん」

いつもの日常では私がIRIAのイニシアチブを奪つてこるので食事の時だけこの始末だ。

「そのままやられたい放題なのも癪なので反撃してやることにした。

「さういやIRIA、私の出した宿題わかつた？」

宿題とは今朝がたにIRIAに質問した”ロボットと人間の違いについて”的だ。

「この口ボ娘はなにか答えをみちびきだしたのであるつか？」

「ないのです」

一言だけ、IRIAが答える。
なんだつて？

「あー……IRIAさん? ないのです、とは?」

「」の言葉の意味を瞬時に理解することができず口元に聞を返す。

「ですから、私たちに違ひはないのです」

えつと……つまり私はH.R.I.Aと一緒にいたんだよ」と。

「あのね……いくらなんでも違うところはあるでしょ」

よもやこんな答えが返ってくるとは思わなかつた。もつとあたふたする姿が見られるとおもつっていたのよ。

「まああんたは食事しないでしょ」

「できない理由があるのです」

「そんなシステムを積んでいないからでしょ」

「違います」

「何が違うの」

「違うのです」

「だから何が

「優紀ちゃんこなにわからなことあります」

「はあ? なにそれ、否定をするなり説明をしてみ

「@・・@・233@】・5 - (& a m o .) 82だからです

「せひ、せうつすべくノイズを出す

「ノイズなどだしてこません

「きっと演算処理に失敗したのね、今日はもつジャットダウンしない」

「違います」

「だからなにが」

「私は） こ ろ る る + + + + + + + + 1 p」

「だからなにが！」

「……」

埒が明かない。

今日のIRIAは一体どうしたというのだろう？

こんなに外見は人間なのに、この子はやはり融通の聞かないロボットだ。

そもそもこの質問自体がこの子に対しての差別発言だったのかもしれない。

”ロボットと人間の違い”？

ずっと一緒に暮らして、仲良くして、そんなことをはっきりとさせてどうする？

いまさらそんなことを突きつけて、一体何になるというのだろう。IRIAに悪いことをしてしまった。

軽率だった。

「『めんIRIA……私はあなたを下に見ているとかそんなんじゃなくてただあなたならどう答えるか興味がわいただけだったの」

「いえ……優紀ちゃんは謝らなくていいのです。まだ不完全である私の不始末です」

「IRIAは不完全なんかじゃないよ」

「私は不完全です」

「そんなことこつちや駄目だよ」

なんていつたらいいんだるうか……。

「そんなこと言つたらさ、私なんか数学はできないわ色々んな忘れ物はするわ落し物はするわりバサ昇竜（格闘ゲームでのテクニック。なんらかの技で相手の攻めを切り返すこと）に失敗するわでミスだらけだよ?」

それに比べたらこの子なんて私なんかよりも精巧に生活している。

「やつこつ ものですか」

「やつこつもんなのよ」

言葉を選ぶつて大変だなあ……。

私の思つていることがそのまま伝わればいいのに。

「伝わっていますよ」

少し笑顔になつたIRIAが私の目をみて言へ。

「優紀ちゃんの思ひはいつでも丸聞こえです」

「そうか、 そうだつたね。」

「そうか、 そうだつたね」

「はいっ」

そんなやり取りがおかしく感じて、一人は万遍の笑みで笑いあうのだった。

食事を終え、自室に戻った優紀は一日の疲れからベッドに倒れこむ。

オーディオに手を伸ばし音楽をかける。

今日はベートーヴンの” ハリー・ゼのために ” だ。

「はー……疲れた」

まさかIRIAがあんなに”人間っぽい”とは思わなかった。
いままではやつぱりどこかで一線を引いていた部分があつたがやはり私にとってIRIAは家族だ。

そんなどこかに違いがあるとかないとか、考えるのはやめよう。しようもないこと考えるくらいならなにか楽しいことをしよう。

そうだ、Pモバでもしよう。

優紀は携帯を取り出すとさっそくPモバを起動する。
デフォルメされたショナイダーがフイールドに出現する。

♪こんばんは、姫♪

チャットメッセージが入る。

今日同じパーティになつたナナからのメッセージだ。

♪こんばんはー♪

私もあいさつを返す。

知らない人に姫って呼ばれるのには抵抗があつたがこのナナにはある程度好感を抱いているのであまり気にならなかつた。

＜今日も凄かつたですね、姫スペ＞

姫スペというのは私の開発したコンボ、姫スペシャルのことだろうが問題はそこではない。

この人物は今日、あの場にいたのだ。

＜見てたんですか？＞

＜はい、じつくり見せてもらいました＞

向こうは私のことを知っていて、私は知らないなんてなんかするい。

＜声をかけてくれたらよかつたのに＞

＜少し恥ずかしかったもので……＞

まあそれはそうだ、私とて話しかけられたとしたら緊張していたに違いない。

＜そういうえば姫は”プロトモジュール”って知っていますか？＞

続けてナナからメッセージが届く。
プロトモジュール？なんだろう？

＜知らないです、なんですかそれ？＞

＜通称PM。これを携帯に装着するとプロトが使えるようになるのです。＞

……はい？

プロトットレーラーの世界で魔法つけていたよ？

へえっ～どうして？

……とこいつたこいつで配布されてくるおもちゃですか

あ、なんだ……おもちゃとか。

具体的にはそれはアモバの機能を拡張するもので色々なことができるようになります

へえ、それは凄い。

ちょっとやってみたいかも。

なるほど、それはどうやって売ってるの？

それが今は試験利用中で非売品らしいんですけど

なんだ、残念。

でも世界中の何人かの人はすでに手にしていて、色々なサービスをうけているらしいです

それはずるいなあ。
私もほしいぞ。

なんとか手に入れる方法はないの？

「セレ」で姉の出番ですよ

ん、これまたどうこうことなのだろ？。

「私の出番？」

「今週の日曜日に野中F.R.TでP.Pクロスファイトの大会が開かれ
るそうです。その優勝景品だそうです」

ほほう、それはなんとしても勝ちに行きたい。
これは明日から修行しないといけないな。

「わかった、優勝できるように頑張るよ」

「はい、私も応援しますよ」

こんなチャットをしている間にもヤモバでモンスターを倒すのは
怠つておらず結局寝る時間帯になるとレベルは30になっていた。
ナナもちょこちょこやっているらしくレベルは41になっていた。

「あら、もうこんな時間か……そろそろお風呂に入つて寝ようかな

「そろそろ落ちますね、ではまたノシ」

そうチャットのログに残すと私はお風呂に入ることにした。
自分の部屋を出てリビングに行くとエリカと誰かがなにか話を
していた。

「……つていうかあいつは！」

「和真っ！」

「え？ ああここんばんは水無瀬」

なんでこいつがこりこりするんだね？
というか、IRIAとなんの話を？

「悪い水無瀬、俺もう帰るから……じゃあまたな

そういうと待つてよ、なんであなたがこりこり

「ちよっと待つてよ、なんであなたがこりこり

それもIRIAと……。

「まあ……ちよっとな。もう帰るわ

そういうと和真は私の手を振り切って家を出て行った。
なんなのよあいつ。

人の家に上がりこんでおいてあの態度。

「ねえIRIA、和真と何の話してたの？」

あくまで特に気にしてないといつ風に問いただす。

「…………すこません優紀ちゃん」

「どうやら言えない」とらしく。

ロボットにプライバシーはいらない、とまでは言わないけど私は
人蚊帳の外みたいでおもしろくない。

「 もう……じゃあ私も風呂に入つてくね」

色んなわだかまりを抱えつつ私は当初の目的お風呂に入る
ことにした。

不貞寝……不貞お風呂つてやつかな。

次の日、昨日の「」となじゅつかり忘れてつもビジョツの朝を迎えて
いた。

「 おはようHRIA」

「 はこ、おはようHRIA」

「 うん、いい笑顔だ。」

「」の子を見てみると今日も頑張るぞって気になる。

「 今日の朝」はんは?」

「 今日は梅のジャムパンですよ」

……はい?

それは昨日も食べなかつたつけ?
それについての話もしたと思つんだけビ……。

「 あのや、HRIA」

「 はこ、なんでしょ?」

「なんで2日連続で苺ジャムなの？」

HRIAは少し困った顔をしたと思ったら急に頭を下げてきた。

「いめんなさい、すぐ別のものを用意します」

そうこうしてテーブルの上の朝ごはんを片付けようとするHRIAを私は静止させる。

「大丈夫大丈夫、昨日も言つたけど”別にいいけど嫌”なだけだから、ね？」

でも……と、渋るHRIAを半ば無理やりイスに座らせると私もその隣に座る。

「ま、ひ、はやく食べなさいよ。自分で食べなさいよ。」

「だ、駄目です。私の仕事です」

すぐさまパンを適度な大きさにちぎつ私の口へ持ってくる。

「ん……んぐ、するよHRIAは」

パンを飲み込みわざとふてくされたよつて私は

「だつてこんなに優しくて可愛いくんだもの、なにも言えなくなっちやう」

「あ、そんなこと……は」

「あはっ、照れてる照れてる」

少し頬を赤く染めるH.R.I.A。
でもこれはプログラミングされたことであつて……いや、そんな
ことを考えるのはもうよくなづ。

「せり、早く食べさせてよ。学校に行かなきや」

「は、はこ優紀ちゃん」

「うして、なんだかんだとありながら私たちも暮らしていく。
こんなひねくれた私にとってH.R.I.Aは最高のパートナーなのだ。

「こ」馳走様

「お粗末様でした」

早々に食事を終えると私はカバンを手に取り玄関へ向かつ。

「じゃあ、行つてくるね」

「はこ、こつてらっしゃこです」

今日の学校もまたPモバでもして過ごすかな……。

そんなことをのんびり考えながら私は学校へ出発するのだった。

Start Day?

家を出た私を待っていたのは和真だった。

「なんでいるのさ」

「なんとなく、一緒に行こうかなと」

「まあいいけども」

意味がわからないやつなのは前からだ。
別に困ることも無いのでとくに突っ込むこともないだろう。

「女が邪悪であることを証明せよ」

は？今なんと？

「アメリカで有名な冗談だよ」

ああ、もしかしてGirls are evilのことかな？

証明：

女には金も時間もかかる (girls require time and money) から

Girl = Time × Money

時は金なり (time is money) だから

Time == Money

金は諸悪の根源 (money is the root of all evil) だから

Money == (Evil)

最初の公式

Girl == Time × Money

に第2式を代入して

$$\begin{aligned} Girl &= Money \times Money \\ Girl &= (Evil) \times (Evil) \\ Girl &= (Evil)^2 \\ Girl &= Evil \quad (\text{証明終}) \end{aligned}$$

QED!

……こんな感じだつたかな？

まあわりと簡単かつ、ちょっと面白い話だよねこれ。

「大正解だ、さすがは水無瀬だな」

「4ちゃんまとめスレで見たことがあるしね」

「ん?なんだそれは?」

「ああいや、「4ちゃんの話」

なんだ、意外とそつち方面の知識には疎いのか。

「それで？」

「ん？」

いや、ん？じゅなくして。

「なんでこきなりそんな話？」

「ああ、その」と

彼は空をぼーっと見上げるとまたそのままの先になこかを見るよいつて
言った。

「俺とお前には、どれだけの差があるのだろうか」

差？特にないことは……思ひナビ？

「いや、今の知識な。昨日テレビで見たんだ」

さつきから話が繋がっているのか居ないのかよくわからなー。
「こいつは一体何が言いたいのだろ？。

「そりなんだ。なんチャンネルで？」

「4チャンネル」

なるほど4チャンネルか。

ちなみにこいつでこいつ4チャンネルとはテレビのチャンネルの「」と

であり私がさつきいつていた

”4ちゃんまとめスレ”とはまつたくの無関係だとこいつひとを理解いただきたい。

まとめスレといつのは某大型掲示板に掲載されているネタをまとめてくれているサイトである。

「でも4チャンネルなら私も見てたけどなあ……」

そう、私も同じチャンネルを見ていたはずだがそんな放送は見なかつた。

「夢でも見てたんじゃないの？」

そうだ、きっとそこに違いない。

彼は寝ぼけてたんだ、きっと。

「違うね」

そんな私の考えを一言で否定する彼。

一体なにが違うといつのか。

「俺は確かにその放送を見た。これに間違いはない」

ふむ、ならば私が夢を見ていたとでも？

「だが水無瀬、お前は同じチャンネルをつけていたにも関わらず放送を見てはいけない。これにも間違いはない」

それはそうだけど……でもそれには矛盾が発生してしまつ。
その一つが成り立つ論理とは……？

「例えば……”俺の見ている世界とお前の見ている世界に違いがある”とすればどうだ？」

なるほど、パラレルワールドってやつね。

「なりその差ってどうで生まれるんだろう？」

「やつ、俺はそれを聞いたかつたんだよ」

相変わらず遠まわしに話をするやつだ。

「放送を見た俺と見てないお前。なぜこんな差が出てしまったんだ？」

「うーん、難しい問いただな。
なぜ差が出来しまったか……か。

「やっぱあれじゃない? どっちかが寝ぼけてて夢と現実がじつちゃになってるんだよ」

そうとしか言ことづがなー。

「そうだな……お前は寝ぼけていたんだ

ふつ、と笑いながらこちらを見る和真。
え? 寝ぼけていたのは私のほう?

「そんな……私は確かに見てないよ」

「絶対に、だな？」

「うそ、絶対」

「それは記憶に克明に残っているんだな？」

「も、もちろん」

「どうした？自信がないようだが」

「うーーーあんまり突っ込まれると自信なくなっちゃう……」
「ううがあんまりとも自信満々だからうちは間違つてこないよ……」
「思えてへる。

「俺はさ、なんか凄いやつがつい昨日世界作つて俺たちに適當な記憶を与えたーなんていつたら多分信じるみ」

どうかで聞いた話だな、それ。

「こんなに情報がぱらぱらになるなんて、適當なやつなのね」

「うこうと彼はくっくと笑つ始めた。

「やうだな、ほんと適當なやつだ

「なによその笑いは

「いや、なんでも」

「ほんと変なやつ」

「こいつと話をじてこむと楽しそうなやつな、多分びっかりだな。うん。

「それで、あんた本当にそんな放送見たわけ？」

「さあね」

えらい投げやつな返答をありがとひ、ばか。

「どつたの急に?..」

「学校」

彼の指差す先には確かに私たちが通うべき学校が目前にあった。
それにしても……。

「私と和真にどんな差がある……か

あいつは一体どんな世界を見ているのだらうか。

……いや、馬鹿馬鹿しい。

見てくる世界など同じに決まっている。

また適当なことを言つて私を混乱させようとしているんだ。

なにが”さあね”だよ。

そんな放送はやつてなかつたよ。

まあでも、登校の時間潰しにはなつたからいつか。

いつしてまた私の半日学校生活が始まった。

「おはよおはよ」

「ああ、おはよ」

声をかけてきたのはもう少しきラスマイトの姫子さん。

「あんた結局昨日エラサボつて……」

ん、エラ?

ああ、エラじゃねばそんなことわあつたつけ。

「過ぎた事をこつまでも気にしちゃ駄目だぞ、みやびー」

「誰がみやびーだつての。ま、別にここにかどれ」

「え、これからみやびーって呼んでいいの?」

「違う…エラちじやない!」

相変わらず朝から元気な娘だ」と。

「誰のせいだよ、まつたく」

「あら、聞いてたんだね。

「エラじゃもつまる聞こえだよ。で、今日も授業は受けないわけ?」

「うん、なんたって私には心強いＰモバがあるしね」

「はあ、あんたに教えなきゃよかつたよ。まあ教えなくともそのひち勝手に気づいてたと思つけどね」

まったくもつてその通りだよ。

さてと、ちょっとログインしてみますか。

まずはホームサイトへ。

色々なニュースやらなんやらが更新されている。

ランキングに田を通すとやはりといつべきか、カズブの名前があつた。

レベル122……正直やりすぎじゃ ないのかと思つ。

ランディングでいうと4位、かなり上位者のようだ。

私も頑張ろうっと。

こうして今日の授業^{ゲーム}が始まった。

はてさて、いつもなら暇なこの授業の時間。
でも私はいい暇つぶしを手に入れた。

それがこれ、Ｐモバである。

携帯オンラインゲームであるＰモバはいつでもどこでも気軽に楽しめるものだ。

たとえそれがいまのような授業時間でも、ね。
ログインすると同じパーティであるナナがいた。
なんだかいつもいるイメージがあるけど……。

↙ここにむけまーる

とりあえず挨拶のメッセージを送つておく。

↙ 美びてこるへ

あ、早いお返事で。

とりあえずモンスターを倒して経験値を稼ぐことにある。
私が今いるのはレコンキスタ地方といつ始まりの地點から少し進
んだ地方である。

なぜなら現在レベル30である私にはこのあたりがちょうど二
モンスターの強さだからだ。

しばらく戦つていると別の場所に届たであるナナがこちらへや
ってきた。

↙ 修練の滝というのは存知ですか？

やつてきたと同時にメッセージが来た。

修練の滝？確かにP.P.シリーズでは毎回お話をなる良いレベル上
げの場所だよね？

↙ はい、それが今日のアモバにも実装されるそなんです

おお、それは嬉しい原作再現だね。

↙ それはどこにあるの？

↙ はい、このレコンキスタから南のほうへ歩いていた先にある
そうです。今から私行こうとしてたんですね

↙ そうなんだ。じゃあ一緒に行こうか？

↙ はー

おお、ナナがいると冒険がスムーズに進んで良い感じだ。レベル的にも頼りになるし、色々な情報も教えてくれる。昨日の大会の話だつてナナから聞かなきゃわからなかつたことだしね。

レコンキスタから少し離れるとモンスターも徐々に強くなつていがナナと同行しているのでやられてしまうことはまずない。

それに加えナナのキャラクターは墮天使エリアという魔法専門キヤラであり、回復魔法にも長けている。

私は回復してもらえる上にステータスマップの魔法までかけてもらえてるので少しひりい自分より上位のモンスターが現れようと倒すことが出来た。

しばらく進んでいくとなにやら大きな崖が見えてきた。
どうやらこれがさつき面づいていた修練の滝らしい。

「あ、ここですよ姫

ナナの後に続き修練の滝へ入つていくとメッセージワインディングにて

”場所限定魔法EXP×1.5”

という文字が表示された。

どうやらこの場所でモンスターを倒せば経験値が通常の1.5倍に増えれるらしい。

ここならばレベル上げの効率も上がるに違いない。

とは言つてもどうやらこの場所には制限時間が設けられているらしく一日に1時間しかいられないらしい。

なんとなく精神との部屋を思い出したのは私だけで良い。いや、タイムセールとかにも似てるか……違うか？

まあいいや、果てしなくどうでもいいなこんなこと。

とにかく時間が惜しいのでさつとモンスターを倒していく」とする。

戦闘のローテーションは大体こんな感じだ。

まずナナが私にステータスアップの魔法をかける。
私が前にでてモンスターとの戦闘に入り、ナナはその間に攻撃魔法の詠唱をする。

私が近接戦闘でいくらかダメージを『えた後、ナナの魔法で止めを刺す』という作戦である。

しかしこの作戦ではナナの魔力消費が激しいので時には私が一人で戦つたり、微力ながらナナも近接戦闘で援護しながらの戦いもしたりした。

そうしている内に一時間目の授業終了を示すチャイムが鳴つてしまつたので一度ここでログアウトすることになった。
レベルはほんの数分で6上がり36となつた。

さて……休み時間か。

少し喉が渴いたのでなにか飲み物を買いに行くことにしよう。
そうして席を立ち上がるとなにか後ろに気配がすることに気がついた。
な、なんだらう……お化けか！？

「……そんなわけないでしょ？」

振り向くとそこには私のツツ『』をしつつあきれた顔をしたクラスマイトの皇円寺姫竜さんがいた。

整った顔立ちに長い綺麗な髪をボーネテールにして雰囲気からもなにか凄みを感じ取れる人物である。
と、優等生っぽいイメージがつきがちな彼女だが成績はいたつてふるわず、しかも体育の授業には一切出席しないといつ不真面目ぶりも見せる。

しかも私は知っている。この間なにかの拍子に彼女が”血が性的な意味で大好きな変態”だということを知ってしまった。まつたくもつてギャップのある人物、そして私が語ると出落ちな感じがする彼女だが別に私は嫌いなわけではない。むしろどこか一般人離れした感じに少し興味と好意をもつていて、というのが正直な感想である。

そんな彼女が一体私になんの用があるというのだろうか？

「あなた、よくそんな本人の目の前で言いたい放題言つてくれるわね」

ありや、どうやらわたくしのプロフィール（出落ち）は丸聞こえだつたようだ。

相変わらずの失策である。なにやつてるんだ私。

「まあいいわ、なぜいま私がここにいるかわかるかしら？」

なぜあなたが今ここにいるか、だつて？

理由1　・”ここ”は自分のクラスだから。

理由2　・いなければならない理由があなたをここに縛り付けているから。

理由3　・実は私のことが好きだから。

理由4　・私の近くに落ちていたお金を拾いに来たから。

理由5　・飛ばした紙飛行機がこの辺に飛んできたから。

理由6　・神様が決めた予定調和の一つにすぎないから。

理由7　・気分。

理由8　・あ。

「あなたのそういうところが気に入らないわ……」

しまつた、滑つた。

「面おなじい」で

「意図的に正解を外すな！それに理由が意味不明なのがあるし、最後になるにつれて手抜きになつてゐるじゃないか！！」

「お生憎様、あなたのペースに巻き込まれるのは面倒なの」というナイスなツッキをして貰はれただろうし、少し期待していたんだけど……。

「お生憎様、あなたに用があるのだけといいかしらへ。可愛げのなこやつめー可愛いけどー。

「それで、あなたに用があるのだけといいかしらへ。」

「せつぱんせつぱん」とか。

「一体何の用だというんだら？へ

Princess Alliance?

「あなたが野中FRTでのチャンプ、姫ね？」

彼女から発せられた言葉に私は思わず萎縮してしまつ。いくらなんでも色んな人に知られすぎではないのだろうか。しかしお嬢様的なイメージがついていた姫竜さんにしても珍しくゲーセンの話題だなんて。

まあ私の勝手なイメージだけどね。

そんなことはさておいて、一体どう答えたものか。ナナにもすっかり知られてしまつているし、ここぞまさに隠すこともないだろ？

そう思つた私は姫竜さんに本当のことを語つこととした。

「うん、やうだけど？」

私のその言葉を聞くと彼女はやつぱりか、とでも言いたげな表情を見せた後、視線はしっかりと私を捉えたまままた質問を投げかける。

「今度のPPの大会、もちろん出るんでしょうね？」

その内容といつのはどちら今度行われる大会についての話だった。

優勝すればプロトモジュールという携帯の機能を拡張できるものがもらえるという噂のアレだ。

「うん、狙うは優勝のみーってね

本当に優勝する意気込みだつた私は自信満々にサインをする。しかし彼女の反応はそんな私のノリとは正反対に非常にクールなものだった。

「優勝……できると本氣で？」

彼女は腕を組み、そこはかとなく自信あふれるような口角をつり上げた表情でこちらを見ると挑発のよつた言葉を私に送る。

「それはなに？ もしかしてあなたが私を止める? でも？」

先ほどからの彼女の自信。

もしかすると姫竜さんが出場して私を倒す、そんな話の展開のような気がした私は負けじと質問で返してみる。

「ええ、あなたの伝説を終わらせてあげるわ」

どうやら本当に姫竜さんが出場するらしい。

自分で言つのはばかられるが△△の格ゲーは一田一田で上達するものではない。

田の練習の積み重ね、さらには研究の結果いい戦いができるものだと私は思つてゐる。

現に私はそうして地元のゲーセンのチャンプにまでなつたのだから。

しかし私の噂はどうやらよくわからなことひに飛び火しているらしい。

彼女の伝説とは一体何なのだろう？

「よくわからないけど、私は負けないから」

ただそつ言い返すと彼女はその長い髪をふわっとなびかせながら後ろを振り返ると少し上げた右手の指を2本ピッとして立てる仕草をしながら自分の席へと帰つて行つた。

返事のつもりだろうか、そんな彼女の余裕の姿を見て私は俄然大念へのやる気を燃やすのであつた。

キーンローンカーンローン……。

そんな時、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「……あ、飲み物買えなかつた」

何のために自分の席を立つたのだろうか。

大人しく座りながら少し悔やむ。

それというのも全部姫竜さんのせいだ！

と、全然関係のないところからも闘志を燃やしながら皇円寺姫竜への勝利を誓うのだった。

私もまだまだ子どもだなあ……。

頬杖をつきながらぼーっと黒板を意味もなく見つめながら私はそう呟く。

自分では冷静だとか思つてたけど、案外燃えやすいタイプだったんだな私。

こんなことに今気がつくなんて、何年生生活しているんだよって話だよね。

……何年だけ？

ま、いつか。もう授業が始まる。
早くPモバにログインしなければ。
さて、頑張るぞー。

そうして2時間田、3時間田とゲーム三昧で過ぎた私。

今は3時間田と4時間田の間の休み時間である。

ずっと携帯を見つぱなしだった私はすこし凝つてしまつた肩をほぐすよに首を回したり拳でぽんぽん叩いたりしていると田の前に富子が立っていた。

「やつやつヒゲーモばつかりしてるから凝るんだよ

お氣遣いどうもありがとうございます富子さん。

しかし私から娯楽をとつたらもはやなにも残りやせんですよ。
でも富子は私にあきれながらも心配してくれているので素直に聞くことにます。

「うそり、わかつてゐよ。それで富子はなんぞう？」

別に話をそらしたかったわけではないがわざわざ田の前に立つて
いるところひとはなにか用があるところひとなのだから。

「なんでだらうね？なんで私はここにいるんだらうね？」

富子がここにいる理由？

そうだなあ……例えば。

理由1 “こ”は自分のクラスだから。
理由2 いなければならない理由があなたをここに縛り付けてい
るから。
理由3 実は私のことが好きだから。
理由4 私の近くに落ちていたお金拾いに来たから。
理由5 飛ばした紙飛行機がこの辺に飛んできたから。

理由6・神様が決めた予定調和の一つにすぎないから。

理由7・気分。

理由8・あ。

「意図的に正解を外すな！それに理由が意味不明なのがあるし、最後になるにつれて手抜きになつてゐるじゃないか！！」

おいしいリアクションありがとうございます。
いや、ここまでまんまと思わなかつたよ。

「おーけーおーけ、それで何の用？」

あんまりぴつたりな富子の返答に気分をよくした私は「ひでやつ」と素直に話を聞く姿勢をみせる。
我ながら面倒な性格である。

「いや、次体育だよ？わかってる？」

ツギタ・イイク？

すいません、日本語でお願いします。

「体育だよーた・い・い・くー！」

うー？え、あ……体育か！

まったくもつて想定外の言葉を聞いたときつてなんか言葉として認識できることってあるよね？

今その症状を身をもつて体感できた。

うん、実に不思議な感覚だね。こんなに簡単な言葉を認識できなんて。

でも今はそんなことは問題じゃないね。

次が体育ところ「私は体操服に着替えなければならない」ということで。

そして私は体操服を持ってきていないわけで。

ということは私は体育の授業を受けられず科目得点が減点されてしまうというわけで。

それは私の思い描く学生生活には少しばかりの不具合があるわけ

で。

「つまり私はどうすればいいんだ？」

すっかり立ち往生してしまう私。

そんな時天使の声とも思えてしまう声に私の失われかけていた意識は間一髪のところ引寄せられた。

「お待たせ優紀ちゃん」

そんな声に振り向けば立っていたのはおそらく体操服が入つてあるであろう紙袋を持った私の相棒、IRIAであった。

本当にこぞとこ時に頼りになるねこの娘は。

「ありがとうIRIA」

あんまりに愛おしくなつたので思わず抱きしめる。

ついでに頭をナデナデもしておぐ。

「ゆ、優紀ちゃん恥ずかしいですよ……」

なにを言つたか、私たちは姉妹みたいなものでしうが。

……ん？ IRIAにこんなプログラムはされていたつけ？

抱きついたら恥ずかしがった……いや、そんな機能はないはずだ。
少し確認してみる必要がありそうだ。

「HRIA、コマンドプロンプトオープン」

「了解、コマンドプロンプトオープンします」

これまことに最近HRIAが行ったプログラムを確認するためのモードである。

大量のプログラムが教室の壁へと、ながら映写機の「J」とく投影される。

一番最近行ったコマンドは一番下……えっと、これはなんだ?

”kanzyou.exe”

かんじょうえぐぜ?

……感情実行プログラム?

どうこいつことだろ?。

そんなものはマニュアルにも見たことはない。

「プログラムの詳細を表示して」

「Error、このプログラムにはロックが掛かっています」

ロック?

HRIAのコーナーは私だ。

ロックなんて掛けられるのは私だけのはずだ。

「ロック内容の表示を」

「了解、ロック内容の表示」

壁の画面にはそのロック内容が表示されていく。

”当個体の中核記憶メモリ、および深層波長のロック。当個体にセッテされた電子頭脳・C.O.-81は国際級機密を持つものである。なお、当プログラムへのロック権利者権限は個体ユーザーではなく当機が独自で行うものとする。”

つまり……これはとても重要な部分であり、IRIA自身がロックを掛けている…………と？
それに国際級の機密？
一体なんのことを言っているのかわからない。
もう少し深く調べてみなければ。

「検索、”kanzyou”について」

「了解、”kanzyou”サーチを開始します」

IRIAの中にあるkanzyouというファイルを左端から検索する。

さつきのプログラムの中身を確かめるためだ。

「検索終了。該当する単語は見当たりませんでした」

存在しない？

そんなわけがない。先ほどコマンドで確認したじゃないか。
こうなつたら直接起動させてみよう。

「”kanzyou.exe”的起動」

「了解、”kanzyou.exe”を起動します」

「ああ、これでどうなるのか。

いつたいこのプログラムはなんなのだらうか。

これで全てがわかるはずだ。

……と、私は湧き上がる探求心を抑えられず思わず興奮してしまったが返ってきた答えは呆氣ないものだった。

「”kanzyou.exe”の起動に失敗。File Not Found . . .

ファイルが……ない?

> 122612 - 2360 <

頭がこんがらがつてきたぞ。

ならばさつき起動したものは一体なんなのだ?

つい数分も前の話じゃないか。

そんな時、私の頭の中によぎる言葉……”国際級機密”

「なるほど……私のような一般市民には公開できない」と

ふう、とため息をついたりやうやう以上の詮索は無駄だと判断し

た私はあせりめぬ」とした。

「IRIA、コマンドプロンプトクローズ」

「了解、コマンドプロンプトクローズ。通常モードに移行します」

画面は閉じられ、いつものIRIAに戻る。
先ほどからの私の行動が理解できないのか、きょとんとした様子
でこちらを見ているIRIA。

……ねえIRIA、あなたにどんな秘密が隠されているの？

私の探究心は失われたわけではなかつた。

Game to Fight?

IRIAの謎の解説もそこそこに私は体操服に着替え授業に出ることにした。

謎もいいがまずは自分の、目の前にある生活が第一だ。外に出ると早速点呼を行っていた。

IRIAのこと少し時間を取られたがぎりぎり遅刻を免れることができた。

「 皇円寺は……また休みか

点呼をとっている先生が出席表を見ながら言った。

皇円寺……姫竜さんか。

そういうえばいつも体育の授業には出でていなかつたな。別になにか特別な理由があるとかそういうのは聞いたことないし、サボりなのかな？

姫竜さんの体操服姿なんて見たこと無い。

普段の生活では凄く真面目なのにどうして体育だけは受けようとしないのだろうか？

今度聞いてみようかと思つたがあの彼女の性格である。

「 あなたには関係ないでしょ

とか言われてそっぽを向かれそうだ。

そんな私のもやもやした疑問もそこそこに授業は始まり、私は体育に没頭するのであった。

「ふう、疲れたあ……」

体育の授業を終え、教室のイスに倒れるように座り込むため息まじりにそう呟く。

身体を動かすことはわりと好きなので無駄にはしゃいでしまったのだ。

私に対して知的なイメージを持つている人はこんな一面を見て意外だというが私自信それはぴんとこない。

私には活発なイメージをもつてもらっていたほうがこっちとして接しやすい。

ようはノリが大事だということだ。

今日授業はこれで最後なので学校はこれで終わり。
大会に備えてPPの特訓をしないといけないのでゲーセンに寄つていいくことにする。

雑音溢れ人ごみ溢れゲームに溢れる、ここ野中FRT。
私はいつも馴染みのゲームセンターにやつてきた。

相変わらず平日でもにぎわっている場所だ。

もうすぐ大会も近いので特訓する人が増えてきているのだろうか。考えることは皆同じのようである。

空いている台に座りコインを投入し、ゲームを開始する。
向かい側には誰もプレイしていないのでCPUとの戦いになる。
CPU相手といえどもやるべきことはたくさんある。

まずは新しいコンボの究明だ。

私がよく使う姫スペシャルは立ち回つとじては申し分ないコンボだ。

ショナイダーの真骨頂、光の剣を絶やすことなく召喚し使うことができるからだ。

しかしこのコンボは最近になつて少しダメージ不足を感じるようになってきたのだ。

どうしてもゲージを残すことを優先にしてしまつため他のキャラよりも低火力になつてしまふ。

それを克服するため、私はゲージよりもダメージ優先としたコンボを開発しようとしているのだ。

CPH相手に試行錯誤をしながらコンボ開発を進めていく。

まずリー・チが長く相手を吹き飛ばす効果のあるコマンド236Pのシャイニングソード。

これで相手を吹き飛ばしたあと、いつもなら剣を戻しゲージ回復し小技でのコンボで締めていた。

今回はそうではない。

バウンドした相手を地上を走る衝撃波、グランドソードで拾う。グランドソードと共に自分もダッシュで接近し空中でヒリアルコンボを決める。

コンボの締めはもう一度シャイニングソード。しかしここで光の剣ゲージは無くなってしまう。

これで相手をもう一度バウンドさせ光の剣無しのコンボを繋げていぐ。

ここではパワーゲージ（光の剣ゲージではない必殺技を放つために必要な基本的なゲージ）を半分消費し相手を高く上げる必殺技、ヘブンインパクトを使う。

相手を上に上げると同時に光の剣ゲージを回復するディスチャー・ジをコマンド最速入力で行い半分ほど回復する。

ちゅうぶ落下してきた相手を掴み、画面端へと投げる。

離れた相手に上から光の剣を降らす技、シャイニングレイインで追撃しどめにパワーゲージをもう半分消費して必殺技、シャイニングソードブレイクで締める。

これで光の剣ゲージもパワーゲージもすっからかんになってしまふが相手にとてつもない大ダメージを与えることが出来る。これを見ていたギャラリーは見たことのない「コンボに思わず歓声をあげる。

「すげえ……さすが姫だ」

「これぞ真・姫スペシャルだな！」

「姫k t k r！」

などといった色んな反応が返ってくる。
なるほど、真・姫スペシャル。いい名前だとおもひ。
新コンボの開発に成功したので少し休憩することにする。
さすがに集中力も切れて疲れてしまった。
休憩スペースのイスに座りぐーっと伸びをする。
その時、ふと田に入る人影。

なぜだろう、なんでもない人のはずなのになぜだか私はこの人を知っている気がする。

もやもやする気持ちを抑えきれない私はその人に声を掛けてみることにした。

「あ、あのっ…」

「は、はい？」

振り向いたのは私と同年くらいの女の子だった。
どきどきする気持ちを抑えながら私は尋ねた。

「えっと……もしかして、ナナ？」

なんとなく、本当になんとなくだがこの田の前にいる相手がいつもYモバで一緒にいるナナだと思ったのだ。
なぜだか、理由はわからないけど。

「はい……よくわかりましたね」

私との出会いを喜んでいるような、少し困つてもいるような、いや恥ずかしがつているのか。

そんなにかんだ表情で私を見るナナ。
そうか、やっぱり合っていたんだ。

「改めまして……ナナと申します」

どこか上品な気品さえ漂う仕草に雰囲気を纏わせながら微笑みを浮かべ挨拶をするナナ。

ゲームでの会話もどこかそんな感じがしていたがやはりどこかのお嬢様だったりするのだろうか。

「私は……まあ知ってると思うけど、姫だよ」

もう一人は知り合っているというのに改めての自己紹介。
なんとなくそれがおかしく感じられて一人でくすくす笑いあう。

「「」こんな形で会つてはなんとか思つてなかつたよ」

「はい、私もです」

「なんか」「、実際に会つと変な感じだね」

「はい、やつですね」

「なんでか知らない」「さぞ、なんとなくあなたがナナフヒトヒ坂
づこちやつた」

「やつですか」

「……やつ」

「……」

「……」

なんだこれは。

果てしなく会話が続かない。

やはリリアルで会つと氣まずいのか、向ひつも話辛いのだらう。

「じ、じやあ私は「ンボも完成したしあんな帰つかなーつと…

…」

乾いた笑いをしながら曰々しきそんないとを言つ私。

傍目から見たらなんとまあ下手な「ミコニケーションだ、と疑わ
れてしまいそうだ。

別に自分の「ミコニケーション能力を高いとは思つてはいなけ

“ひや。

でも、今日やるべきことは終えたのでひよひといいかなと思ったのも確かである。

「はい、さよなら」

大人しげな表情と声色のままナナは私に手を振る。

ああ、なんというかこの子は落ち着いた人なんだな。

帰るきつかけを作り上げることに成功した私は手を振り返しゲームセンターを出るのであった。

なんというへたれ具合。

今日のナナとのチャットはなんだか気まずいものになりそうだ…。

ただ思つたことは、ナナが第一印象通りにとてもいい人そ�でよかつたなということである。

逆に向こうには少しがっかりさせてしまつたかもしない。

ゲームセンチヤンプはへたれだつた！なんぢやつて。

……笑えないので次会つた時は積極的にコミュニケーションをとりたいと思つ。

「ただいまー」

そんなこんなで私はようやくゲームセンターから帰^モしたのである。

ゲームだけの関係だと思つていたナナとあんな形で会つとは思つていなかつたなあ。

人生どんなことがおこるかわからないものだ。

……それはそうと、こつもならすぐに返事するはずのIRIAの声がしない。

「IRIAー？ただいまー」

「はー、おかえりなれー優紀ちゃん」

「うふ。あ、もしかして『飯つくつてた?』

「はー、今日の晩御飯はハンバーグですよ

「やつか、じゃあ出来上がりたら呼んでよ。それまで部屋にいるか

「う

「はー、じゅくしててくださいー」

IRIAは部屋へ向かつ私にお辞儀をするとキッチンへ戻つていった。

ふむ、いつ見ても律儀な子である。

とりあえず部屋で一休みすることにした私はベッドに倒れこみ携

帯を取り出す。

「ナナ……か」

なんとなく今日出合って、そしてその前から知り合いであったナナのことを思に出す。

「アモバちょっとつけてみようかな?..」

晩御飯まではまだ時間もあることだし、少しだけログインする」とにした。

フィールドに私の持ちキャラクターが召喚される。パーティメンバーを確認してみるとやはりナナはログイン状態であつた。

相変わらずの、安心と信頼のログイン率だ。とりあえずチャットメッセージを送つておぐ。

↙こばんせー ↘

するとすぐには返事が返ってきた。

↙はー、こばんせー ↘

早速今日の私のへたれレッテルを取り扱うために会話をすむ」とにする。

↙今日のことだけだ……あれば私も緊張して……。普段なりもつちよつと喋れたんだけどね ↘

といつあえず私の性格に誤解が無によつて弁解しておぐ。

「これでわかつてくれるだらうか？」

「……あれ？」

「いつも語レスのナナにしては珍しい、返事が返つてこない。なにか用事中かな？」

「……と、のんきにそんなことを抱えてこると返事が来た。

「今日の」と、「聞こます」とへへへへへ

ん？

「そんなこと言われても逆に私が「と、聞こます」とへへへ..

「一体、どこの誰なのだらうか？」

「今日は今日だよ、ゲーセンでちよつと語じてじやなこへ

「これでナナがどんなにあれっぽくても私が言わんとしてこる」と
は理解できるだろ？。

「すいません、なんのことを語つてこるのかちよつと
全然伝わってない？」

「今日ゲーセンで私と会つて、話をしたよおつて話だよ？」

「いえ……私は姫とはまだ直接面識したことがないですよナビ……」

「これは一体なんだ？」

何が起きている？

私が夢でも見ていたのか、それともナナは嘘をついている？
考えろ、私。

まずナナは「私に嘘をつく」とでどんなメリットがあるのか？
お金なんて絡んでいない。

その他の目的があつたとしても私を騙すことは関係はないだろう。

では……ナナが嘘をつく」とで喜び、快感を得る希有な人間である。

いや、そんなわけはないよね……。

そんなわけで正直なにも思いつかない。

やはり私の夢？

いやいや、私だって立派な高校三年生だ。

夢と現実の区別くらいはついている。

それともなにか？

これが和真の言つていたパラレルワールドの出来事つていうやつなのだろうか？

あいつの言つていたように事を考えてみる。

私とナナには違いがある。

その違いとは私はナナと出会つたがナナは私と出会つていないと
いう。

二人とも嘘をついておらず、勘違いもしていないとすればそれは
パラレルワールド間の出来事だったということ。

なーんていうけれど、まずパラレルワールドがなんなのか具体的
に知らない上にこの思考は少し無理やりすぎないか？

しかしそうではないとしたら一体なんなのだろうか？

否定したからには私もなにかしらの可能性を定義しないことには
パラレルワールドの存在とやらを肯定することになってしまいます。

うーん……。

い、今は保留にしよう。ひみつ。

べ、別に認めたわけじゃないんだからねー！

……誰に言つていいんだろうか私は。

たまに自分で自分がわからなくなったりする。

キャー、ヨルノテンションシヨンツテコワーイ。

いかん、本気でなにがどうなつてこるのかわからない。すこし調べてみる必要がありそうだ。

もしごくろにあの偽ナナ？に出会つたら詳しく述べ聞いてみよ。出合はないなら出会わないでもいいことについては悩まないでいいし、ポジティブにいこう。

常に前向きであれ私。

私は逃走はないのだ。

退いたり媚びたり省みたりすることはあるかもしれないけどね。退くと逃走に何の違いがあるのかは自分でもわからない、といつよりないのかもしないがそこは些細なことだ。問題じゃない。

とりあえずもうすぐご飯のはずだ。

く変なこと言つていいめんね、私もつこ飯食べなきゃだから一皿落ちるねノシ>

そうメッセージを残すと私はログアウトした。

さて、今日はハンバーグだつていつてたつけ。

私は今日の晩御飯のことを考えつつリビングへと足を運ぶ。

「H.R.I.A.ー。もつこ飯できたー？」

……。

あれ？また返事が返つてこない？

「IRIA？」

キッチンを覗くもそこには作りかけのハンバーグが置いてあるだけだ。

ミンチ状になつて放置された肉が

「早く焼けよ」

と、言つてゐるようだった。

まったく、こんな生意気な肉を置いてIRIAはどうへいったのだろうか？

私の家はそんなに広くはないので家にいるなりませりあ呼んだ声で十分に聞こえるはずなのだが……。

「まさか、外？」

そんな考えが私の頭をよぎる。

いやいや、そんなはずはない。

ロボットであるIRIAが職務を放棄してどこかへ出かけるなどありえない。

いやしかし、ならばなぜ返事をしない？

キッチンにいない？

さつきのナナの「こと」い最近の私の口常は私を混乱させてくれる。

まったくもつて迷惑なものだ。

しかたない、IRIAが戻つてくるまで私がこのハンバーグの相手をしてやるわ。

「相手をする、といつてもお前を調理したりするわけじゃないぞ？
私は調理なんてできないからね」

ハンバーグに意思があつたとしたらきっとずつけてたに違いない。
い。

「じゃあ相手をするつてどうある氣だー？」

そんなハンバーグの悲痛の叫びが聞こえないでもない。

「ふふん、相手をするつてこののは遊び相手をするつてこと」

ええ、もちろん比喩でもなんでもないですよ。

私はこいつで、遊ぶ！

ふふふ……思わず口元が緩む。

ハンバーグは命の最後を覚悟したのか、まったく動くことなく私を、えっと……見ている？

昔誰かが言っていた。食べ物で遊ぶな、と。

ならば私はこう述べよう。

食べ物で遊べ、と。

そもそもなぜ食べ物で遊んではいけないのか？
おおよそ理由は二つある。

まず食べ物は自分たちが生きるエネルギーである。
生きるために必要なもので遊ぶのはもってのほかだ。

我々は食べ物によつて生きさせられているところひとつ忘れてはならない。

一つ目はその食べ物を食べられずに死んでいく人も中にはいるといふことだ。

食べ物で遊ぶというのはその食べられない人たちにとつて失礼にあたる行為だ。

その遊んだ食べ物がその人にとつてどれだけ大事か、ということである。

しかし考えても見てほしい。

もし、だ。

”食べ物で遊ばねば死んでしまう”人がいるとする馬鹿馬鹿しい話だが、眞面目に考えてほしい。

そんな人がいないという可能性は〇ではないのだ。

もしそんな人がいたとしたら、それでも遊ぶなと言えるのだろうか？

ある意味ではそれは”生命活動をやめる”といわれていることと同義である。

人に死ねと言っている悪人の言葉に耳を貸していいのだろうか？

それとも、それは例外とでも言うのだろうか？

そんな差別をする悪人の言葉に耳を貸していいのだろうか？

ゆえに私は遊ばせてもらう。

悪人の言葉に従つては私まで悪人になつてしまつ。

そうだ、私が世界でたつた一人の善人だ。

皆のものよ、食べ物で遊べ！

それが悪から足を洗う唯一の方法だ！

「……なーんてね」

いつもの妄想といふか考察といふかなんといふか。

今まで私を恨めしそうに見ていた生意気なハンバーグはもうただのハンバーグだ。

喋ることも、もうないだらう。

そうやって時間をつぶしてると玄関のほうで音がしたよくな気がした。

「あ、もしかしてH.R.I.Aかな？」

一体こんな時間にどこへ行っていたところのだろうか？
最近妙に私の見当違いのことばかり起じるロボットだ。
まずはそれを聞いたださないといけない。

「あ……優紀、ちゃん？」

IRIAは帰ってきて私の顔を見るなり罰の悪そうな顔をする。別に私はIRIAが勝手に外出したことについては怒ってはいない。

だがそれはあくまでIRIAがただのロボットであつたらの話だ。

私はIRIAを家族としてみているのだ。
いうなればIRIAは私の妹のようなもの。
妹が夜も遅くなる時間に私に黙つて外出したことについては怒っているのだ。

「IRIA、どこ行つてたの？」

だから私は優しく、そう尋ねたのだ。

「……すみません」

なのにこの娘は言えませんと、そう言つのだ。

IRIAは私の所有物などではない。
何度もそう思うと、決めていたじやないか。
IRIAが何をしようど、それはIRIAの勝手だ。
私はいつもIRIAによくしてもらつてているではないか。

少しふらつたの勝手は許してあげるべきだ。
そう、頭ではわかっているはずなのに……。

「そり……まあ私はね寝るか、ねやすみ

「あ、あの……晩御飯は」

「今日はいらぬ」

「でもちやんと食べないと」

「お腹につぱいだから、それに眠こし……もう寝るね」

「優紀ちゃん」

「おやすみHRIA」

IRIAの言葉に耳を貸さないまま私は自室へと戻った。
ベッドに倒れこみ枕に顔を埋める。
私の頭はすぐに冷静モードに入る。
バカなことをした、と本気で後悔した。

実際世界ではそう使われて いるし、 そ う プ ロ グ ラ ム さ れ て い る。

しかし私はIRIAを家族として扱うと決めたのだ。

それなのにこの始末

私も所詮IRIAをただのロボットとしてしか見ていないのか

いや、違う。

人間同士だって、喧嘩はする。

今のはただの姉妹喧嘩だ。

妹の少し目に余る行動に対し、姉が怒つただけ。

ただそれだけの話だ。

明日は仲良くなれているだらうか？

こんな小事なことは早く忘れて、またIRIAと話したい。
なんだかんだでIRIAに對して甘い私はそんなことを考えながらいつの間にか意識が落ちていった……。

目覚めはなぜかいつもよりもよかつた。

いつもはIRIAに起こしてもらっているが、一人で起きること
が出来た。

もうすこしひびきでゆっくりしていたかったがこういうものはだ
らだらしていると余計にだるくなってしまうことは周知の事実であ
る。

何度もそんな体験をしている私はえいやっと掛け声をあげつべ
ツドから跳ね起きた。

うん、すつきりだ。

そのままリビングへ行く。

まだいつもよりは少し早い時間だがIRIAは朝ご飯を作つてい
るはずだ。

「……IRIA？」

IRIAはテーブルの前においてあるイスに座っていた。
テーブルには昨夜の晩御飯とおもわれるハンバーグ。
ずっと私を待っていたのだろうか？

IRIAはただ、目を閉じたままじっと座つている。

昨日はあのままシャットダウンしてしまったのだろう。
私はIRIAの隣のイスに座る。

「昨日は『めんね』

そう言いながら私はIRIAの髪をなでる。

IRIAから手を離すと私はただ座つてIRIAが再起動するのを待つ。

時計の音だけがこの場の静寂を支配する。

数分たつた後、IRIAがゆっくりと顔を上げる。

「指定の時間になりました。IRIA、リブートモードに移行します」

IRIAの体からピラッピラとこじりくつもの電子音とブーンとこうHDDが高速回転する音が聞こえてくる。

IRIAの、目が開く。

「視野の確保に成功。フォーカス、ホワイトバランス共に最も適した状態へと変更…… success（成功）」

IRIAの瞳孔が人間味を増していく。

キュイッと音がしているのはIRIAのアイカメラが焦点を合わせているのだ。

「視野データの収集に成功。状況確認……緊急事態ではないことを確認。当機は通常モードで起動します」

IRIAはこうして現在の状況を確認し、通常通りに起動するか、緊急モードで起動するかを決める。

今はこうして平和な、なにも起きていない平日。

それを確認したIRIAは安定した起動方法、すなわち通常モードで起動することにしたのだろう。

「メインOSの起動……容認。以降の制御はメインOSによる管理下で行ひ」

どうやら無事にメインOSの起動に成功したようだ。
メインOSというのはこういうなればIRIAそのもののことである。
ここから先は、やつきの機械的な言動ではなくIRIAの言葉で
話してくれるだろう。

「メモリーを確認…… agree。当個体、”IRIA”のロード
に成功。Welcome world back IRIA」

これで完全にIRIAは眠りから覚めた状態となる。

「……マスターの起床を確認。あれ、優紀ちゃん？」

私の顔を見るなりまだすじ口ボット言葉の抜けないIRIAは
ボケたことを言う。
ロボットにもとんだ寝ボケさんがいたものだ。

「おはようIRIA」

「Good morning.あ、いや言語が……あー、いー、う
ー。Yes、おはようございます優紀ちゃん」

ペコリとお辞儀をして挨拶するIRIA。もはやどこから突っ込
んでいいのかわからない。

「IRIAが起動直後で安定しないのはわかっているからさ、無理しないでいいよ」

「Yes agree, my sister · Please wait . . .」

そのちやっかり”sister”……つまりお姉ちゃんか。そんなことを言つちやうIRIAがまた可愛らしい。

「IRIA、完全に起動に成功しました。おはようございます優紀ちゃん」

キリッとした顔で、綺麗なお辞儀を、完璧な言葉使いでこなしたIRIAだったが惜しいところが一つある。

「IRIA、それさつきもいった。……まあおはよう」

そう指摘するとIRIAは真っ赤な顔をして（オーバーヒート？）取り乱しながら言つた。

「Reboot · Reboot · Reboot ·マイシスター、IRIAは”再”再起動を所望します」

「駄目」

これはこれでおもしろいので修理はしないでいる。

そんなわけでロボットなのにやけに人間味のあるIRIAだった。

「今日の朝」はんはハンバーグにあわせ、『所望していたお米です
よ』

なんだか朝』はんにしてはとても豪華だがこれは私が昨夜食べなかつた晩御飯である。

「おお、ようやくお米が……。」

そう、私はこれまで莓ジャムパンに対してもふーふー文句を言っていた。

とうとうお米が食べられるのだ。
別にそんなに期待していたわけじゃないけれど、ただなんとなく頼んだものが出でくるのは嬉しいものだ。

「『』のローテーションだと、明日はパンですか？」

突如IRIAがそんなことを『』のローテーションについてのローテーションだ？

今日はお米、昨日はパン、おとといもパンだったよね？
パン、パン、お米……と、きてくるんだから次はお米では？

「あ……そうでしたね。次はお米ですね」

やけに素直に引き下がるIRIA。

なんだろう、IRIAの間違い？

いやいや、IRIAは”勘違いをしない”はずだ。

リビングで和真となにか話をしていたり夜に勝手に外に出て行つ

たり……。

また少し、IRIAに対する不信感……いや、不安感が募る。でもそれと同時に、なんだかIRIAが人間っぽいような感じもしてきて嬉しそうつな。よくわからない。

もやもやする内にもIRIAは私の口に食べ物をどんどん放り込み氣づけば全て食べてしまっていた。

時計を見ると、もう家を出なければいけない時間に近くなつていた。

早起きはしてもやつぱり家を出るのはいつもおつなんだな。

「じゃあ、いつともーす」

「はい、こつてらっしゃい優紀ちゃん」

食事の後片付けをするIRIAに声をかけ、返事が返ってきたことを確認すると私は玄関から家を出た。

また今日も、日がな一日暇な学校が始まる。

Start Day?

「おはよう水無瀬」

「なんであんたがまたいるの？」

家を出ると和真が家の前に立っていた。

昨日とここ今日といい、一体何が目的なのだ？

「一緒に学校に行ひつかと思ひにせ」

なるほど、それもそうか。

しかし、この男は私に気でもあるのだ？
なぜわざわざ私と登校しようなどといったの？

「そりや、水無瀬と話すのが楽しいから。ちなみに惚れてはいない」

「だから私の心を読むなー。セクハラだぞー！」

「いや……ブシブシ書ひてゐるの丸聞こえだからな……」

ふむ、また私の悪い癖が出たようだ。

「それで？」

「ん？」

いや、ん？じやなくてさ。

またなにか面白い話題でも持つてきたのかと思ひていたが、

「今日は特にないらしい。」

「今日は水無瀬の話を聞かせてくれよ」

「私の？」

相変わらずこの男の考えはわからない。

私の話なんぞはこんな朝の登校時間の暇つぶしに利用されるようなネタはないはずなのだが。

そんなことを考えていると、和真は私の度肝を抜く質問をしてきたのだ。

「”ナナ”って子とは……最近どうだ？」

……なぜ和真がナナを知っているんだ？

確かに和真もアモバをしているはずだが別に私と同じパーティではない。

私と同じパーティではないといふことはナナとも接点はないはず。

「ちょっと、なんでナナのことを見つけてるの？」

疑問はそのまま言葉になつて現れる。

私の悪い癖だ。

その私の問いに和真は面食らつたような表情をしたと思つたらすぐそれを隠すようにポーカーフェイスを装つた。

なんだろう……たまにERICAに感じるときのような違和感を、今も感じた。

この妙な、気持ち悪い感覚は一体何なのだろうか？

「お前、もしかして忘れたのか？」

思考停止に陥っていた私の脳は和真の言葉によつてサルベージされる。

「忘れてたつて……なにを？」

「お前がナナのことを使ってくれたんだろうが」

あれ…… そうだけ？

「おいおー、しっかりしてくれよ……」

待つて、今思い出す。

まず落ち着いて整理しよう。

私が、和真に、ナナのことを、教えた。

「昨日のことだぞ？」

私の思考中の頭に和真の言葉が流れてくる。
昨日、昨日私が和真にナナのことを……。

「あ、思い出したつ」

ぽんつと手を叩き、やつと繋がつた記憶に満足する。

そうだ、私は昨日ナナのことを和真に教えてやつたんじやないか。

つに昨日のこと忘れなんて私もほんと馬鹿だなあ。

「はははっ、なんだよ。パラレルワールドが絡んだのかと思つたじ
やないか」

和真は笑うとパラレルワールドの話を持ち出す。
ああ、私も思わずそんな考えが一瞬よぎったよ。

「笑うなってば。ちよつと無意識にほろりと言つただけでしょ。忘
れてたつて仕方ないじゃない」

「ああ、すまんすまん。でも、脅かすなよな。まさか素で忘れてた
とは……」

「まつたく……まあ忘れる私も私だけやつ」

きつと疲れているであろう頭を刺激するよひごひくべぐら左右に動
かす。

ちゃんと働け、私の頭よ。

「次からはボケるんじゃないぞ水無瀬」

「言われなくたつてそいつするわよ」

「うん」

和真はそれまでの会話を文字通りぶつた斬るよつこただ、うなず
いた。

「どつたの？」

「学校」

彼の指差す先には私の登校すべき場所である学校があつた。
気づかないうちにもうついてしまつたらしく。

今日もさくつと学校終わらせて遊びに行こう。

まだ校門すら抜けていないのに放課後にことに頭を働かせる私であつた。

うん、いい感じに非模範生徒だと想いつ。

これが私が私である所以。私らしさであるのだ。

「で、あんたは教室に着いて早々になにをぐだつているんだ」

教室に着くなり自分席へ座り込み顔を伏せている私に模範生徒、富子が言つた。

「登校中に放課後にして遊ぼうか考えてて、教室着いてみたらまだ一時間すら終えていないことに絶望している図」

顔を伏せたまま私は言いつ。きっと富子はあきれた表情で私を見下ろしているだろ? 手を腰に当てたりしながら。

「ああ、すっかり放課後モードだつたのが実はまだ授業が始まつてもいないものな。そりゃだるくもなるけど、それはあんたがアホなだけだよ」

「へいへい、なんとでも言ひなされ。

私はもう立ち上がりないぞ。

私はどこの連邦の白いアレではないのだ。

「」のまま放課後まで寝ちゃいそつ……」

「待て、本当にあんたは学校に何しに来てるんだ」

「出席日数」

「だらうね」

もはや余話あるのも面倒になつてきた。
「のまま寝ちゃつてもいいのだらうか。

「あんたのような不良には修正が必要だ。春香、この子なんとかしてー」

とつとつ自分ででは私を起こすことが不可能だと思つたのか、
富子は超模範生徒である春香に声を掛け始めた。

富子さん、それはするくない?

春香に説得されればあわよくば授業を真面目に受けてしまつかも
しれないじゃないか。

ほら、今にも春香が私の前にやつてきて説教をするや。來るならこい。今日この子は反抗してやるや。

……あれ?

「おつかしーな? 今日春香休みらしー」

これはラッキー。

しかし、おかしいって?

別に学校を休むくらにどうか」とないでしょ?

「いや、春香はあなたのよつこせボつたりはしないし……夏風邪とかかな?」

あれはあれで結構ガサツなところがあるし、大方クーラー付けっぱなしで寝て風邪をひいたりでもしたのだろうか。

「まあ、そういうわけだから私は今日は寝ることにするよ

どうやら春香は学校に来ていないみたいだし、これで私を阻む障害は無くなつた。

「うえ、明日春香に言いつけるからね」

そういうと富子は自分の席へ帰つていつた。

ふん、負け犬の遠吠えというやつだ。

まあ明日私がどんな修正を受けているかは知らないがとりあえず

今は休ませて貰おう。

ふわあ……おやすみなさい……。

Akashic Records?

パチッパチッ……。

ノイズというよりは火花に似た感覚が私の頭の中でスパークする。
ここは教室、だつたか？

記憶と意識が混乱している。

私は水無瀬優紀。よし、大丈夫だ。

しかしなんだろうか。

胸の辺りがとても痛む。

それにこれは……涙？

私は泣いているのか、なぜ？

とても辛くて、悲しい？

そんなはずはない、私はいま充実した生活を送っているはずだ。

そうだ、辛いことなどなにもない。

ないはずなのに……なぜ涙が止まらないのだひつ。

そして……とても寒い。

今は夏ではなかつたのか？

それここには……窓の外？

確かに落下防止のためのものだつたか……そんな場所に私はいる。

こんなところでなにをしているのだろう。

右手に握っている手のひらには、なぜか私のものではない消しゴムがある。

はやく教室に戻ろう。

……あれ？

窓が開かない。

鍵がかかっているのだろうか？

私がここに降りたということはなにかしらの理由があるわけで、そして鍵がかかっているということは私に気づかず鍵を閉めてしまったということなのだろうか？

……いや、今嫌な想像が私の頭の中をよぎった。

”もし、私がいることを知つておきながら鍵を閉めたとしたら？”

そんなことをする生徒が私のクラスにいたどうか。

でも、もしもそしたらそれはイジmパチッパチッ！

思考中の私の頭はまたもスパークする。

ああ、視界が真っ白だ。

次に思考できるようになつたときにはまた知らない場所にいた。

「……もしかして遊園地？」

周りを見渡すと様々なアトラクションにたくさんの人々。
しかしそれらはさながら昔のビデオの一時停止ようにモノクロの人、機械、景色はピタッととまっている。

「冷たつ……！？」

気がつくと私はたくさんの缶ジュースを抱えていた。

どうしてこんなにいっぱいジュースを持っているんだろう？

それになぜか私の心はまた悲しいと、そういうつてい。

この状況が悲しいということなのだろうか？

周りに見知った人物は居そうにない。

遊園地に一人でいることが、悲しい感情の正体なのだろうか？

……そういうものではないような気がする

またも嫌な考えが私の頭をよぎる。

”もし何者かによつて、意図的にこの状況がつくられているとしたら？”

でも、もしもそつだとしたらそれはイジmパチッパチッ！思考中の私の頭はまたもスパークする。

ああ、視界が真っ白だ。

次に思考できるようになつたときにはまた知らない場所にいた。

ここは……学校のトイレ？

見ると私は上は制服、下はジャージという奇抜な格好をしていた。そして洗面台で本来履いているはずのスカートを水で濡らしている。

なんで私はこんなことをしているんだろう？

自らスカートを水で濡らして、なんの意味があるのだろう。

そしてやはりといづべきか、私の心は悲しい感情に満たされている。

それには怒りの感情も含まれていた。

一体この状況はなにがどうなつているのだろう。

グチュッ。

その時、スカートを触る手に嫌な感触を感じた。

どうやらスカートにへばりついているようだ。

心なしか、粘着性があるようにも思える。

「ああ、そつか」

ここで私は確信した。

私はこのスカートにへばりつく謎の粘着体を洗つていてるのだ。

確かに学校でスカートが汚れてこんな感じで洗っているのは少し惨めだ。

悲しい感情はそのためのものだろうか。

それだけでこんなに涙が溢れてくるものだろうか。

悲しくて泣いているというよりは、悔しくて泣いている……ような気がする。

しかし悔しいということは、これは汚したのではなく汚されたものなのだろうか？

でも、もしもそうだとしたらそれはイジmパチッパチッ！

思考中の私の頭はまたもスパークする。

ああ、視界が真っ白だ。

一体この身に覚えのない体験はなんなのだろうか。

意識が、はつきりしてくる。

授業を進める先生の声が聞こえてくる。

これは夢だったんだな。

そう私は確信すると田覚める」とした。

「ん……よく寝た」

どうやら田覚めは最悪らしく頭の中がぐわぐわんと朦朧する。

それでもなぜか、体がいつもより軽い。

眠っている最中に右腕に体重をかけすぎていたのか、痺れて動かせない。

仕方ないので左手で髪の毛に寝癖がついていないか確認する。あ、ちょっと跳ねてるみたい。

「……えつ？」

鏡を取り出すとそこにはなんと私ではない者の顔が映りこんでいる

た。

いや、違う。

これは私の顔だ。

しかし、なぜこんなに悲しそうな、霸氣のない、虚ろな表情をしているのだろう?

私は笑顔をつくひつとした。

だが頬の筋肉はあるで言ひついとを聞かず、つり上がりない。

「違う……！ みんなの私じゃない」

それになんだ?

周りの生徒は皆知らないやつばかりだ。

富子も春香もいない。

そして教室を見渡すと、私はそこに意外な姿を発見する。

「・・あ・？」

なぜお前がそこにいるのだ?

私はその者の名前を呼ぶ。

その者はびっくりしたような表情を見せると私の名前を呼び返してきただ。

「……ちやん?」

その瞬間、私は全てを理解した。

あれも、あれも、あれも全て思い出した。

涙が溢れ出した。

いまだ隠れていた感情が一気にあふれ出したのだ。

唇が、がちがち震えてうまく喋れない。

手も、震えて言つ」とを聞かない。

目の焦点が合わない。

呼吸がどんどん荒くなる。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！

これは全て夢た！夢なのた！！

心の闇にすぐこ魔物が、じと私を見つめている。

卷之三

バチバチバチッ！！

また、私の頭がスパークする。

今までよりも大きく
弾けて、そして泡のように消えてなくなる

た

「ん……よく寝た」

どうやら田覚めは最高らしく頭の中もすっきりしている。
だけれど、身体はいつもどおりの寝起きらしきだるい。
眠っている最中によだれでも垂らしたのか、下に敷いてあったプリントが濡れている。

慌てて証拠隠滅するためにプリントを丸めて近くにあったゴミ箱へ捨てる。

髪の毛に寝癖がついていないかを確認する。
あ、ちょっと跳ねてるみたい。

「これでよし、と」

鏡を取り出すと寝癖を直す。

いつもどおりの私だ。

今日はずっと寝ていたのか、もう時計は学校終了の時間を指していた。

さてと、今田もゲーセンに寄つて行こうかな。

毎回の「じくHR」をスルーした私はさっさと学校を出て行くのであつた。

そしてやつてきたのはやはり「じく野中FR」だ。

たくさんの猛者（なぜか此処ではも「じゅ」と読む）達がしのぎを削つている。

近日に大会が行われるためにキャラの最終調整に忙しいのか、いつもよりたくさん人がいるようにも見える。

私もその中の一人であり、ゲームの練習にしにきているのだ。

空いている筐体にコインを投入しゲームを開始する。

昨日とうとう姫スペシャルの完成に成功したところだ。

今日もなにかしらの発見があれば大会優勝にまた一步近づく」と
が出来る。

あとは立ち回りとコンボ精度を課題にあることにする。

まず立ち回り。

こればっかりはCPU戦ではなく対人戦でないと学べないことも
多い。

誰かが乱入してくるまでは練習することはできない。

そしてコンボ精度。

これは対人戦では練習しにくいが逆に言うとCPU戦では練習し
やすい。

とりあえず誰かが乱入してくるまでは「コンボ精度の練習をして、
誰かが乱入してきたら立ち回りの練習をする」とこした。

CPUとの対戦になる。

ひたすらコンボの練習をする。

またCPUとの対戦。

ひたすらコンボ。

またまたCPU。

またコンボ。

CPU。

コンボ。

「よし、ラスボス撃破……あれ？」

そうしている内にアーケードモードをクリアしてしまい、ルール

により席を譲らなければならなくなってしまった。

そうか、そういえば私は有名だつたんだ。

そんな私にわざわざ挑んでくるなんていうのは休日暇な時間がある時だけだ。

こんな大事な時期にそんなことをするやつはいない。

むしろ私に最後までプレイさせ、ゲーセンのルール（というかマナー）で交代させるほうが確実だ。

並んでいる列を見るとさすがにいい時間になつたのか、長蛇の列。再び並ぶ気力を失つた私は帰ることにした。

「いや……その前にナナを探してみよう

そうだ、昨日ちょっと氣になることがあつた。

私はゲームで知り合つたナナという人物に実際に会つた。会つたのだがゲームのほうでのナナはそんなことは知らないといふ。

嘘をついているようにも見えなかつたのでその謎を探りうつと決めたのだった。

周りを見渡すもたくさんの人だから。どうも見つかりそうも無い。

しばらく探してみるとナナらしき人物を発見することはできなかつた。

疲れたし、もう帰ろうかと思つていた矢先……。

「こんばんは」

澄んだ声に振り向くとそこには私の探していた人物、ナナがいた。

「あ……こんばんは」

相手のお辞儀につられ私も頭を下げお辞儀をする。
出合つてせつすぐだけど、謎の解明に急ぎたいと思つ。

「失礼だけど……あなたは本当にナナ?」

「はい、その通りですよ」

「アモバの?」

「はい、そうですよ」

「私と一緒にパーティを組んでいる、ナナだよね?」

「はい、そうですよ」

「こつも私と話をしている、ナナだよね?」

「はい、そうですよ」

「昨日、私と会つてなつてこつてたのは?」

「その」としたら……少し寝ぼけていたのかもしれません

「寝ぼけ?」

「はい、寝ぼけです

最近私の周りではびっくり寝ぼけがはやつてゐるらしい。
ここまでものこと、和真のパラレルワールド説も捨てがたくなつて

く。

まあでも誰しも寝ぼけている間はよくわからない受け答えをしているものだ。

そうか、寝ぼけか。そういうことか。

私の抱いていた謎はこんな形で解決してしまった。

なんだか腑に落ちないが事実とはえてしてこういつものなのだろう。

「そつか、じゃあ今日はもう遅いからまた後でね？」

「はい、さよなら」

私はナナと別れると早々に帰路についた。
ナゾ解明、20ピカラット入手ってね。

こうして私こと、優紀教授は意氣揚々と家に帰るのであった。

「ただいまー」

「おかえりなさい優紀ちゃん」

出迎えるのは可愛い笑顔をこひらで向けるエリカ。

「ご飯できたら呼んでね。それまで部屋で休んでるよ

「分かりました。ではごゆっくり」

軽く会釈するとキッチンへ戻るエリカ。

きっと IRIA のことだ、私が疲れていると知つて晩御飯を少し遅らせるような気遣いでもしているに違いない。

出来のいい妹を持つと私もゆっくりとできる。
ロボット

部屋に戻った私はとりあえずベッドに倒れこむ。

「ふーー……疲れた」

こんと転がり天井を見つめる私。

そうだ、今日はまだ P モバにアクセスしてなかつたつけ。私は携帯を取り出すと P モバへログインすることにした。

Akashic Records?

「じさんばんは、姫」

ログインするなりナナからメッセージが届く。
本当にナナはいつもこなるイメージがある。

「うそ、じさんばんは」

とりあえず挨拶を交わす。

ついでに聞いたかったことも聞くことにある。

「ナナせの時間によく寝起きの？」

なにせ寝ぼけてここログインするくらいだ。
この時間にうたた寝することもあるんだ。ひ
しかし返ってきた返事は私の想像していたものとは違つものだっ
た。

「え……そんなことはない。どうですか？」

あれ、違うのか。

なら昨日はたまたま寝ぼけてたつてだけかな？

「だって今日言つてたでしょ？ 昨日は寝ぼけてただけだって

え……なんのことですか？」

ん？ ビリーハーとだらう？

また寝ぼけてこらのだらうか？

「今日もゲーセンで私と会つたでしょ」
「…」

「…え、私は今日まわりと家にこましたよ。それに今日も、ヒマ？」

「嘘、昨日と今日私と会つて話をしましたでしょ」
「…」

「あの……昨日も会つたように私はまだ姫と直接の面識はないんですけど」

「うふことだ、これば。

寝ぼけているようにはとても見えない丁寧な文章。
私が会つたあれは……誰だ？」

やはりこれは和真の言つパラレルワールド？

いや、そんなものは存在するはずがない。

あまりにも不可解すぎる出来事。

そこにナナは私に唐突に言葉を投げかける。

「アカシックレコード……」存知ですか？」

「アカシックレコード……？」

まったく知らない言葉だがなぜか聞いたことがあるのは多分氣のせいだらう。

「なにそれ？」

「…」この世に起きた全ての出来事を記憶しているもの、だそうです

「全ての出来事？」

「はい、過去に起きたことも……そしてこれから起きるのも、全て」

予言……とはまた違つものなのだろうか？

「この世で起きるることは全てアカシックレコードにより定められているといいます。今ここでこうして私達が話をしていることも、私達が生まれそして死んでいくことも」

なるほど、なかなか興味深い話題だ。でも……。

「なんで今それを私に伝えたの？」

「今のが全て事実だとして……姫と、その……私がゲームセンターで出会ったところは果たしてアカシックレコードに記されていたことなのでしょうか？」

つまりナナはこういうしたいのだ。

本当は出会ってなどいないのでは、と……。

つまり私の勘違い……？

いや、確かに私は話した。

そのことを鮮明に覚えている。

「そのアカシックレコードに記されていないことは、絶対に起きないの？」

「アカシックレコードとはなむち世界そのものです。記されていないこと=起きない」と、ですが例外はあります

<例外……？>

<ええ、それはアカシックレコードは一つではない可能性があるといつことです>

<待つて。複数あつたらおかしくならない？例えば私がここでリンゴを食べるということが記されたレコードがあるとするでしょ？そして食べることはありえない記されたレコードがあるとしたら…？>

<つまりはそういうことですよ。皆、自分の中に世界を持つています。ただしそれは虚像にすぎない。本物ではありません。皆、一様に自分の見る世界が正しいと思い込んでいるだけです>

ナナが言いたいことがなんとなくわかつた気がする。
私の中でナナと出会つたことは事実。
ナナの中で私と出会つていないことも事実。
だからそれは一人とも自分の見ている世界の結果に過ぎない。
あくまで一人称視点なのだ。

ならば三人称視点のアカシックレコードにはどう記されているのだろうか？
先ほどのナナはそう言いたかったのだ。
どちらが正しいかなんて私達にはわからない。
私達を三人称の視点で見ている人……つまりは神。
神にしか世界で起こった眞実の事象を知ることはできないのだ。

<ねえ、この世界でなにが起こっているの？>

明らかに不可解な、不思議な出来事。
私はかすかに不安を感じる。

「分かりません。ただ分かることは私達は眞実のアカシックレコードに背かなければならぬ」ということです」

「どうこう」と、

「今日のニュースは見ましたか？」

「いや……まだだけビ」

「……これです」

するとナナから今日のニュースデータが送信される。
中にはこんなことが書かれていた。

各地で起こる多数の不可思議な自殺事件！
ついにその数は10000件を越えた。
自殺者の携帯の待ち受けは全て”アストラルの導き”なる文字が
描かれた画像に変更されていた！？

10000件を越える自殺事件……？

それに携帯の待ち受け画像が同じものに変更されている？
アストラルの導きって……？

「このアストラルというのはおそらくアストラル光のことです。これはアカシックレコードにおける記憶媒体だとされています」

つまり、この人達はアカシックレコードに記されたとおりに死ん

でいつた……？」

「どうなりますね」

「世界に決められたとおりに？」

「その通りです」

「でもそれっておかしいよ。なんでこんな急に人が死に始めるの？しかもわざとアカシックレコードのことを匂わせるように。絶対に、なにかの事件に違いないよ」

「そうですね……ただ、私達とて例外ではありません。いつ消されてしまうかわからないのです」

「一体……どうしたら……？」

「姫、私はアカシックレコードは都市伝説ではないとおもっています」

「これから起ることが全て記されていく…………？」

「ええ、しかし私はここで独自の解釈をします」

独自の解釈？

「アカシックレコードとは何者かによって管理されているデータバンクであり、これまで起こった全ての事象、そしてこれから起こる全ての事象を記録しているものではないか……と、

「つまり……私達人間はその何者かによつて歩む人生を決められて
いる」と。

「それだけではありません、今回の事件はその何者かの連中の内で
謀反が発生し、アカシックレコードを書き換えた者がいます」

「書き換えた……？」

「やつはアガスティアの葉に描かれたプログラムを書き換えアカシ
ックレコードに進入、私達人類を滅亡させようと一つもりです」

「ちょ、ちょっと待つて。

よくわからない単語の羅列だ。

かなり突拍子もない理論だが今の私に反論する理論がなかつた。
真実味こそなかつたが私は提示された一つの可能性にすがりつく
ことしかできなかつたのだ。

「私は……どうしたらしい？」

「姫はアカシックレコードを探してください」

「私が？アカシックレコードを？」

「姫は最近不可解かつ不思議なことが周りで起きませんでしたか？」

「不可解かつ不思議……といえば。

そういうえば今までにたくさんあつたはずだ。

「IRIAのバグ、なぜか家にいた和真、話が食い違うナナ、妙な

夢を見た……私。

変なことだらけだつた私の日常。
なぜいまになつて気づいたのか……。

くそれはあなたが眞実に触れる者、ナティ・リーダーだからです。ただの一般人には最近起こつた不可解な事象は理解できていません。もちろん私も理解できていません。

全ての違和感に気づくことができて、いるのは姫だけなのです
「そうか……そういうことだったのか。
私に起こる不可思議な出来事はそういうことだったのだ。
私は世界を救うために動かなければならぬ」

く姫、あなたはきっとどこかでアカシックレコードを見たことがあります。どうか探し出してください」

くわかったよ。ナナも死んでしまわないよう気をつけてね?」

くはい、姫も直感で行動しないようにしてください。その直感に従わない」とこそがアカシックレコードに立ち向かう唯一の術です

く了解、それじゃあそろそろ晩御飯の時間だから切るよ?」

くはい、ではまた」

私はログアウトするといままでの話を頭の中で整理した。
私は……ナティ・リーダー、眞実に触れる者。

世界の真実を暴き出すのだ。
そしてこの事件を解決する。

私は携帯を閉じると部屋を出て、リビングに向かうのであった。

「IRIAー、『飯マダーバー?』

リビングへ向かったのはいいもののテーブルにはお箸しか置いていなかった。

肝心のおかずやらはまだキッチンの中で素材として置いてあるらしい。

手持ち無沙汰の手でお箸を握りテーブルを叩く。

IRIAがいたら絶対に注意をしてくるまるで駄々っ子のような行動をするもリビングは平穀を保つたままであった。

「おーい、IRIAー……」

何度もその名を呼ぶも返事がくる気配はない。

まさかこのお箸が晩御飯?

ははつ、まさかね。

IRIAが居ない理由はやはり昨日と同じ理由だろうか?

一日も連續で勝手にいなくなるなんて……怪しい。

「はつ、これがまさかアカシックレコード……決められた運命が書き換えられた事象?」

両手から持っていたお箸をぱつと離すと少々オーバーリアクションながらそんな考えが頭に浮かぶ。

おかしなことは全て悪いやつが書き換えたことによる結果。

IRIAがいないのも……そいつのせい?

もしくはIRIAがその主犯?

いやいや、そんなことはありえない。

考えれば考えるほどにわからなくなる。

ただわかっていることはIRIAがなにかしらJの事件に巻き込まれている可能性があるということだ。

無事に帰つてくれればいいのだけれど……。

私は世界を救うのだ。

IRIAも、守つてあげないと。

いつの間にか消えうせてしまつたお箸を探していると唐突に玄関から音がした。

「……IRIA？」

お箸のことなんかよりもIRIAの安否が大切だった私は玄関へ駆け出した。

「あ……優紀ちゃん」

「IRIA！？大丈夫？怪我はない？」

「あ、え……はい」

よかつた、どうやら無事のようだ。

「どこへ行つてたの？」

「優紀ちゃんの、飲み物を買ひに……」

「私はそんな支持してないよね？」

「……」

心持強く当たつてしまつ。

IRIA、そんな悲しい顔をしないで。

私は怒つてゐるわけじゃないの。

ただ……あなたが心配なだけで。

「なんで勝手なことをするの……？」

怒つてないよ、私はいたつて冷静なのだ。

「だいたい最近のIRIAはなんなの……？私を困らせたいの？」

自分でなにを言つているのかよくわからないがおそれりへ優しい言葉をかけているだろう。

そうだ、そうに違いない。

私は、選ばれし者。

IRIAを、妹を救わなければならぬ。

冷静になれ……冷静になるのだ。

「……喉、渴いた。なにか飲み物ある？」

「はい、これを……」

IRIAは手に持つていたシンガジースを私に差し出す。

いつの間にこんなものを？

「IRIA、ずっとキッチンにいたのにどうしてこれを？」

「え？ ですか？ あひつき置つてきたと……」

「勝手に外に出たのー!？」

いま世界はアカシックレコードにより管理されている。いつ死んでしまつかわからぬ恐怖。そんな中IRIAは外に出て行つたとこいつのか?

「なんで勝手なことをするのー?」

怒つてないよ、私はいたつて冷静なのだ。

「だいたい最近のIRIAはなんなのー?私を困らせたいの?」

自分でなにを言つているのかよくわからないがおそらく優しい言葉をかけているだろう。

そうだ、そうに違いない。

私は、選ばれし者。

IRIAを、妹を救わなければならぬ。

冷静になれ……冷静になるのだ。

「……喉、渴いた。なにか飲み物ある?」

「あの……それを」

IRIAは私の手を指差す。

そこにはしっかりと私の手によつて握られたオレンジジュースがあつた。

なんだこれは?

急に私の手に飲み物が現れた?

それにIRIAはなぜまだ晩御飯を作つていないのだ?

酷く喉が渴いてしまった。

私は手にしていたオレンジジュース……いや、ブドウジュースか。ペットボトルのキャップを空け、その液体を喉へと流し込む。味はわからない。
というか、ない。

そりゃそうだ、これは確かに天然水だったはずだ。

それにしてもなぜ私はこれを飲んでいるのだろう？

そしてIRIAはなぜまだ晩御飯を作らないのだろうか？

「……で、IRIAはどうして玄関で突っ立つってるの？」

「いえ、ですから……飲み物を買いに……」

「嘘をつくなっ！」

IRIAは身体をびくっと強張らせると俯き地面上に視線をやった。この娘は危険だというのに無断で外に出て行つたのだ。
あれほど駄目だといったのに。
外には……外には……。

……外にはなにがあるのだ？
なにが危険なのだろう？

どうしてIRIAは俯いているのだろうか？
なぜか床にはトマトジュースがこぼれている。
私がやつたのか、IRIAがやつたのか？

「優紀ちゃん、病院に行きましょ！」

病院？病院だつて！？

「冗談じゃない。

あんな二つの人の命くらい救えないやつのところになぜ行かなければならぬのだ。

私はなにも患つてはいない。
気狂いになつたわけでもない。

ただ寝起きただけだ。

死んだつていくものか。

いや、死んだらいくことになるのか？

それに私は医者を目指していたのでは？

そう、そのために一生懸命勉強して……そして……今。

今なぜ私はこんなことをしているのだろう。

勉強、勉強しなきや。

こんな時いつも私を支えてくれた……支えてくれた？
誰かがいた気がする。

誰だつけ？

IRIA……じゃない気がする。

というかIRIAって誰だ？

ああ、なんだか眠くなつてきた。
はやく部屋に戻つて寝よう。

お腹すいたな……。

私は自炊をしていなかつた気がする。
ならば誰がご飯をつくるのだ？

さあ？誰かがつくつてくれるんじや？

「優紀ちゃん」

まあでもほら、私はアレ、アレだから今夜のオカズはハンバーグ

電車にひかれて綺麗なミンチになれます

「優紀ちゃん……」

「…………え？」

IRIA?

ああ、飲み物を貰つてくれてたんだっけ。

「ありがとIRIA」

私はリンクゴジュースを受け取るとさつそくその乾いていない喉を潤すために液体を流し込む。

「うん、美味しい。IRIA、ありがとうね」

「はい、優紀ちゃんのためですか？」

「じゃあ私もそろそろ寝るから……おやすみIRIA」

「はい、おやすみなさい優紀ちゃん」

「うして私の一日は終わった。

…………問題、なにか問題はあつただろうか。
いや、いつもどおりだ。
なにも問題はない。

明日もまた暇な一日か……憂鬱だ……。

You & I "Best Family"

歯車の狂いだした優紀の口常。
優紀は果たして正常なのか・・・それともおかしいのは世界のまつ
か。

Start Day?

朝……。

昨日は水曜日だったから今日は木曜日か。
最近学校でのことがあまり記憶にない。
それというのもPモバを始めたせいか？

学校に行く ゲームする 帰る。

このサイクルの繰り返しのような気がする。
そもそも私はなぜ学校に行っていたのだろうか？
学校なんて意味のないものではなかつたか？

夏休みも、もう近い。

それにゲーム大会だって近い。

そうだ、私はずっと遊んでいればいいのだ。
誰かも言つていたはずだ、もっと普通の女の子らしく遊んでいい
のだと。

……はて、そんなことを誰に言われたのだったか？

私は普通の女の子ではなかつたのか？

ああそうか、私は世界を救わなければならぬのだ。
現実を見ていられないわけではない。

むしろアカシックレコードから逃げることこそが現実から田を背
けているのだ。

私が悪いのではない。

私が間違っているわけではない。

私が変なわけではない。

私は……私は……。

「おは・・」・こま・。優・ちや・」

「つー?」

突如私は夢の中から現実に引き剥がされる感覚に襲われた。
誰かが私を呼んでいる?

「おはよう、”お姉”ちゃん」

部屋の扉のほうを見てみればそこにはIRIAが立っていた。
私を起こしにきたのだろう。
私が既に目を覚ましている」と驚いているのが、少しばかり目
を丸くしている。

「おはようIRIA」

そういうて私がベッドから出ようとするとIRIAが駆け寄り、
その手伝いをする。

相変わらずの過保護つぱりだ。

私はそんなに弱くないというのに。

IRIAは持っていたアクセサリ 赤と青の配色がされた紐付
の鈴を私の首に付ける。

いつもIRIAはこのアクセサリを私に付けたがるのだ。

「ねえIRIA、どうしていつもこれを付けるの?」

「だって、可愛いではないですか」

至極普通の返答だった。

「どこから持ってきたのかは知らないが私はこのアクセサリがあり好きではない。」

「なにが嫌いかというのは自分でもよくわからないけど本能的に、なんとなく嫌いなのだ。」

「多分、前世の私はこれに似たものになにか嫌な記憶でもあるのかかもしれない。」

私はベッドから出るとクローゼットから学校の制服を取り出した。

「優紀ちゃん、なぜそれを？」

「なぜって言われても……。」

「学校に行くから」

「とか答えるようがないのだけれど。」

「今日は土曜日……学校はお休みですよ？」

「そうそう、今日は木曜日だから……え？」

「ですから、今日は土曜日なので学校はお休みですよ？」

「なぜ？」

「ですから、今日は」

「なぜ木曜日じゃないのー？」

思わず声を荒げてしまつ。

「ああ、これもアカシックコードが狂ってしまった」と云ふ事象か。

今度は田口ひろを操るひつこのつか。

「ああ……、」めん、確かにそうだったね

あまりH.R.I.Aを脅かすのも可哀想だと想い、思に出した風に装つておいた。

「はい、ではもうすぐお昼飯ができるのでコンビングに来てくださいね」

「あ、うん……」

そしてH.R.I.Aは部屋を出て行った。

お昼はなん?

今は朝ではなかつたのか。

携帯を開き時刻を確認すると確かに土曜日で、時刻はお昼時を指していた。

なんだ、私が早起きをしたわけではなかつたのか。

ん? そうこえば……。

ならばなぜ、H.R.I.Aはあんなに驚いたような表情をしていたのだろう?

それにその時いつもと違う呼ばれ方をしたよくな……。

そう、例えば……例えば、なんだ?

私はなんと呼ばれていた?

「優紀、ちやん……」

自分の呼ばれ方を再確認しなければならないほど世界は狂い始めたのか？

いや、それは世界は関係ないのではないだろうか？

狂っているのは……ワタシ？

そんなわけない、私は正常……いたつて冷静だ。

半ば自分に言い聞かせるようにして私はリビングへ向かうことにした。

「今日の『』はんはなんでじょつ優紀ちゃん？」

リビングに着いてIRIAの開口一番がこれだった。
なんでじょつもなにも……。

「お米……と、味噌汁と沢庵」

「はい、正解です」

いやいや、意味が分からぬ。
見ればわかるじゃないか。

馬鹿にしているのだろうか？

IRIAに限つてそんなことはないだらうけれど……。

「なんでそんなこと聞くの？」

「特に意味はないですよ

意味のないことをこの娘がするだらうか？

やはりこれもアカシックレコード？

全ての日常は決められたとおりに……。
さすがになんでもかんでもそっち方面に繋げすぎか……。

「では、あーんしつくだれー

「ええ……また？」

「二つ目のレコードですか。はい、あーん」

またくIRIAの甘えっぷりには困ったものだ。
なんとしてでも私に奉仕したいらしい。

「まあいいけど……あーん」

仕方ないので口を開けてやる。

いや仕方なく、といえばやや語弊はあるか。そんなIRIAが可愛くて仕方が無いのだ。

ものを発見した。

例の、大量自殺事件の話題だ。

こんなところで悠長にご飯を食べている場合ではない。

「アーティストの心」

最後の一 口をさつさと飲み込み席を立つ。

「あ、あの……食後の『ザガート』が……」

「『めんね』IRIA、今はいいや。後で食べるね」

「はい……」

せつかくのデザートだが、今は事件のことが優先だ。

「IRIA、私この事件を解決してみせるからね」

「え？」

ぐつ、とIRIAにガツッポーズを見せると私は駆け足で自分の部屋へ戻っていった。

「さて……」

部屋へ戻った私は早速携帯でネットワークに繋ぐ。
大量の自殺事件……もとい殺人事件のヒントを得るために。
ニコースによると自殺者の中には遺書などの類はまったくない上
での自殺だと書いてある。

つまり自殺者達は皆正気ではなかつたことがうがえる。
だからまず調べることはなぜ皆は正気でなくなつたかということ
だ。

某大型掲示板にてその情報について調べることにする。

あそこならば並のニコースどこのではないほどの情報があるはず
だ。

事件に関係ありそうなワードで検索をかけるとそれらしこスレッ
ドを発見することができた。

【アストラル光の】謎の大量自殺事件考察スレ part32【導 き】

事件が起こつたのはつい最近だといつのにもうスレッドはpart
t32をむかえていた。

やはり前代未聞な事件かつ、恐怖の事件に皆も情報が欲しいので
あらう。

スレッドを覗いて見るとかなり事件の考察が進んでる感じ
くつかの事項も書いてあった。

1・この事件は何者がアカシックレコードにすなへて起きたものである」と

2・全員が正気を保っていない状態で死んだとされていること

3・と、言つても自殺者たちは普通に生活している一般人ばかりといふこと

4・自殺現場を叩きした者もあることから他殺事件ではないこと

5・事件のキーとなつたるであろう自殺者の待ち受けにされたいた画像データ

.jpg

6・画像を携帯の待ち受けにしても死んだりはしなかつた

7・今のところ自殺者たちの共通性は見られないことから死んでる者はランダム?

8・芸術家の先生が死ぬ直前に残した作品画像

.

9・平常時からいきなり正気を失う瞬間を撮影した動画データ

.flv

以上、テンプレ。

なるほど、掲示板の皆も謎を解明するために必死らしい。

とりあえずこのスレッドが最新なのでこここの話題を追つていいくことにする。

名無し・これって釣りじゃない……よな?

名無し：びびり

名無し・俺も携帯の待ち受けを変えたけど特に変化なし。これは関係ないのか?

名無し・アカシックレコードについてググつてみた。確かにこれ

に「お前自殺する」って記録されてたら今の事件のよつこなると思
うが……

名無し…ペロッ……これは、アカシックレコード…

名無し：迷探偵帰れ www

名無し…これはもう死ぬやつって決まつてんの?それともこれが
ら決まるの?

名無し：アカレ」にちなんだ殺人なんだからもつ決まつてんじ
やね?

名無し：でもテンプレタ番の動画のやつって撮影者に自殺食い止
められてるよな?一人一組でいれば死なないんじゃね

名無し：「はーい、一人組みつくつてー」

名無し…ってことは俺等ぼっちは皆死ぬのかwwwうはwww

名無し…リア充氏ね

名無し…どうせ死ぬんだからと思つて今日貯金全部使つてきた俺
勝ち組ktkr

名無し：死ななかつたらどうすんだよ www

名無し：死んでも死ななくても死ぬ www

名無し…負け組みじゅねーか www

名無し・今北産業

名無し・ぼっち

勝ち組勢（笑）

死ぬ

名無し：把握。これって真剣笑い事じゃなくやばい状況なんだよな？

名無し：死亡するやつらの共通点が見当たらぬからな、ランダム死に選ばれて死ぬ可能性も無くはない

名無し：これってあれだよな、何とかノートみたいにな

「……なにこれ」

まるで危機感のないカキコミだらけじゃないか。
きっとこんなやつらから死んでいくに違いない。
もひとつ有力な情報はないものだろうか？

名無し：そりゃ最初に死んだやつって誰なんだ？

名無し：確かに名なやつだった希ガス

名無し：あれだ、Pモバのレベルランキングで1位だったやつだろ？

名無し：俺そいつとパーティ組んでたけど、そういうや死ぬひつと前のメツセが妙だつたな

名無し：k w s k

名無し：ゲーム中田がチカチカするつて何回も言つてた。それこそ何十回も

名無し：それ田悪くしてるだけじゃね？

名無し：いや、なんか本当に切実な感じでさ。なんか嫌な予感するつて言つてた

名無し：三・二・一なんかヒントになるんじやないかそれ

名無し：動画になつてるやつ見てるとなんとなくだがちょっと異常な回数田を擦つてないか？

名無し：おお、確かに普通じゃない回数だな……目が関係してんのかな？

名無し：つーかあの動画でやつてるゲームアモバじやね

名無し：つー！

名無し：え……まあかもバが原因とか……？

スレ主@ rawseed - ちよつと自殺者の共通点アモバやってるかどうか調べてくるわ

名無し・スレ主k t k r ! !

名無し・毎度思つがスレ主は警察かなんかなのか?持つてる情報
多杉だろ常考.....

名無し・ヒント・犯人はスレ主

名無し・ねーよwww

名無し・主、今調査中か

名無し・これはwwwせざるを得ない

名無し・魔王昇降剣を使わざるを得ない!!

名無し・ミスター サムライ帰れ www

スレ主@q a w s e d r f : ただいま、ドンピシャだったわ。事件の調査の、協力に感謝します。

名無し・マジかよ..... Pモバやつたら死ぬってこと?

名無し・つーか主つてリアル警察なんじゃね?

名無し・事件も気になるが主の正体も気になる

名無し・ヒント・犯人はスレ主

名無し・一番煎じ乙

スレ主@qawsedrf: Pモバになにかしら事件に関してい
ることが判明。今問い合わせてるがみんなログインしないほうが
い、マジで。

名無し…アモバつておめ……世界中の皆プレイしてんじやねー
か?

名無し：やつてゐる期間長いほうがなんとなく死ぬ確立高そうだが
……いかんせんデータがないから集計とううにもとれないな

スレ主@qawseadr : 集計とつてみた。ほんの少しだが
その傾向はあるみたいだ

如無し：はやすぎフイタWW

名無し：主は必殺仕事人かWWW

「Pモバをプレイすると……死ぬ?」

Pモバと発狂の関連性があまり分からぬがデータとしてそう残つてゐるらしい。

野にいれておいたほうがいいらしい。

名無し：俺ちょっと実験していくる

名無し・勇者あらわる

名無し・実験ついでにひこじる?

勇者(仮)@yoshimura.yoshiaki...「トラハンつけとくな。えりと、簡単に書つといまからアサバにログインしてしまはりへゲームやつてくねつてこと

名無し・おこおこ、それやべんんじゃないか?

勇者(仮)@yoshimura.yoshiaki...「ゲーム終わったらこのスレに「今から死にます」って文章書いて俺がそのまま席を立つたらそれをカキコハルよつに細工しておへ。それでカキコハルせれたら俺死亡のお知らせ。生きいたら一日の終わりの前には文章書き換えて無事だつたとでも書き込むわ。

名無し・すげえ勇気だ……

名無し・でもこれでアサバに原因あるかわかるよな

スレ主@yoshimura.yoshiaki...危険です。やめておこしてくだそ。」
「ちりで調べますので

勇者(仮)@yoshimura.yoshiaki...「ログインします。文章と細工セツア完ア、いってきます。

名無し・勇者すぎるだろ……

名無し・えりなんなんだ……

名無し…わわざわ……

勇者（仮）@ソルジャーkoto：今から死にます

名無し…-?

名無し…ちよ、おま……瞬殺か!?

名無し…勇者H……

勇者（仮）@ソルジャーkoto：すいません、ケツ痛いので座り
なおしたらカキコロしてしまいました；

名無し：wwwwwwwwwwww

名無し…アホスwww

名無し…天然かwwwwww

勇者（仮）@ソルジャーkoto：では氣を取り直してもう一度…
…いってきます

名無し…ぐりぐりく

名無し…なんつーか……勇者さんには死んで欲しくないわwww

名無し…なぜか勇者が死なない氣がするのは俺だけじゃないはず

名無し…同意

名無し…さて、どうなるのか……

カキコミは現在ここまでで止まっていた。

どうやら人柱とばかりに一人、勇敢な者がアモバにログインしたらしい。

私はその結果を見るためについあえずここで待機することにした

……。

私はステレオに手を伸ばし適当に曲を再生する。

部屋に流れる旋律は - La Campanella -

日本語では”ラ・カムパネッラ”と呼ばれるもの。

フランツ・リストが作曲した超絶技巧練習曲と並べて上げられる有名な作品だ。

踊るようになり、流れるように紡ぎだされるピアノの音は私を心地よい世界へと誘ってくれる。

「うん、悪くないね」

いや、悪くないどころかとても落ち着く。

今この世界が危機に瀕しているなんて、そんな非常識なことが本当にあるのかと疑いたくなるようなくらいの世界の静寂と旋律。しばしの間私はそんな気分に浸っていたが現実はそう甘くない。今世界では間違いなく危険が迫っている。

いつ、自分の喉下に向けられている刃物が私を貫くかわからないのだ。

それは今すぐかもしれないし、こないのかもしれない。
だがそんな人を増やすわけにはいかない。

そのために私はこうして事件の解決するために、そしてその情報を集めるためにこの掲示板に張り込んでいるのだ。

しかしいくら待てど掲示板の勇者とやらからの新たな情報はない。そうこうしている間にもう晩御飯の時間も近づいてきた。
お腹も減ったし、そろそろリビングに行つてみようかな?
ステレオもつけっぱなしに、私は部屋を出る。

「ナナ！？」

今、視界になにが映った？

ここは私の家だ。

そして、今のは？

今廊下の角を曲がって行つたのは……ナナ？

なんでいるのか知らないけどいるならいるで、今度こそ真相を暴いてやる！

走つて追いかけ私も角を曲がる、がナナの姿はない。

どこへ行つた？

リビングへ行つてみるとちよつと晚御飯の準備をしているIRI Aがいた。

「あ、優紀ちゃん。今ちょうど晩御飯の仕度を……」

「ねえIRI A！」

「え、あ、はい？」

「ナナを見なかつた？」

「い、いえ……？」

「ううむのはずなの。見てない？」

「今日はお客様は来てないですけど……」

「あ、やつ……」

私の見間違い、か?
でもちょっと待てよ。

このまま私の勘違いですませていいのだろうか?
ナナはなんと言つていた?

そうだ、”直感に従うな”と言つていた。

今、やろうとしていること、考えてること……直感はアカシックレコードに決められていることだ。

つまり直感にあえて従わないことでアカシックレコードに対抗できると、それがナナの考えだ。

するといまのは私の見間違いではなく確實に居たと、そういうことになるのか?

色々な考えが私の頭の中を過つていく。

ナナは二人居る?
ナナは魔法使い?
ナナは……。

いや、いまはそんなことが問題ではないはずだ。

さきほどナナが見えたこと自体に意味があるはずなのだ。
ナナは私になにかを伝えようとしている?

実際に会つても、そんなことを知らないといい張るナナ。
もしかするとそれにはなにか事情があるので?

アカシックレコードに逆らひ作戦、その行為で私になにかを伝えようとしているのか?

ならば私が今するべきことはなんだろ?!

ヒントが余りにも少なすぎる。

とりあえずナナに連絡をとることが先決かもしない。

「IRIA、今日は晩御飯はいらないから

「でもちゃんと食べないと身体を」

「大丈夫、自分の体のことくらい自分が一番わかつてるよ」

「……」

IRIAがあきれたような、悲しんでいるような表情をこじらせて、向かって後キッチンのほうへと消えていった。

「めんねIRIA、これも世界の……そしてあなたのためなんだ。

「あなたはきっと私に近づくほど傷ついていくだろう。でも、それでも側について欲しい」

……？

「今私はなんと口走ったのだろう？」

遠い昔に……いや、もしかすると意外と近い昔、私は……。

「……つー」

頭が痛む。

キリキリと、締め付けられるような痛みだ。

嫌な汗が滴り落ち、歯を食いしばる。

なぜだ……私はなにかとてつもないことを忘れ、そして見落としている気がする。

この頭の痛みはその警告なのだろうか……？

そして私はなにから逃げている……？

ずっと、それもいつからかずっとだ。

ずっと夢の中から抜け出せないでいるような気分だ。

私は……私は？

「ソウダ、ジケンヲカイケッシナキヤ」

あ……れ？

私はどうしていたのだったか。

そう、思い出した。ナナに連絡をするんだった。

私は自分の部屋へ行くとベッドに倒れこむ。

「あれ、なんでカンパネラが流れてるんだろう？」

なぜかステレオからはクラシック音楽が流れている。

おかしいな、私は今部屋へ帰ってきたばかりだというのに。

……まあいい、とにかく私はナナに連絡を取らなければならない。

Pモバにログインするとやはりナナもログイン中だった。

いつもの様子で無事だとわかるとやはり安心する。

＜こんばんは、姫＞

＜うん、こんばんは＞

＜調子はどうですか？＞

＜まあまあ……かな。それより、またナナを見たよ＞

＜そうですか……ですが私はやはり今日ほどこにも行つていません

よ＞

いつもどおりの返答だ。

ナナはここになにか重要な言葉を、意味を隠しているはずだ。それもアカシックレコードに触れないとくらいの行動で。考えるんだ私。

どうにかアカシックレコードに知られないようにナナの思惑を知るにまどりしたら……？

「ナナは、嘘をつく？」

「いいえ、今までついたことはありますよ」

「それ自体が嘘つて」とはありますか？

「ありません、私は嘘をつきません」

「もうなんだ……ナナって人間じゃないよね」

「ええ、もちろんです」

違和感だらけの返答だ。

嘘をついたことがないだつて？
それ讓人間じゃない？

……もしやナナはとてつもない嘘をついているのでは？

今までのナナの返答を逆にしてみるとどうだ？

嘘をついたことはあり、嘘をつくことは十分にあります。

そして人間である。

こうしてみればまったく普通になる。

ナナは今まで逆のことと言っていた？

と、するとどうぞ前回の会話も全て逆にすると……？

ナナは、今日どこかに行つていたとなる。

もしかするとナナは私と何度も接觸しているがアカシックレコードに語られないためにわざとこんなことを言つてているのか。

ナナは本当に、魔法使いなのか？

そうだ、これも聞いてみたらいいのだ。

「ナナつてもしかして魔法使い？」

「いいえ、違いますよ」

やはりそろか！

ナナは魔法使いだつたのだ。

私が世界に選ばれし者なのだ、魔法使いが友達だつて別に不思議じやない。

そうか…… そだつたのか。

ナナはこうして私が気づくことを待つっていたのかもしれない。

私にまかせつきりじやなくて、ナナもちゃんと考えているんだ。

「…………あれ？」

…………一瞬だけだけど、その考えは無理があるようと思えた。

でも、自分が納得できたのだ。
きつとこれであつている、筈。

選ばれし者、魔法使い、そして世界の危機……。

どうやら私の日常は意味がないどころか超非常へと変貌してしまったようだ。

Akashic Records?

最近思つことがある。

ふと、一瞬だけ。

ただ一瞬だけだけど、私はどこかおかしくなってしまったのではないかと。

誰かが、私じやない誰かが、偽りの私を演じているのではないかと。

なんの根拠もないがただ思つだけ。

私の思考を上書きするように、綺麗に彩られた絵に無理やり黒で塗りつぶされるように、私が私じやない時があるよつな気がするのだ。

まじ、いつしてこんなことを考へているでしょ？
するとたゞ、頭の中真っ白になつてさ、なに考へてるかわからなくなつてしまつた。

……あれ、私は今なにを考えていたんだっけ？

最近こんなことが多い。

急になにかを忘れするのだ。

なにか、大事なことを考へていた気がする。
いや、しかし今はナナとの会話が大事……。

「……！？」

Ｐモバでナナと会話していた私だったが、急に知らないサイトにアクセスしていた。

本当に脈絡もなにもない……。さればアカシックレコードのせいなのか？

”考察少女”

サイトの名前はただ、そう綴られていた。

「数え切れぬ天使の翼」
「ようこそ、あなたは神に選ばれし祈り子の一人です」
「死と生の粒子」
「明日もし世界が無くなるとしたら私たちは」「信じるのです。それが私たちにできること」「力・ヌルソー・エド・ヨ・ダーラ」

……よくわからない単語の羅列だ。

なにかの宗教……カルトサイトなのだろうか？
サイトの概要はよくわからないがとにかくとにかく信ずることが目的らしい。

内容は哲学、といつには宗教じみすぎているがアクセス数はなかなかのものだった。

コンテンツは掲示板しかない。
その中にたくさんのスレッドが立っている。
どうやらこの宗教者たちの語らいの場らしい。
なんとなしに覗いて見るとやはり私には意味の分らない言葉ばかりが並べられていた。
……一つ気になるスレッドがあつた。

アカシック……レコード？

やはりこのようなサイトだと扱われやすいものなのか、どうやら今回の事件についての会話が行われているようだった。

「え……なに、これ……？」

そのスレッドには私とナナの名前があった。
なんどここに私とナナがPモバで知り合った時からのログ　会話が晒されているのだ。

「私たちが事件に関与するから、会話がクラックされているってこと……？」

いや、だが私たちは知り合ったときにそんな事件のことは知らなかつた。

だからそんなはずはない。

でも、このサイトが事件に関与する可能性がある者たちの会話をクラックする方針だつたとすれば……それもありえる。

これはまずいことになつた。

いくら私とナナが会話内容を知られてもいよいよ会話を暗号化（反対の言葉）でしていたとはいえ、もしかすると感づかれるかもしれない。

……誰に感づかれるのだろうか？

そりやこのサイトの管理人か、事件の犯人なのでは？

いや、もしかするとこのサイトの管理人＝事件の犯人かもしれない。

とにかくこのことをナナに知らせなければならない。

PJのサイトをお気に入り登録して、私はPモバにアクセスする。

ログインついでにクラック対策としてパスワードを変えておく。

「姫? どうしたんですか?」

「聞いて、ナナ。私たちの会話はビリヤージュクラックされているみたいい」

「クラック……つまり覗かれていると……」

「うん、今ログインパスワード変えてきたの。ナナも変えたほうがいい」

「わかりました。それで……どうしてそのことを?」

「なんか変なカルトサイトで、見つけたの。あそこの管理人が犯人に違いないよ」

「そのJURを送つてもらえますか?」

「はい、いいだよ」

私はお気に入り登録しておいた考察少女のJURをナナに送信した。

「えっと……姫?」

「ね? 私たちのログがあったでしょ?」

「あの、どうしてアモバのJURが送られてきているのですか?」

ん? どういうことだろ? つ?

送り間違えたのかな?

「ちょっと待ってね」>

ちゃんと考察少女にカーソルを合わせてRキーをコピーナナに再送信する。

「これでどうかな?」>

「姫……やはりアモバのJRCが」ひかり……>

なぜだ、一体どうなっている?

アカシックレコードの抑止力がかかっているのか?

もう一度、今度は自分でアクセスしてみる。

「確かに……ある」

考察少女は確かにあった。

なぜだ? ズレすぎている。

世界はどうなっている?

私だけが世界から拒絶され、別の世界にいるような

私だけ、ズレている?

「うう……あ……・ああ……! ?」

脳の奥底で、なにかが這いずり回るような感触。

私の意識を強制的に上書きする感覚。

私が……私でなくなる……。

そうだ、いつもの”これ”が私を変な風に変えていく……。

わづ黙だ……また……意識……黒く……な……。

Requiem?

「うん、いい朝ね」

朝、目覚め私から開口一番飛び出した言葉は不自然に爽やかなものだった。

なんだか昨日は色々と中途半端なまま寝てしまつた気がする。なんかこう……携帯が関係しているような感じだったような。そう思つたので携帯を開きブックマークを見ると……。

「……あれ？」

なぜだかPモバが一つ登録されていた。

寝ぼけていたのか、はたまた操作ミスなのか、まったくもつて身に覚えがない。

そこでふと目に映つたのは携帯の画面下部にある日付表示。

"sunday"

そうか、もう田曜日なのか。

なら今日はP.P.の大会の日じゃないか。

こんな大事な日のことを昨日の日の朝に気づくなんてどれだけ間抜けなんだ私は。

幸いまだ朝の早い時間だ、十分に準備する時間はある。

私はベッドから起き上るとそのまま立ち上がり立つとするが……。

「あ……つひとつ?..」

ドンッ、と若干鈍い音を部屋に響かせながら私は倒れてしまう。

立ち上がるつゝあるが上手く立ち上がる事が出来ない。

「あ、れ？なんかバランスが……」

自分が当たり前だと思っていた平衡感覚がズレている。
自分の世界がズレている。
自分は……ズレてばっかりだ。

「優紀ちやん！…今す”こ音が……あつ」

そのまましばらぐもがいてると部屋にH.R.I.A.がやつてきた。
どうやら先ほど私が倒れたときの音を聞きつけてやつてきたらしい。

H.R.I.A.の差し伸べてくれた手をとつ、私はよつやく立ち上がる
ことが出来た。

「こつも朝起きたときは私を呼んでください」と、言つていたでしょ
う。

困った顔をしながら私を諭すH.R.I.A.。どうやら怒つてこるわけ
ではないようだ。

「いや、起きるぐらじH.R.I.A.を呼ばなくたって一人でできるよ

「できないからじつして私がお手伝いしているんですよ」

まつたくもつてのとおり、H.R.I.A.の皿つとおつだ。

「ねえ、H.R.I.A.。どうして私はこんなに朝に弱いのかな？」

「それは優紀ちゃんが低血圧だからですよ」

なるほど、私は低血圧だつたのか。初めて知つた。
変に偏つた平衡感覚もしばらくすれば元に戻つてきた。
といふかこれは低血圧関係あるのだろうか、私は知らないので謎
である。

「今日は大会がある田でしょ? 早く仕度しましょう

私は寝ぼけ半分混乱半分の状態で、IRIAに言われるまま誘わ
れるままにリビングへ向かうのだった。

「ねえ、IRIA」

「なんですか優紀ちゃん?」

朝の食事を終え、今度は自室にてIRIAに着替えを手伝つても
らつている。

いつから私は一人で着替えや食事を行わなくなつたのだろうか?

「私はビඩして大会に出ることにしたのかな?」

「それは……やっぱり優紀ちゃんは強いですから、優勝できるとお
もつたからではないのですか?」

「んー……」

そう、私は確かにPPの大会に出る。

あのクラスメイトのお嬢様、皇円寺姫竜も出場し私を倒すと宣言していたことも覚えている。

だがそのきっかけ、どうして大会に出ようと思つたのかその理由が思い出せないので。

「大丈夫です、優紀ちゃん。ド忘れくらい誰だつてしまますよ」

「そうかなあ……」

ねえ、IRIAはどうしてそんなに悲しそうな顔をするの？

ただのド忘れなんかじゃないんだよね？

大会に勝つて、優勝して……それで……それからどうなるのかな？

優勝することができたら、私は普通になれるかな？

……あれ、普通になるってなんだ？

今普通じゃないとでもいうのか？

「……嫌だ、怖いよ……」

「大丈夫、大丈夫ですよ優紀ちゃん。きっと優勝して、それからもいつもどおりの日常です。優紀ちゃんがいて、私がいて、和真さんも富子さんも春香さんもいます」

「そうだ、私にはIRIAに和真がいる……。」

富子……春香……？

私の知らない人だ。

きっと仲良しだった誰かのことをいつているのだろう。みんな消えて、死んで、空に還つていったんだ。

狂わされたアカシックレコードによつて……。

「帰りたい……私も”そつち”に帰りたいよIRIA……」

「優紀、ちゃん……？」

「IRIAのところに帰りたい……もつ“こんなところ”は嫌だ……
帰りたいよ……」

多分私は泣いていたのかもしない。
でも、私は嘘をつきすぎていた。
もうそろそろ限界かもしない。
もはや自分が泣きじゃくっているのか、泣くのを必死に我慢して
いるのか、それとも泣いてなどいないのかすらわからなかつた。

「勝ちましょウ優紀ちゃん。勝つて……帰る方法を一緒に探しよ
う?」

「…………うん」

IRIAはその小さな体で私を一生懸命に抱きしめると励ましの
言葉をかけてくれた。

今日の大会は、私のためにもIRIAのためにも勝たなくてはな
らない。

絶対に……負けられない。

一息ついて、出かける準備は全て整つた。
そろそろ家を出てもいい時間にもなつていた。

「では……そろそろ行きましょうか?」

「うん、そうだね」

IRIAと外出なんていつぶりくらこだわつか?

……毎日していたような気がする。

それに景色がなんとなく違うような『気』がする。

本当に私は曖昧でズレたやつだ。

「ねえIRIA、あのアパートっていつからあつたつけ?」

私が指さしたのは私たちの家のすぐ近くにあつた安そうなアパートだ。

こんなアパート、あつたつけ?

「ずっとありましたよ、優紀ちゃん」

「……そつか」

もう私にとつて嘘なんてどうでもよかつた。
きつとすつかり割り切つたから、今まで見えてこなかつたものが
見えてきたのだ。

でも、正直言つと自分で割り切れていないことがまだある。
それを意識してしまつのが怖いから、今はまだ考えないようにして
いる。

IRIAといつづして歩くことが、なんだか奇跡のような『気』がする
んだ。

「IRIA」

「はい」

「……なんというか、ありがとう」

なんだか、すこし感謝したい気分だった。
別に死亡フラグをたてたとかそんなことではないけれど、今が言
う機会かなと思つたのだ。

照れくさかったのでIRIAの顔は見ないことにした。

今IRIAはどんな顔をしているのだろうか？
きっと驚いているんだろうな、もしくは恥ずかしがつているのか
な？

そうしてすこしづぱかり歩くと田的地区 ゲームセンター野中FR
Tが見えてきた。

今日、じじで優勝してそして全部の嘘を暴いてみせる。

それが私の目的。
それが私の……物語。

Requiem?

「さあ、ここで一人側のプレイヤーは？」存知……姫選手だあ……」

場に相応しく、そして私にとってはそれは私を私たるものとする言葉。

今私は大会会場 ゲームのアーケード筐体の前にいる。既にはじまり何試合かは終えているこのマニア大会でとつとつ私の出番になったということだ。

皆お祭りムードで私を呼んでいる。

テンションは確かにあがってくるが私には絶対に優勝しなければならない目的があるのだ。

だからといふべきか、私は騒ぐことなどせず集中した勝利のみを目指している。

まずは第一試合、ここはただの通り道にすぎない。

野中最強といわれた私にとつてはまだまだ敵ではないのだ。

私のシュナイダーは敵の追随を許さず、ただ一方的に攻撃を続けていく。

そこには油断や遠慮などという言葉は無い。

ただ確実に、堅実に勝利していく……それが今の私のプレイスタイルだ。

相手はパワー・タイプのギューカクだが先日戦ったホタテ貝選手に比べたらまだ甘いプレイヤーだった。

第一ラウンド、第一ラウンド共に私の圧勝で勝負は決した。次の試合までしばしのインターバルだ。

「さすが姫選手ですね！絶好調のようですが、狙うはやはり優勝で

すか？」

席を立つと実況の人が私に近づきマイクをつきつけてきた。
「そうだなあ……」ここで私の意志を皆に聞かせてやるものいいかも
しない。

そう思つた私はマイクに向かつて静かに一言。

「はい、絶対に負けませんから」

今私はすこぶる気分がいい。
すこし自信過剰であつただろつか?
いや、この言葉は決して嘘にしてはならない。
私が優勝して、そして……それで終わり。

「自信満々のチャンプ、姫選手でした!では次の試合は……」

……さて、すこし休もうかな。

「優紀ちゃん、じつちです」

その声に振り向くとそこにはこの大勢の観客の中、私の分を含めたイスを確保してくれていたIRIAがいた。

「ありがとIRIA」

「いいえ、それにしても……これでまずは一勝ですね」

「当然よ、私はこれからも勝ち続けるんだから」

「そうですね、私も応援しますから」

やはり応援してくれる者がいるところのは心強いことだ。

ただそれだけで私の強さがあがっていく、そんな気さえしてくる。しばらくのインターバルを満喫すると私の名を呼ぶアナウンスが聞こえてきた。

どうやら私の第一試合を行つりしき。

「じゃあ、いつてきまーす」

「はい、いつてらっしゃいです」

ただそんなやりとりをすると私は筐体へと向かう。私を応援する歓声に混じりどうやら相手の選手を応援するらしい歓声も聞こえてくる。

どうやら少し名づけの選手らしき。

「では、バトルスタート!」

実況のコールと共にバトルが始まる。

私の使用キャラはもちろんシュナイダー。

相手のキャラはアリアというブリーストタイプのキャラだ。

魔法を得意とするアリアはその戦闘タイプから接近戦を好まない。むしろ遠距離戦での射撃能力や魔法の詠唱がやつかいだ。

こちらとしてはあまり距離を離すと面倒な戦況になりかねないので開幕と同時にダッシュし接近する。

しかしだだダッシュしたのではカウンターを喰らいかねないのでただのガードより少し強力な、専用ゲージを消費するフィジカルガ

ードを仕込みながらのダッシュをする。

こうすることで相手がカウンターを行つた場合はファイジカルガードが発生し、行わなかつた場合はダッシュしたまま接近できるということだ。

案の定アリアはカウンター行動を仕掛けてきたのでそれをガード、すかさずジャンプで相手の背後に飛ぶ。

距離は近く中距離といったところか、ここはけん制に発生が早くそれなりにリーチの長い下段攻撃でアリアの足元をすくいにかかる。しかしアリアはそれをきつちりガード、バックジャンプにより距離を離そうとするが私はそれを見逃さない。

シャイニングレインを発動させアリアの頭上に光の剣の雨が降り注ぐ。

空中にいるアリアはガードせざるをえないのこれでこれをガード、そしてそのまま地上へ降りてくる。

その隙をダッシュ酉アタックで攻撃し、アリアをのけぞらせる。

そこに基本コンボ、小技からシャイニングソードまでを繋げさら姫スペシャルに移行する。

アリアの体力を奪いつつ、光の剣ゲージの回復も行つた。

ダウンを奪つた後も抜かりなく、魔法を唱えさせる前に接近 攻撃 ダウン 接近の粘着を繰り返し1ラウンド目は勝利することに成功する。

続く2ラウンド目もダッシュ酉ファイジガ仕込みにて接近をはかる。

今度もカウンターを行つてきたのでそれをガード私はさつきと同じ方法で相手の背後をとる。

しかしアリアは前方 つまり私から離れるようダッシュし距離を離されてしまう。

まあいと、思った時には既に遅かつた。

炎と雷の遠距離魔法がシュナイダーに襲い掛かる。

それらを落ち着いて回避するもアリアは自らに強化魔法をかけてさらに強力な遠距離魔法を唱えてくる。

無数の弾幕にすこしダメージをうけてしまったがこのままやられる私ではない。

幸い前回のラウンドで残しておいたゲージが今MAXまで溜まつたところだ。

このゲージをクイックジャンプといつ通常ジャンプ回数の限界を超えたジャンプをゲージ消費にて行うシステムに使用し、アリアへの接近をはかる。

アリアの強化魔法を計3回のクイックジャンプで避けきり、ついに接近することに成功した。

まずは足払いをかける……と見せかけそれをわざと射程範囲外で放ちスカす。

そして相手がガードを固めているところを画面端に向けて投げ、バウンドしてきたところを応用コンボ～エリアルでダメージを稼いでいく。

相手がダウンをしている隙に光の剣を生成、さらにシャイニングレインを降らせて相手を固めていく。

アリアの立ち上がりにもう一度、かぶせるように足払いを放つ。

相手はそれをガードしようとするが私はその足払いをクイックジャンプでキャンセル、後ろをとることに成功する。

相手の虚をつき、ガードを崩したところで基本コンボから姫スペシャルに移行～さらに余ったゲージを消費しへブンインパクトで相手を空高く吹き飛ばす。

地面上に落するタイミングに合わせシャイニングソードで拾い、

そのままエリアルでアリアをフィニッシュする。

私の勝ちだ。

もともと体力が低く接近戦の弱いアリアだ、私のシユナイダーが接近に成功した時点で勝ちはきまつていいようなものだった。今まで戦った相手よりは多少強かつたが、まだまだ私のほうが強かつたようだ。

これにて第一試合も私のストレート勝ちにて幕を閉じていった。

続く第三、第四試合も危険な場面無く勝ち進んでいきどんどんと優勝へと近づいていった。

そして決勝戦……これに勝てば私の優勝だ。

「決勝戦！ 1P側のプレイヤーは皆さんご存知格ゲープリンセス、姫選手だあああ！」

その紹介はなんとかしてほしい、恥ずかしいから。

「そして2P側のプレイヤーはまったくの無名ながらもここまで勝ち進んだ隠れた実力者！ ヴラド選手だあああ！」

「ヴラド？」

「ヴラドってたしかあれだよね、確かいつも映画とか本とかで出でくるあの……

「…………こんにちは、水無瀬優紀」

私の目の前に立っていたのは皇円寺姫竜その人だった。

そういえば姫竜さんは学校で私を倒すといつていた。ヴラドという名前でこの大会に出場していたのだ。

「「Jさんに、姫龍さん」

言葉「J」そただの挨拶だったが、私たちの間には異様な空気が漂つていた。

「正直あなたが「J」までくるとはおもっていなかつた」

「そりゃチャンプだから、負けられないしね」

「でもあなた、事件の謎は解けてないみたいね」

「つーっ」

今……なんて言った？

「あなたはいつまでも自分に嘘をつき続けていい……ゆえにあなたは私には絶対に勝てない」

私が抱えている問題を的確に……「J」の女は一体？

「J」のまじやおもしろくないからヒントをあげるわ

「ヒント……？」

「ええ、大サービスよ。今回の事件のキー「ワード」はずばり……サブリミナルよ」

「さふりみなる？」

「わからない？……相変わらずなのね、そんなJ」とでは元に戻るな

んてことは絶対に不可能。ましてや今回の事件を解くことなんて

私の本能が告げていた……今こいつに負けてしまつと全てが台無しになるよつたな……そんな気がする、と。

「なにを言つてゐるかいまいち理解できないけど、とにかく今はそんなことは関係ない。勝つか負けるか……それだけ」

「そうだ、今自分がやるべきことをやればいい。
それ以外のことは一回、排除すべきだ。

「そうね……では、そろそろ戦いましょうか？」

「…………うん」

戦いの準備は整つた。

最後の戦いが今、始まろうとしていた。

「では決勝戦、バトルスタート……！」

火蓋は今、きつて落とされた。

Requiem?

相手のキャラはオールラウンダー型の”パンドラ”だ。こいつはPPシリーズを通してのラスボスでプロトを世界で初めて使つたので”ザ・ファースト”とも呼ばれている。

基本的にプロトは一つの体に一つしか所持できないのだがパンドラはそのルールを無視し複数のプロトを所持している。

その設定を生かし、格闘ゲームでもその実力はいかんなく發揮され近く長距離全てで戦えるという器用なタイプだ。

対する私のシュナイダーは接近戦が主であるためやはり近づくことが第一の目的だ。

ラウンド開始の合図とともに私は2回戦目のようにパンダッシュシュフィジガで接近をじりじりみる。

「それはさつきも見てたわ、よー！」

姫竜さんはそう言つてダッシュシュフィジガに対しての唯一の反撃行動、投げの体制に入る。

完全にこちらの開幕の行動は読まれていたようだ。

しかし私はその裏を読んでいた。

完全に投げ読みでバックステップで距離をとり、相手の投げを避ける。

相手が投げの硬直で隙だらけのところを弱中強シャイニングソード→エリアルコンボのつなぎで確実なダメージを取れる。

「裏の裏つてやつね。残念でした」

私は完全に読み勝つたこと、そして先制攻撃を『えた』ことにより精神的有利な立場にある。

姫竜さんは私の行動を読んでいたようだが私にその裏を読まれていたことで精神的には追い詰められたはず。

「なるほど、ただ一筋縄ではいかないと……やつこいつことなのね？」

しかしどうやら皇円寺姫竜にはこんな一度の差し合いでの結果では精神的ダメージを与えることができなかつたらしい。

余裕の声色でそう語るとパンドラを起き上がらせ、バックスティップですこし距離があかれる。

距離は中距離程度といったところか、差し合いでにはもう一度仕切りなおしだ。

パンドラはかなりのリーチを持つ技、ダークフォースを放つてきました。

伸びる闇の手がシユナイダーに襲い掛かるが私はそれをガードする。

私がガードをしている間にパンドラはそれをキャンセルダッシュでしこちらに急接近し、足払いをかけてくるがこれもきっちりガードする。

私は足払いの隙を狙おうと弱攻撃を繰り出すがパンドラは足払いの隙をクイックジャンプでキャンセルし飛翔、私は上空をとられてしまう。

私は弱攻撃の一瞬の隙をつかれ、パンドラの空中攻撃がヒットする。

そのままのけぞっている間にパンドラは着地し弱キックからコン

ボをつなげ私は壁際まで吹き飛ばされてしまつ。

さらにそこからダークフォースの追撃が来て、私は闇の手に切り裂かれてしまつ。

なかなか高い威力のコンボだ。多分シユナイダーとそう変わらない火力だと思う。

私は起き上ると少し策を練ることにする。
やはり中距離ではあの伸びる闇の手、ダークフォースがかなりやつかいだ。

かなりのリーチを持つ技だが外したときの隙は大きい。

しかし姫竜さんほどのプレイヤーはぶつ放すことはせず、確実にこちらの動きを読んで使ってくるからなおさらやつかいだ。

ここはダークフォースを誘う形で立ち回つてみることにする。
中距離でとどまつておき、ダークフォースが飛んできたとこりをジャンプで避け一気にラッシュをかけよ。

「……えつー？」

しかしパンドラはいきなりこちらへダッシュしたかと思つとそのままダッシュ攻撃からの基本コンボ、ダークフォースでの締めでかなりのダメージを負つてしまつ。

どうやら私の行動は読まれていたらしい。

「諦めなさい……今のあなたでは私には勝てないわ。あなたの行動は全て筒抜けよ」

「そんな一度の読み合いに勝つたくらいでなにをつー」

私は起き上がり果敢に攻めるも私の動きは完全に見切られており

手痛いカウンターを食らってしまった。

吹っ飛ばされ壁にバウンドし隙だらけのどにパンドラがダッシュ
ユドリカヒトに接近してくる。

そのまま投げを食らい上へ吹っ飛んだところにパンドラのゲージ
消費のビーム系必殺技、プロトリオングフォースが放たれる。
さすがに耐え切ることはできずラウンド一はパンドラに」とられて
しまった。

「どう? まだなにか見せてくれるのかしら?」

「……まだもひーーラウンドがあるよー。」

やつして始まるラウンド2。

まずは様子見といふことで開幕になにか行動をすることはしない。
先ほどから私の行動は全て読まれているのはなぜなのだろうか…
…。

試合前の意味深な言葉もあるし、まさか姫竜さんもなにか選ばれ
しものだつたりするのだろうか。

もしもそうだとしたら確かに勝ち田はない。

こうなつたらいつそのこと、読み合いで勝てないならそれを放棄
するはどうだろうか。

心を無にして、リスクリターンを考えない予想外の攻撃ならば…
通じるのでは?

そう考えた私は相手のダークフォースの射程距離内にも関わらず
シャイニングレインをぶつ放す。

ガードしているところへダッシュし田の前で急ブレーキ、ジャン
プをするがそのまま飛び越えたりなどせずそのまま落ちてきてそし

て投げる。

壁にバウンスをせると基本コンボからエコアルに繋げシャイニングソードで締めダウンせん。

「な、なによその変態みたいな動きはっ！？」

「私の行動は筒抜けなんじゃなかつたの？」

若干の皮肉をこめ言つと私はパンドラに接近しもつ一度投げる。この投げ一連続は初心者がよくやる行動で見切れば簡単に避けられるし隙だらけだ。

でもあえてこの状況でやることで完全に相手の読みを放棄することができると私は考えた。そしてまた近づき近距離にも関わらずシャイニングレインを相手に向けて放つ。

「ぐう、またそんなわけのわからない行動をつ！」

バックステップで冷静に距離をとつていくパンドラに私はダッシュして近づきジャンプで飛び越し背後をとり攻撃すると見せかけてもう一度シャイニングレインを放つ。

「そんなんに何度も同じ手にはつ……水無瀬優紀ーー！」

シャイニングレインを今まさに放とうかといつ時にパンドラが必殺技、プロトトリオンフォースで割り込もうとしてくる。

「残念でしたつ！」

しかし私はそれをあらかじめ読んでおいたのでシャイニングレイ

ンの隙をクイックジャンプでキャンセルし飛んできたビームを避ける。

私の今までの行動に冷静さを欠いた姫竜さんだったがそれがあだとなつたのだ。

そのまま隙だらけのところをダッシュで近づくとまずは基本コンボをつなげ投げで締めて相手を壁バウンスさせる。

そして今まで溜めたゲージをふんだんに活用すべく跳ね返った相手に向けてゲージ技、ヘブンインパクトで上空高く相手を吹っ飛ばす。

落ちてきた相手にシャイニングソードを当てシャイニングレインを降らせる。

光の剣に串刺しにしたパンドラに私はとどめの一撃、光の剣ゲージを消費し相手を切り裂くシャイニングスラッシュのコマンドを入力する。

「これで……とどめッ！――」

画面には必殺技で止めを刺したときに現れるプロトフィッシュの文字が現れる。

これで勝ち数は1対1、次のラウンドが勝敗を決める鍵となる。

「ふふふ……本当にあなたは私を楽しませてくれるのね、水無瀬優紀！」

「私は……負けるわけにはいかないからね

「そう、それでもあなたは私に勝つことは絶対にできないわ

」

「それはね、あなたには一番の弱点……大きなハンデがあるからよ」

「私に……弱点？」

それは一体どういう意味だろ？
それにハンデの意味がわからない。

「そうやつていつまでもしらばつくれて……幸せな世界の住人として一生を過ぐしなさい。」

この人は一体なにを言つているのだろうか？
私はなにもしらばつくれてなどいない。

それに私が幸せな世界の住人だつて？

それが意味するものがなにかもわからないし私はそもそもそんなわけのわからないところの住人ではない。

「おやすみなさい水無瀬優紀……アカシッククレコードの意思のままに」

「なつ……アカシッククレコードー？」

この女、どこまで知つて……。

「一つ教えてあげましょ？……あなたは右腕が動かせるかしら？」

「はあ？そんなの動くに決まって……」

「……否、あなたに右腕は存在しない」

馬鹿馬鹿しい、おもこい加減」……つ？

「 つー?」

な、なんだ……右腕が……動かない！？
感覚がない……！？

これは、これが円寺姫竜の……選ばれし者の魔法……なのか！？

「あんた！私になにをつ……」

「別になにも。それで、右腕は動かせるのかしら？」

「つ.....ー！」

なぜだ？右腕の感覚がまつたくない。

くそ、動け！

あいつの魔法だかなんだかわからぬけど、完全に動かすことが出来ない。

こんなにじやフライナルラウンドを戦つひとなれてできない。
一体……どうすればいい？

Request?

「私があります」

「…………えつ？」

すぐ隣にはなんとIRIAが立っていた。

「IRIAつ…………黙田だよ。今は試合中…………」

「優紀けやん」

「な、なに？」

IRIAが真剣なまなざしで「けやんを見ています。

「私は普段からあなたのお役に立ててこますじょつか？」

「え……そりゃまあ、こつも助かってるナビ…………」

「けやんこの子はなにを言つただれつか？」

「聞きたない、皇円寺姫竜」

「なにかしら？ただのロボット風情が私に向のよつ~」

「優紀けやん…………いえ、私のマスターはハンテなど背負つてこません」

「あははっ！なにを言ひ出すのかとおもえば……水無瀬優紀の”その姿”を見てもそんなことがいえるのかしら？」

「……そのための私です」

「一人で勝手に話が進んでいって。内容もよくわからないがどうせやうやく私は罵倒されていくよ」も聞こえる。

「つまりあなたがハンデの象徴のよつなのよ？ハンデを背負つているからあなたがいるんだじょ？」

「私はマスターのヘルパーです。私はマスターの手となり耳となり感覚となり手となりそして……世界となるのです」

「なるほど……あなたが水無瀬優紀にとっての世界のフィルターの役割をしている、と。でもそれがハンデではないとなぜ言えるのかしぃ？」

「よつやく氣づけたからです」

「何に？」

「愛情に、です」

「愛情？あなたが？水無瀬優紀に？」

「……」

え？え？IRIAはなにを頷いているの？それに愛情って……あ

なたはロボット、だよね？

「これは傑作ね！IRIAつていつたわね？あなた、それは病氣といつのよ？……いえ、”バグ”というのが正しいかしら？」

「……私とマスターはいわば一心異体。心の共鳴体」

「そうね、そもそもそれがあなたの役割のはず

「マスターは私に愛情をくれた」

「偽りの、ね？」

「そうでも構いません。幸せならば、いつそそれで

「やつ……可哀想に……」

「モンナ田で私とマスターを見ルナ！－

「でもおめでとう。あなたが始めてよ…… になつたのは

「……やつみたいですね」

「ある意味人間に近づけたのではないかしら？」

「あなたに言われても嬉しくないです」

「本当に人聞くさいのね、あなた」

「これは一体……なにが起じているのだろうか。

IRIAが会話している。

誰と？

皇円寺姫竜と。

その内容は？

よくわからない。

なぜ？

私が。

なぜ？

私が世界からズレていのから。

”あつち”に帰るにはどうすればいい？

この試合に勝てばいい。

勝つためにはどうする？

「……私を使えばいいと思いますよ」

「IRIA？」

「今から私がマスターの手になります」

「で、でもそれだとコマンドとか動きとかがぱりぱり……」

「大丈夫です。今までも……そしてこれからも」

「…………え？」

妙な言い回しだった。

今の私にはなんのことだかよくわからないがビックやら信用してよ
れやうだ。

こんなに自信満々なIRIAは見たことがない。
きっと……大丈夫。

「それじゃあやひつか……姫竜さん……！」

「あい、もう負けるための相談は終わったのかじらっ！」

「あなたには絶対に負けません、皇円寺姫竜」

「それじゃあいくわよ……」

「「ファイナルラウンド……スタートーーー！」

「うして最後の戦いが始まった。

まずは開幕の行動が肝心だ。

それに私はIRIAとの共同作業である。

上手く連携をとれなければ……その時点で負けだ。

「ねえIRIA、どうするー!？」

「口に出さなくとも大丈夫……私はマスターの動きたによつに動きます」

「……うん、わかった！」

IRIAが一体どうこう理屈でこんなことを言つてゐるのかはわからない。

でもIRIAがいけると、大丈夫といつていい。
だから……絶対大丈夫。

戦況を冷静に見てみよ。

まず姫竜さんのパンドラに対し距離を離すのはよくない。
ここはやはり先手必勝、全速前進！
ダッシュファイジガ仕込みで一気に距離をつめる。

「……っ！」

「……わかりましたか？マスター？」

「うん、なんとなく。IRIAの言つたことがわかった！」

そう、本来ダッシュファイジガ仕込みは複数のボタンを同時押しする上にレバー操作も忙しいテクニックだ。

それを今本能のまま、ただ思つたとおりにできたのだ。IRIA
と、私で。

「小さかしいわね……”自覚”しても思い通りに動かせるなんて。
まあそうでないと戦いがいもないものね！」

またわけのわからないことを言つてゐる。

もう流されない、もう迷わないぞ。

この戦いにだけ集中し、そして勝つ！

接近に成功した私たちは下段、中段とパンドラのガードを崩しにかかる。

しかし相手も冷静にガードをしきるとバックステップで距離をとり、ダークフォースを放つてくる。

それを読んでいた私たちはタイミングをはかりジャンプで避けつつ接近をはかる。

ダークフォースの硬直で隙だらけのパンドラに空中攻撃をしかける。

のけぞらせている間にさらに弱攻撃→強攻撃→シャイニングソードの基本コンボからさらにエリアルコンボを繋げていく。

これで相手の体力は7割程度といったところか。

「くつ……やるじゃない。でも、それで勝つたとおもわないことね！」

パンドラが起き上がると同時に多属性の魔法の弾を飛ばすエレメントフォースを放つてくる。

「IRIA！」

「イエス、マスター！」

田線も呼吸も合わせずに私たちは同調し、飛んできた魔法をガードし可能ならば避けきった。

しかしその間にパンドラは肉体強化の魔法を自分にかけ攻撃や防

御が上がっていた。

「茶番は終わりよ人形達……。今度こそ終わりにしてあげるー。」

パンドラから強化魔法の黒いオーラが漂う。

これで接近戦はほぼ五分と五分。

本格的に決着をつけにきたようだ。

ダッシュで接近してくるパンドラにむけてシャイニングレインを放つ。

急ブレーキしたパンドラはこちらに向かってダークフォースを放つてくる。

私たちは闇の手の攻撃を真正面からくらつてしまい大きくのけぞりてしまつ。

対するパンドラにも命中はしたのだが強化魔法のかかっていたパンドラはすぐに体制を立て直し、こちらへものすごいスピードでダッシュをしてくれる。

ダッシュ攻撃から足払い、それをキャンセルして上へ打ち上げる攻撃を行いダークフォースで私たちを拘束しエリアルコンボで地面に叩きつけられる。

体力はかなり削られてしまい残りは6割弱といったところか。

「さすがに強化されたパンドラの火力は凄いっ……！」

「まだですマスター！ 続けてきますー。」

「 つ！」

パンドラは私たちの起き上がりに攻撃を重ねてくるがIRIAの

忠告によりいち早くそれに気づきなんとかガードすることができた。

一度バックステップを連続で行い距離をとる。

「マスター、敵のゲージが溜まっています！ 次にあのコンボを食らつてしまつと危険です！」

「わかつてゐーその前にあいつをー！」

そうだ、次にあのコンボを食らつてしまえば瀕死状態はおろかそのまま倒されてしまつ可能性がある。

その前になんとかしてアイツに一発攻撃を当てる、一いちばんペースにしなければ。

またも凄まじいスピードでこちらに接近してくるパンドラ。

「じつ……つこいなーー！」

私は苦し紛れにシャイニングソードを放ちその長いリーチで先制攻撃をしかけようとした。

しかしパンドラは急ブレーキをかけカウンターの体制に入つていた。

まずい、と身体が先に反応しクイックジャンプで自分の行動をキャンセルし一度空中へ。

パンドラもクイックジャンプでカウンター行動の隙をキャンセルし空中へ飛ぶ。

「もうつたつー！」

先に空中に飛んでいた私が先に攻撃行動を開始できるので飛んできたパンドラを空対空で攻撃しようとしたその時だった。

「Foolish（愚かな）……」

その私の行動が完璧に読まれていたのか、パンドラは空中でも力
ウンターの行動をとつていた。

私の攻撃は跳ね返され画面端へ吹っ飛ばされる。

さらにバウンドしているところにパンドラがダッシュで接近、基
本コンボにダークフォースをからめエリアルコンボをつなげてくる。
残りHPは既に2割を切るうかとしているところだつた。

「ふう……なんとか生き延びたつ……」

「まだ終わりではないわよ？」

「つー？」

地面上に吊きつけられた私はもつ起き上がりはじめていた。これ以上コンボをつなげられっこないはずだ。

そこにパンドラは私の足元に闇の空間を設置するダークホールを放つてきた。

ジャンプでしか避けられないこの攻撃に起き上がり始めの私は食
らってしまう。

「チェックメイト……ね！」

残り体力はほとんどに近い。

そこへパンドラはビーム状の必殺技、プロトリオンフォースを放
つてくる。

いけない、はやくこのダークホールから抜け出さないと……つー！

「マスター！！」

「えつー？」

レバガチャでダークホールから抜け出そうとする私の手をIRI Aが静止させる。

このままではプロトライオンフォースが命中してしまつ。

「IRIAつ……なに考えてつ……！？」

そして私のシュナイダーは光の粒子の中へ消えていった。

Requiem?

「負けた？」

舞い散る光子の中、倒れるショナイダー。あの体力でプロトライオングフォースを食らってしまつてはもう……。

「マスター」

「IRIA……」

「まだ負けたわけではありません」

「勝手なことを！」

「よく見てください」

「えつ？」

ショナイダーが立ち上がった？よく見ると体力がミリ残りしていた。

「IRIA……どういって？」

「マスター、パンドラの技データホールは始動補正88.2%、コンボ継続時の補正34%とコンボに組むと総合ダメージ係数がかなり落ちてしまう技です。あの体力ならば無理に脱出して削りダメージを食らってしまうよりそのまま食らったほうが生存確率が高いと当機は計算しました」

「なるほど……それでさつきの私のレバガチャを止めたんだ」

さすがIRIA、絶体絶命の状況でも落ち着いて戦況を見ている。といつかパンドラの技のダメージ補正なんてよく知つてたねIRIA。

「生意氣ね、でもその体力でなにができるとこうのかしら?」

「なんでもやってみせるわ」

……いける。

相手の残り体力は5割強。

さつきのプロトライオングフォースで私のゲージはMAXだ。防御力の高いギューカクにだって半分以上のダメージを与えるあれなら。

私の新しいコンボ 真・姫スペシャルなら倒しきれるー。

「IRIA！新しいコンボだけど、できるー！」

「……イエス、マスター！」

「いい返事だつー！」

パンドラは確実にこちらに止めをさそぐと魔法弾を放つてくる。IRIAの絶妙なムーブコントロールにより最小限の動きで魔法弾を避けていく。

真・姫スペシャルの始動技、シャイニングソード……あれさえ当てることができれば！

「生意氣な……」の人物共が！

来た！

中距離、この場面でダークフォースを放ってきた。

「避けろIRIA——っ！」

ただ、叫ぶ。そうしてくれると信じて。
刹那、スローモーションになる私の視界。
そして静寂、まるで心臓の音まで聞こえるような静寂が空間を支配する。

IRIAの表情はまだ冷静だった。
私のシユナイダーは弧を描くように跳躍、隙だらけのパンダラの目の前に着地する。

そしてその小さな口から放たれた言葉はそつとうに頼もしいものだった。

「Mission complete・後は任せます、マスター！」

「しかと受け取った！そなたの忠義と……魂を一つ……」

……なんだ？この、不思議な感覚……。

私はなにを口走っているのだろうか。

姫、そして付き人……私がはるか昔、もつともつと昔に信頼していた……そうか。

思い出したぞ！もう一つ！

「私は……私は姫だあああ……」

シャイニングソードを放つ。

吹っ飛ばされた相手は壁にぶつかりバウンドする。
そしてパンドラを地上を走る衝撃波、グランドソードによりて捨
う。

たとえ右腕が動かなくとも、コマンドなんて氣合でなんとかでき
るものだ。

「ダッシュだ！ I R I A！」

「イエスマスター！」

グランドソードと共にダッシュで接近し、浮いた相手にそのまま工
リアルコンボを加える。

着地、そして同時にシャイニングソードでコンボを締める。
一度光の剣を直し今度は拳と蹴りのみでコンボをつなげていく。
そしてここでゲージを使用し相手を上空へ打ち上げる技、ヘブン
インパクトを入力する。

「そして……ここで最速入力チャージ！」

先ほどシャイニングソードなどで消費した光の剣ゲージをディス
チャージによつて回復する。

チャージを終え、ちょうど落卜してきた相手を掴み、画面端へと
投げる。

壁にたたきつけた相手に向けシャイニングレインで追撃。

「これで終わりだ！ シャイニング・ソード・ブレイカアアアアーー

――――

6332146P、素早く必殺技、シャイニングソードブレイカーの入力をする。

画面が暗転し巨大な光の剣が生成される。

そして……パンドラは光の剣によって切り裂かれ消滅していった。

「か……勝つた……？」

私は勝つたのか？

「や、やつたよ！R.I.A……私とうとう……」

「マ、マスター……」

I.R.I.Aが、青ざめたような表情をしている。
その震えた視線の先にあったのは……。

「パンドラーー？」

シユナイダーの後ろに黒い空間と共に転移してきたのは倒したはずのパンドラー。

あれは確かパンドラーのワープ技、プロトディスクションだ。
でも倒したはずなのに……なぜ！？

「くつくつく……それがあなたの新しい技かしら？水無瀬優紀？」

「な、なんで……」

「真・姫スペシャルですって？ 笑わせないで、私はこの間ゲームセンターで見たわ……あなたのそのコンボレシピは繋がってなどいないのよ」

「そんな……私は確かに……」

「思い込みの激しい娘ね……そんなことでは眞実にたどり着くことなんてできない。5割強を減らしきるコンボなんて夢物語だったのよ」

私はレバーを動かすもショナイダーはシャイニングソードプレイカーを放つた硬直により動くことが出来ない。

「さよなら、人形さん……」

K・O!

ああ……また私は……闇の中。
やつと掘んだと思った眞実の扉が……また遠ざかっていく。

「水無瀬優紀」

その声に顔を上げると、皇円寺姫竜が「ひかりを見下ろしていた。

「勝負は……まだ終わっていないわ」

「なに……が？」

「私が試合前にこいつたこと、よく思い出したどり着いてみせない
い……真実に」

それ以上はなすことはない、とでも言ひ風に聖円寺姫竜は背中を
向けた。

「マスター……」

「帰るよ……」RHA

「…………はー」

やつだ、姫竜さんはなにか気になることをこいつていた。

「サブコリナル……」

それはなんだつたか、聞いたことはあるのだが意味は忘れた。
家に帰つたときに調べてみるとよ。

姫竜さんが何者なのか、何を知つているのか、今回の事件についてどれだけ関わっているのかこれでわかるかもしれない。

「マスター……すみませんでした……私がふがいないせいです

「ハハん……違つてんだよRHA、あなたは悪くない」

歯をくちしばり、あふれ出しそうな感情を我慢する。

「でも……でもね……」

IRIAに顔を見せないといひがたを向く。こんな顔を見られるのは……嫌だ。

「へへへこ……へへへこなあつ……凄くへへせこよIRIA……」

「……帰りまじょつマスター。今日はマスターの好きなものなんだつて作つてあげますよ」

IRIAが私を抱きしめてくれたおかげで泣き顔を見られずにするんだ。

もしかしたらIRIAはもう気づいていたのかもしけないけど、でもIRIAはやっぱり優しかった。

「あつがとつ……IRIA」

Requiem?

精神状態も良くなく、ずっと外にいるのも気分が悪くなってきたので早々に家に帰ってきた。

気になつたワードを調べる為に私は部屋のベッドにダイブして寝そべる形になり、携帯で検索をかける。

「サブリミナル……」

この言葉が何を意味するのか、私は知りたい。
そしてどうやらこの言葉が事件の鍵となるらしいことを姫竜さんが言つていた。

”サブリミナル”について検索をかけると検索結果の一一番上に詳しい記事が載つていた。

まったくもつて文明の利器とやらは便利なものだ。一昔前までは考えられなかつたくらいなのだから。

内容を大雑把にまとめると”意識と潜在意識の境界領域より下に刺激を与える事で表れる”とされており効果で閾値以下の刺激によって生体に向らかの影響を及ぼすことができる”ものらしい。

たとえるならそう、例えばの話だけど。

テレビに放送されているCMの中とかにある文字を不定期に一瞬だけ、認知できいくらいのコマ割で表示したとする。

するとそれを視聴していた人々は無意識下にその文字を覚えていふといふ。

「なるほど……サブリミナル……ね」

もしかするとこの原理で人々を操つて・・?
可能性としてはまあ、なくはない話ではあった。
しかしこれではあまりに説明不十分に証拠不十分。まつたくもつ
て論理的ではない。

「うーん……八方塞……」

と、嘆きつつも携帯の操作を続けていると氣になるものを発見し
た。

「精神崩壊画像」

なにやらこれを見ると精神が崩壊すると噂されていた一昔前の都
市伝説らしい。(この手のネタの発祥はおそらく某大型掲示板だろ
う)

しかしこれがサブリミナルとなんの関係があるとこ'うのか。

検索ワード”サブリミナル”で検索してあらわれたのだからなに
かしらの関連があるはず。

そう考えた私は色々と記事をたどつていいくことにする。
しばらくたどつていぐ内にたどり着いたのは一つのスレッドだっ
た。

「精神崩壊画像を使って色々するスレ」

なんとも直球的なスレタイである。

ちなみにこの精神崩壊画像、さつき見たけど少し不気味なだけのゾンビっぽい顔が映つていいだけのホラー系画像だった。

どうやら少々不気味で初見だと驚いてしまうであろうこの画像を精神崩壊画像と銘打つて恐怖感を煽ろうとしたのだろう。

そして広まつたこの画像をつかつていたらをしてしまおうというのがこのスレの目的らしい。

今はこのネタは完全に使い古されているらしいが当時は結構有名かつにぎやかにされていたものだつたみたいだ。

しかし、一見するとなんでもないよつなこのスレの中にとんでもない魔物は潜んでいた。

「こ」の画像をネット上でサブリミナル的に配布して刷り込みを行つてみるのはどうか？

刷り込み……つまり無意識下の頭の中にその画像を記憶させるということか。

でもそんなことしてなにななるというのだろうか。

まあこの手の住人たちは完全に愉快犯だし、楽しければそれでいいのだろう。

そしてこここの住人たちは配布された”一瞬だけ精神崩壊画像が表示される”フラッシュをいろんなところに貼り付けはじめたらしい。それだけならただの悪戯でよかつたのだがここで大事件が発生する。

某テレビ基地局にて働く一人の人間が色々なCMにこのフラッシュ

ユをばら撒いたのだ。

もちろんその人物は逮捕されCMは全て修正されたこととなつた。

この騒ぎの後、あるテレビ番組にて今回の事件についてタレントが科学省の人間達を交えて考察をするというものを放送していた。ここで科学省側の人間の一人が「流されたサブリミナルにはこう書いてあつた」と、その文字の書かれたボードを掲げた。

「Akashic Records」

つー?

どういうことだ?

昔の冗談のような騒動で使われた文字……それはアカシックレコードと書かれていたらしい。

誰が……誰かが、今回の事件をずっと前から仕組んでいた?

CMにフラッシュをばら撒いた男か?いや、違う。

その男はもう逮捕されている。

そして私は推理する。

昔のフラッシュ騒動はただの冗談ではなかつた。

そのフラッシュにより人々は深層心理、脳の奥底で催眠状態になる。

そして……現在。

ある”トリガー（引き金）”を引くことにより人々は……操られることとなる。

その引き金はおそらくモバに設置されているあるいはサブリミナル効果のある画像もしくはフラッシュデータ。

皆ただそれにしたがい空へと還つていぐ　死に集まるのだ。

まるで夜会のよう^{サバト}。

「サバトの出席者は山羊の背中に乗つて飛来する。彼らは聖なる十字架を踏みつけにし、悪魔の名のもとに洗礼を受け、服を脱ぎ捨てて悪魔の背中に接吻する。そして背中を合わせる毎に三回して円舞を踊る。」

これはイタリア、ミラノの同祭、フランチエスコ・グアツツオ著の書物に記されているものだ。

皆狂い、集まり、そして死ぬ。そこに自我はなくただ狂信者たちは操られ死んでいく。

……少し話がそれたか。

今までのことまとめとみよ。

昔 サブリミナル効果で人々に”アカシックコード”という文字を記憶させる。

現在 モモバ内になにかしらのサブリミナル効果のあるものを用意する。その内容は……。

“アカシックコード”の言葉に覚えのある者達よ。自殺せよ

いけるか……」の推理？

そもそもサブリミナルとはそんな簡単に、明確な命令を『えられるものなのかな？

とにかくこのことを警察に連絡しないといけない。

思い立つたが吉口、善は急げだ。

私はベッドから跳ね起きると部屋から飛び出し玄関へ。

「マスター？こんな時間にどこへ？」

「わかつたのー」の事件の真相が！」

ただそれだけ伝えると私は家を出で、一番近くにある交番へと走つていった。

「話はそれだけかい？」

全ての事情を警官の人には話した私だがその反応はひどく冷たいものであった。

「とても重要なことだと思いますが」

「あのね、今は君の探偵『この相手をしている場合じゃないんだよねえ……』

人の話を聞かない警官だ。口調こそやんわりとしているがその日は”とつとと帰れ”の意思表示をしているのが感じ取れる。

「……やつですか、ならもういいです」

「こじは駄目だ。もっと私の話を聞いてくれるといろへ行こ。」
そう思つた私は少し遠いが最寄の駅から2駅ほど離れた町の交番を手掻し、歩きそして走つていった。

……疲れる。

「……やつこいつわけなので、この推理を捜査につかってください」

「今それどこるじやないんだよねえ……遊ぶなりそのへんで遊んでくれないかな」

まだだ。

「この警官の人もさつきの人と同じような扱いを私にする。
まるで小さな子どもの我がままを鬱陶しそうに、振り払つような。」

「そんな……もう少し話を」

「いいから帰りなさい。……まったく、このあんたは保護者だろ?
？ちゃんと”鈴付き”の面倒見てくれないとこつちも困るんだよ」

ため息をつきながら相手はそんなことを言ひ。一体誰にたいしての言葉なのかと振り向ければそこはエリエイアが立つていた。

「エリエイア……？」

「すいません。今後はこのよつなじどがなによ、しつかわねおあめすので」

「ああ、それならいいんだよ……気をつけて帰つてください」

「はい、ありがとうございました」

「え……あつ……ちよつと……」

IRIAは勝手に話を進めるとき番から遠ざけるように私の手をひいていった。

また……私の知らない場所で、知らないなかがおきているのであらうか？

あの警官の人、さうりつと意味不明なこと言つし……それに”鈴付き”ってなんのことだかわからない。

まだ……またこの感覚。

私だけが世界でただ一人、隠し事をされているよつな。みんながそんな私を見て嘲笑しているよつな。

世界が信じられなくなるよつな、そんな気持ち。

自然と唇はふるえ歯は上下しカチカチと情けない音を出すのはきっと恐怖心によるものだと、私はそう思つ。

「マスター」

「な、なに……？」

「家へ帰りましょつか」

そんなIRIAの暖かな声を聞くだけで、いつもIRIAの声

を聞くだけで、IRIAが私のことを”わたし”だと思ってくれて
いるだけで私は安心する。

「この世の中は全て私の敵……敵なのだ。

きっとみんな洗脳されているに違いない。私もその影響を受け、
皆の会話が意味不明に聞こえるのだ。

ただ一人残ったロボットのIRIA……あなただけは私の味方だ
よね……？

私は私よりずっと小さな、それでいて誰よりも包容力のあるIR
IAの身体の中で……その笑顔の中に眠つてしまふのだった。
それが……多分最後のIRIAの微笑みだったかもしれないとい
うのに。

Requiem?

声が聞こえる。

「……ですから、マスターが……」

IRIAの声だ。ここはまだソーラー

「しかし……それでは……」

もう一人、知らない人の声。誰だろう。
薄つすらと開けることの出来た視界で確認できたのは見慣れた天井。

つまりここは私の自室のベッドということだ。
むくりと、少し重い身体を起き上がらせる。

「あ……マスター！」

それに気づいたIRIAがこちらへ歩み寄る。

「気がつかれましたか……よかったです」

そうか、私は外出中に眠つてしまつて……IRIAに運ばれたの
だろうか。

「う、うん……といひである人は？」

私はすぐそばにいる白衣の男の人を指差しIRIAに尋ねる。

「あの人はお医者様ですよマスター。ドランカーについて調べているそうです」

……医者？

なぜIRIAは医者を？私のどこかが悪いことこのものか？

「私はどいつも悪くない」

「違うんですマスター。もうこれで……マスターはesxradcf
t v y o o o n n」

「え？ なんて？」

「……………を ある」とができるんです」

馬鹿にしているのか。

IRIAの言葉はノイズとなつて、重要な部分を聞き取ることが出来ない。

「…………私になにをする気？」

仕方ないのでその医者とやらに尋ねてみることにした。

「まずはこの薬を注射してみよう。どの程度症状が進んでいるのか知りたい」

そういうて取り出したのはあからさまに怪しい注射器。
まさか……世界の秘密に気づいたただ一人の人間 つまり私を
毒殺しようとしてもこうのか？

「嫌だつ！私はまだつ…………！」

まだ……死にたくない。

「マスター、もひやめてください」マスターのそんな姿……見てられないです……」

「またわけのわからなことじをつけ！」

「早く治療を受けて……”「わらじ側”へ戻つてきてください”……」

「わらじ側？」

いまIRIAは”「わらじ側”といつたか？”

なんだIRIA。

まさか裏切つたのか。

お前はアカシックレコードを狂わせる悪の組織の一員になつてしまつたのか。

「嫌だ！私は行かない！絶対に行かない！」

「一緒に行くと、約束したではありませんか！」

はあ？こいつはなにを言つてこいるのだ？

そんな約束……そんな約束……。

「そんな約束……した覚えなんてない！」

「…………そんな…………」

IRIA、あつとお前は洗脳されているんだ。

アクノソシキーノットラレタンダ。

「……どうやら少し興奮状態が強いようですね。IRIA、押えて」「……はい、わかりました」

どうやら今度は力任せに私を止めるつもりらしい。
IRIAが私の左腕を掴む。
仮にもロボットが相手の上に、右腕の動かない私にはもうびすることもできなかつた。

「……あなたのためなのです、マスター。どうかわかつてください」

「最低……やつぱりあんたも敵だつたのね」

ただ私は虚勢をはつてIRIAを睨みつける。皮肉の言葉も込みで。

「マスター……」

「なぜそんな悲しそうな顔をするー？」の外道……そんなことで私が大人しくするとでも……」

「少し、大人しくしていってくれ」

医者を名乗る男は注射器の準備を整えるとゆつくりと私の左腕に近づける。

IRIAにがつちりと押さえつけられ、男にはゴムバンドで腕を縛り付けられ、私は迫り来る注射器を前にして氣を失つた。
最後に叫べたのかどうかはわからなかつた。

田覚め。

少し頭のぼーっとする田覚めだ。

違和感を感じる左腕には包帯が巻かれている。

どうやらわざの出来事は夢ではなかつたようだ。注射の跡みた
いのも薄つすら確認できる。

なんだかいつもより頭がぼーっとする。

思考が上手くいかない。

あいつらになにか変なものでも注射されたのだろうか、これが洗
脳される一歩前くらいの症状なのかもしない。

とにかく現実感とでもいえばいいのか そんなものがかけてい
る気がかる。

「やうだ…… モバにアクセスしないこと」

ほんやつした頭の中で思い浮かんだことはまずそれだつた。

これが習慣病といつやつなのか、ただうわごとのよううつぶ
やくと私はベッドのすぐそばに置いてあつた携帯を開くとモバに
アクセスした。

＜＼とばんは、姫＞

ログインと同時に表示されるチャットメッセージはいつ記され
ている。

本当にこれでもこるんだな、ナナは。

「うそ、冗談ばんば」

「面倒なことになりましたね」

「なにが？」

「H.R.I.Aの」とですよ

「H.R.I.Aを知ってるんだ？」

「ええ、私とあなたの”敵”ですから」

「やつぱり敵なんだ」

「現在彼女は思考コントロールを敵に奪われています」

「どうすれば元に戻るかな？」

「やつですねえ……一つだけ方法があります」

「一つだけ……なに、その方法って？」

“破壊”することですよ

「そんなことしたら可哀想だよ」

「すぐ作り直せばいいんです。」レミーは絶対に裏切らないよつて

「ああ、なるほど……確かにそりだね」

「でしょ? アカシックレコードだつてまさか相棒のIRIAを壊すなんてこと予想していなはずです」

「わかった。じゃあできるかどうかわからないけど、やつてみるよ」

私は一体いまどんなメッセージをうけとりどんな返事をしているのかわからない。

私は……今なにをしているんだらうか。
そして即レスのナナにしては珍しい遅レス。どうしたんだらうか。

「やめろー! こいつの言ひ方のことを聞くくなー」

……はい?

ナナから妙なメッセージが届いた。

こいつってだれ?

よくわからないがくなんのこと? と返事しておいた。

ただ、それから後は彼女から返事が来ることはなかった。

「やめろ、こいつの言ひ方のことを聞くくな……か」

よくわからないがナナの言つてこむ「とせき」と同じで覚えておくことにする。

IJの言葉がいつ役にたつかはわからないけれど。

「わい……」

それではナナの言つとおり、今はIRIAの破壊が優先事項だ。きっとIRIAはIJの家で油断しているはずだ。
不意をつけばいくらIRIAだつてひとたまりもないはずだ。
しかし素手では厳しいと感じた私はなにか凶器になつてしまふものを探すため音も立らずに部屋を出るのだつた。

Requiem?

そしてたどり着いたのは私の部屋の隣の部屋　通称”開かずの間”だ。

ずっと昔からこの部屋には入ってはならないとIRIAに言われていた。

私自身もなぜだか入りたくなかつたので今まで入つていなかつた。

……私は確信していた。

ロボットであるIRIAを破壊する方法はこの中にあるのだと。今までひた隠しにされてきたのはそういう理由だからと私は推測した。

一度息を整え心を落ち着かせると私は開かずの間のドアノブに手をかける。

ガチャリ。

労せずともそのドアは開きだした。

この部屋に入るのは初めてだ。一体中はどうなつてこるのであるか……？

まず目に入ったのはシンプルな学習机。

教科書やノートの類はなく綺麗に整理された（といつよりはなにもない空っぽな）状態だ。

中に入つてみると空気は別段汚いわけではなかつた。

埃もなくじつやうに日常的に掃除が行き届いているようだつた。

「……誰が掃除しているんだろう?」

いや、きまつている。H.R.I.Aだ。

自分の独り言に對して自分でシッピミを入れつつ大きなクローゼットを開けてみる。

そこにはじく普通の人間が使用するような色々な荷物がしまってあつた。

たくさん機械のコードやゲーム機にスキー板、それにキャンプ用品なんでもものもあつた。

「なんて生活感ただようクローゼット……誰か住んでいたのかな?」

しかし「こ」は私の家だ。

ここまで私の記憶に「こ」に誰かが住んでいたなどと「こ」のものはない。

やがて、生まれてからずっと。

「…………すっ」と?

私は生まれてからのこと思い出そうとした。
しかしながら?真っ白で……なにもイメージがない。
さつきから考えが上手くまとまらない。

夢現な頭の中と私の身体。どうやらもつもたないらしい。
洗脳される前にH.R.I.Aを破壊してしまわないと……!
焦つてクローゼットの中を探索しているとガコンッと大きな音がした。

足元を見ると野球に使われる金属のバットがあった。バットや「こ」

れが倒れたらしい。

しかし……なぜバット？

家の人に野球をする人なんていただろ？

というか……家人って誰が居たっけ？

私と……IRIAと……？

「……馬鹿馬鹿しい」

考えるだけ無駄だ。この世界ではもはや常識や……私の意志は通用しない。

私はバットを手に取るとふんっと一振り。

……いける。

“こいつは”現世の剣、リア・ドリームキャリバー”と付合いつつ。これがあればIRIAを破壊することができます。

「マスター？ 一体何の音ですか？」

IRIAの声がする。

どうやら先ほどのバットを倒した音を聞きつけてやつてへるひじい。

パタパタと小走りでこちらへやつてへる音が聞こえる。

あいつを殺るなら……今しかない！

私はドアの脇に立ち息を潜める。

「リリは…… の部屋……。マスターはリリ……？」

ドアの向こうからくもつた音が聞こえる。

カノン... カバヤヒコ

「マスター……？」

ドアが開く…………… まだつ！

「IRIAああああああああ――――――」

ガンツ。

やつた！

私の振るつた現世の剣はIRIAの頭を直撃。その頭からは血が

なぜ……ロボットであるヒトから血が出るのだ……？

「マスター」

「IRIA なんで 血が

「…………だから…………」

「……え？」

「私はお姉ちゃんの妹だから」

妹……？

お姉ちゃんって……私が？

「待つてIRIA！私がなんだって！？」

倒れているIRIAを揺さぶる。

「……マスター……」

「なに？」

「たどり着けなかつたんですね……」IRIA「に

「IRIA、教えてよ。一体なにがどうなつているの？」

「マスター……右腕を『覗くださ』」

「右腕？」

私の右腕は確か……皇円寺姫竜の不思議な力で動けなくされて……

ふと自らの右腕を見てみる……いや、”見れなかつた”。

無いのだ。

私の身体に”右腕が付いていない”のだ。

「はははっ……ねえ、IRIA」

「……はい」

「私のこれ、エーハウスが作ったのかなあ？」

「ずっと……前から」

「前？」

「いつもさよ

「嘘だ、私は」

「嘘はあなたです、マスター」

「……なにが」

「あなたはあなたの世界に対して嘘をつき続けている」

「……」

「……思ふ過たる節があるのでしょ？」

「……ビルヒルヒル」

「あなたはずっと前から、そんな姿で……それを受け入れられない
あなたはそれを認めない形で心のバランスをとらうとしていた」

「していた？」

「……、していた。でも今あなたはそれに気づいた。それは辛い現
実と向き合つ」とができたということです」

「あの……血は？」

「ロボットなんて」

「…………？」

「ロボットなんてこの現代社会にいないですよ」

…………え？

いや…………でも、H.R.I.A.はロボットじやゅう…………。

「なぜそんなことを？あなたはロボットじゅう違ひの…………？」

「2012年7月24日…………そんな現在にロボットなんていないで
すよ」

「つまり…………あなたはロボットじゅうない…………と？」

「だから…………言つたではなあああああですか」

言葉を切られぬハイズ。

私を真実から遠ざけるように、それを隠すよつて。

「ねえ…………H.R.I.A.」

「…………せー」

「あなたは……なに?」

「ずっと……ずっとあなたを守るために存在するのですよ」

「私を裏切ったんじゃ……」

「そんなはずないではありますか」

「闇の組織は……」

「そんなものあつません」

「洗脳は……」

「ありません」

「事件は……」

「ありません」

「私の……腕は……」

「ありますん」

「じゃあ……私は何をしたの?」

「なにも起こらなかつた日常で、ある日突然たつた一人の妹を金属バットで殺してしまつたんですよ」

「IRIA……」

「なんでしょう？」

「私はどうしたらいい……？」

私のそんな問いに、そうですね……と一呼吸終えてからIRIAは話し始めた。

「問題です。バスに5人のお客様が乗っています。あるバス亭で2人降りて3人乗り、次のバス亭で3人降りて1人乗りました。さて、現在バスには何人の人が乗っているでしょう？」

唐突な問題だった。

なにか意味があるんだろうと思ったので真剣に考えることにする。最初に5人……次にプラス1で……次にマイナス2……。

「えっと……4人？」

「違います。5人ですよ」

「へつ？ そんなわけ……あ」

「そうです。バスの運転手さんを数え忘れていましたね」

「意地悪問題ね」

「そうかもしません。では次の問題です」

「一体これに何の意味があるというのか。

よくわからないけど負けたままじゃ悔しいので次の問題も答える

「」と云ふ。

「もうすぐ世界は”夏休み”を向かえ、そして崩壊していきます。世界には何十億人という人口がありますが”あなた”を除いて全て消えてしまいます」

……勘の悪い私でもわかる。

これは”これから起こるであろう”ことを言つてゐるのだ。

「さて、”あなた”は一人ぼっちでしょうか?」

……決まつてゐる。

「一人ぼっちだよ。これまで……そしてこれからも

「違います。正解は一人ですよ」

「なぜ?私のほかに誰がいるというの?」

「私だよ、お姉ちゃん」

視界が歪む。

IRIAが私をお姉ちゃんと呼ぶ。

それに違和感を感じる。

意識の端でそれは違うと……そう訴えかけてくる。

「ずっと御側にいると……約束したではありませんか」

「 I R I A

そうだ、私は世界にどれだけ裏切られようと IRIAだけは信じるといったではないか。

そんな IRIA に……私はなんてことを……。

Requiem?

「聞いて……ください、マスター」

ジリジリと、ノイズ交じりの声で話すIRIA。

「……なに?」

震えた声で、私は問う。
これからIRIAが話そうとしていることは……私の日常を破壊
してしまうものではないかと。
ただ……そんな気がする。

「あなたの世界はもうすぐ崩壊してしまつ。そして次に目が覚めた
時、真の世界はあなたを裏切るでしょう。あなたは一人になる。で
ももう逃げることは許されない」

IRIAが告げた言葉……それは確かに私が思い描いていたこと
と同じだった。

「一人について……IRIAは?」

「どうでしょ?……私は”あなたが想像で生み出した存在に過ぎな
い”ので真の世界にどういう形で存在しているかわかりません。こ
の言葉だってあなたが喋らせているようなものですよ」

「私が尋ねて私が答える……自問自答?」

「そういうことになりますね。ただこうしてかなり特異な設定でこ

「に存在しているということは眞の世界で今の私のモチーフになっている人物くらいはいるかもしませんよ」

「IRIA自体はいないの?」

「わかりません……今のこの世界と眞の世界でどれほど違ひがあるのかが把握できませんので」

「……やつ」

IRIAは言った。

次に目覚めるときは私は一人かもしれない。世界は私を裏切る。

逃げることは許されないと。IRIAは……いないかもしれない。

そんな世界で私はどうやって生きていけばいいのだやつ。

「生きたることは楽なことばかりではないのです。これからは辛いことを経験しなければなりません。……夢は、いつか覚めるのです。」

IRIAは真剣なまなざしで言った。

今まで……私は樂をしてきたところといふ。

「それも私の想像した言葉?」

「いえ、”私”的言葉です。意思くらいはありますよ、私でも」

つまり……この世界は私の思い描いたようにしか動かない、というわけではないらしい。

「H.R.I.Aは言つたね、夢はいつか覚めるつて。これは夢……なの？」

「ええ、似たようなものです。……ただ、私は夢の中で……」の数日で感じたことがあります」

感じたこと？

私の想像によつて作られたというH.R.I.Aの……自我。一体何を感じたというのだらう？

「……楽しかつた。そして……幸せでした。ずっとこの日常が続けばいいと思つていました」

「ずっと……ここへ居ちゃ いけないの？」

H.R.I.Aだつてこの日常が続けば良いと思つていたのなら、ずっとここに居ればいいじゃないか。

真の世界だかなんだか知らないにけど、辛い思いなどしなくてはいいのでは？

「……戻つてきてほしいと願う人がいたから。その呼びかけがあつたから……今こづして虚偽と真実の境界線上に存在しているのです」

「真の世界には私に戻つてきてほしいという人がいるつてこと？」

「はい、私はずっとその人の思いを聞いてきました。そしてその思いを叶えてあげたくなつたのです。それが私の消滅を意味するとし

「でも

「私が元に戻れば」の世界やあなたは消える……そんなのでいいの？」

「はい……私はずっと……境界線上からあなたを見守りますから」

「嫌だ……離れたくない……」

「大丈夫……間接的にですが私はあなたにメッセージを伝える手段があります。それで連絡しますから……一度と会話できないうけではないのです」

「間接的につて……？」

「田舎で使うものから私の意思を伝えるのです。そうですね……なりこの言葉をよく覚えてください」

「ナナ」

「この言葉をよく覚えて、向こう側でのこの言葉を聞いたらそれは私は。私からのメッセージなのでちやんと聞いてくださいね？」

ナナ……ナナ……。
ナナの言葉をきちんと聞く……ナナの言葉をちやんと聞く……。
何度も何度も心の中で感じて、心に刻み付ける。

「その言葉を決して忘れないで下れ。そして……私のことも

「忘れない……絶対忘れたりなんかしない！百年だって千年経つたつて、別の世界にいったつて忘れないよ」

「忘れない……忘れたりなんかするものか。

どんなことがあつたって……忘れたりなんか。

「では、これからあなたにかかるつているフィルターを外します」

「フィルター？」

「ええ、厳密にはあなたがかけた”フィルター”ですが。これが嘘の世界に見えてしまう原因なのです」

「でも、IRIAを見る」とのできる唯一の方法……」

「やつとも言いますね。でもこれは本来必要のないものです。あなたはこれから”本来の日常”に戻ります」

「本来の日常……今ここにあるものではなく、眞実の私の日常。それは果たして取り戻すべきものなのだろうか？」

「決して……絶望しないでください。私は見守り、少しのメッセージを送る」としかできませんが……ずっと御側にいますから」

「IRIA……私……怖い」

「あなたなら大丈夫……やつと乗り越えられる……」

IRIAは私の首に腕を回すと私を引き寄せ抱きしめた。

「あなたと過ごした数日間はとても有意義なものでした……”無から生まれた私でさえ涙を流すことができたのですから」

IRIAの言葉に私ははつとして、その顔を見てみると口ボットであるIRIAの目から涙がこぼれだしていた。

「私のこと……忘れないでください……」

「IRIAっ！ 待ってIRIA……」

「 むかつくな

プリンシ

「あれ…… ここは？」

私は眠っていたのだろうか、頭がぼんやりしていてここがどこなのかわからない。

自分の身体を見てみる。

いつもどおり、あの時事故で失くした右腕が無いのも、車椅子に乗せられているのも同じ。

そして……身体的障害を持つものの証である赤い鈴が首についているのもいつもどおり。

なぜ精神障害を表す青い鈴も一緒についているのかは謎だが、なぜだろう？

これら全ては私そのもののはずなのになぜか違和感がある。

「お姉ちゃん、起きた？」

車椅子を押している人物が私に話しかけている。
振り向き見上げその顔を見ると……。

「IRIA?……じゃない、よね?」

車椅子はゆっくりと進んでいく。

きっと、いつも通り学校へと進んでいく。

私のそばを吹き抜けるのは風と記憶。

何かを失くした気がする。

それは特別だったはずの何かで、ずっと傍にあつたはずの何かで。この心にある空虚感は私の胸の奥底をきゅっと締め付ける。

忘れてしまったのは日常、取り戻したものは日常。

こんな私は大馬鹿者なのだろうか。

ぽつかり空いた心の中でなにか小さなものを拾い上げた。

それはたった一つの言葉だった。

言葉。

「ナナ」

歩きなれたこの道はいつもの道じゃなかつた。

私は拾い上げた小さな言葉を忘れないようついでまた一度眠ることにした。

「さよなら、私の愛した日々よ

In Paradisum deducant te Ange
li;

天使があなたを楽園へと導きますよ。ついに。

in tuo adventu suscipiant te
martyres

樂園についたあなたを、殉教者たちが出迎え、

et perducant te in civitatem
sanctam Jerusalem.

聖なる都エルサレムへと導きますよ。ついに。

Chorus Angelorum te suscipiat,

天使たちの合唱があなたを出迎え、

et cum Lazaro quondam paupere,

かつては貧しかったラザロとともに、

aternam habeas requiem.

永遠の安息を得られますよ。ついに。

「これは境界線上に立つ君に送る鎮魂歌だ。いつか、眞実に辿り着けますように……と」

僕はG線上の少女にそう告げると”電源”を切った。
いつもして皆、糸が切れたように動かなくなつたのだ。

。

Requiem?（後書き）

これで第一章”片翼の少女編”は終了です。

次回からは数々の謎の解明編、この世界の一連の出来事を別の人物の視点から見た物語が始まります。

では次は第一章”G線上の人形編”で逢いましょう。

「……だから、わかつたかい愛？ もう優は……」
セピア色に色あせた私の記憶。

それは私の心の始まり。

それから前の記憶は、あまりない。

「おまたせ、”IRIA”」

そんな声に振り向けば立っているのは長い入院生活から帰ってきた私のお姉ちゃん。

しかし私はその”IRIA”ではない。

私は水無瀬愛璃。みなせあいり正真正銘この水無瀬優紀の妹だ。

なぜお姉ちゃんが私をこう呼ぶようになったのか……まずはその話をしようと思つ。

（第二章）G線上の人形（IRIA）

これは今から2年前……お姉ちゃんが高校1年生のこと。
学校行事の遠足の途中に電車の事故に見舞われてしまつた。
その結果、お姉ちゃんは右腕を失い心も強く病んでしまつた。
この国では障害者は、ぱっと見てわかるようにそれを表す鈴を身

体に身に着けることが義務となつていて。

身体障害を持つ者は赤の紐の鈴を、精神障害を持つ者は青の紐の鈴を着けなければならない。

お姉ちゃんはこの一つの鈴を付けることを余儀なくせられてしまった。つまり生活にハンデを背負ってしまったのだ。

鈴一つ持ちの人は一人ではまともに生活をすることができないので”ヘルパー”と呼ばれる生活をサポートする人物が付いてやらなければいけない。

そこで私は通っている学校を辞め、お姉ちゃんのヘルパーとなることにしたのだ。

幸い、ヘルパーになれば国から多少の支援も出るので稼ぎ元があるちゃんしかいない我が家にとっては一石二鳥のメリットがあった。お兄ちゃん 水無瀬和真は両親がいない私たちにとってはパパのようなものでもあった。

お金を稼ぐために高校を卒業したらすぐに仕事先を探して、今は怖い仕事でお金を稼いでいることはお兄ちゃんは隠しているようだけど私は知っている。

そうしてしばらくお姉ちゃんの介護生活が続いた……ある日のこと。

お姉ちゃんが高校三年生になった。そんな時、お姉ちゃんは私たちの目を盗んでドラッグつまり危険な薬に手を出していたことがわかった。

思考能力が欠落しているゆえにそれがなんのかもわからずに服用してしまつたらしい。

それから以後、私はほぼ24時間体制でお姉ちゃんを監視しドーピングの乱用に至らないようにした。

しかしドーピングというものは服用するだけで禁断症状というものがでてしまう。

毎日毎日お姉ちゃんは叫び、暴れる……そんな日々が続いた。

これは そんなお姉ちゃんに何もしてあげられない、ただ見守

る」としかできない私が見てきた過去の物語。

「触るな！！ 私から離れる！！」

朝、開口一番介護の対象である姉から飛び出した言葉はそんなものだった。

「お姉ちゃん、私は

「いいから消えろ！！ 幸せの薬を返せ！！！」

「お姉ちゃん、あの薬は」

「黙れ！！ 死ね！！ …… ああ鬱陶しい！！」

ガラスが割れる音がした。

それは姉が据え置き型のライトを窓に向かつて投げたからと、これは部屋の惨状を見る上で理解できた。

そして頭が割れるように痛いのは、私の視界に床しか見えないのは、きっと部屋に置いてあった地球儀で思い切り殴られたからだと私は思った。

「…………ごめんなさい」

床を這いずるようにして姉の部屋を出た私は部屋の扉を閉じ、それに背中を預けるように座り込む。

耳を澄ませば部屋の中に居る姉が「鬱陶しい…… 鬱陶しい……」と何度も呟く声が聞こえる。

姉は薬の禁断症状で以前の優しい姉ではなくなってしまった。落ち着かない、と爪を噛むのだが何時にも、それも何度も噛みすぎて爪はボロボロどころか無いに等しく、大量の血とグジュグジュ

になつた肉が飛び出す形となつてゐる。

その痛みが姉のムカムカする気持ちをまた高ぶらせるらしく、その痛みを紛らわせようと手の甲の皮を引きちぎる。

赤黒い中身をのぞかせるそれは非常にグロテスクであつたが、姉はどうやらそれがお気に入りのようだ。

先ほどのようにわめき散らして暴れたかと思えば、そのグロテスクな自信の手を見つめてクスクス笑つたりしていた。

……そう、ちょうど今のように聞き耳を立ててゐる時にその傾向が見られる。

「また暴れたのか、あいつ」

そんな声に顔をあげると兄の水無瀬和真がこちらを見下ろしていた。

「……うん、今は多分笑つてるとこ。だから今入つても大丈夫だと思う」

「わかつた」

兄は地球儀で殴られて頭からたくさんの血を流す私のことは一の次に、一番の心配は姉の優紀に向いていた。

私も、それでいい。

私なんかの心配よりも、今はお姉ちゃんのことで頭がいっぱいなのは仕方の無いことだと私は認識している。

兄はコンコン、と扉をノックすると続けて「入るぞ」と一言呟つて部屋の中へ入つていった。

私も痛む頭を抑えながら立ち上がり、部屋の中へ入る。

「優？ 調子はどうだ？」

兄は暴れて落ち着いた様子の姉に優しく声をかける。

対する姉はベッドに座り天井をボーッと見つめでは「……ん」とわずかに唇を動かすだけ。

「なにか欲しいものはあるか？ 薬以外なら、なんでも用意してやる」

兄は姉に優しい。

本当に姉のことを親身になつて心配をしていく。

そんな兄に姉は「……音楽」と一言呟く。

音楽というのは姉が好きなクラシック音楽が聞きたいということだろう。

ただ姉の部屋に置いてあるオーディオはつい先日に姉が暴れた拍子に壊れてしまったのだ。

「どうか、この前オーディオ壊れたら？ だからほら、見ろよ優。兄ちゃん iPod 買つたんだぜ」

「この家の家計は正直苦しい。

両親がいないので兄ただ一人で稼いで、なんとか生計を立てているこの状況で姉のために高価なものを買つたらしい。

兄は姉の隣に座るとその iPod でクラシック音楽を流してやり、イヤホンを片一方を耳にはめてやっている。

姉は曲を聴いて少し満足したのか、次は窓のほうを見やりまた「……ん」とただ一言を漏らす。

これは一応「ありがとう」と言つているらしい。

ただこの風景だけなら仲の良い兄妹だ。

しかし姉は一定の周期で暴れたり、落ち着いたりを繰り返していく。

次またいつものように暴れだすかわからない。

私はそんな姉になにかしてやりたいと思つた。

思つた、だけだった。

私がしてやれることなんてせいぜい身の回りの世話だけだ。

またいつかのよう私を優しく抱きしめてくれる日々を願つて、

ただ見守ることしかできないのだ。

口ボソト、笑つた。泣ぐのをやめた。

そしてとある日、錯乱状態になつた姉は兄を野球に使う金属バットで殴打してしまつた。

これは兄が小さい頃にクラブで使つていたものだつた。
姉は我に返るとショックで倒れ、私が電話して二人共病院へいくことになつた。

待合室にて待つているとそこに現れたのは手術を終えたらしい兄の和真だつた。

「心配かけたな、愛」

頭にはなにやら大掛かりな包帯が巻かれており、その余裕のある表情とは裏腹に傷の深さがうつかがえる。

「おねえ……ちゃんは？」

兄はどうやら無事のようだが、倒れた姉はどうなつたのだろうか？
私はそれが心配でたまらない。

「優はな……病氣、らしい」

お姉ちゃんが病氣？ 一体どういうことだらう？

首をかしげる私に兄は言葉を続ける。

「”ドランカー”……それが優の病氣の名前。今から言つことは病院の先生の受け入りだけど、よく聞いてくれ」

私はただこくん、と頷いた。

「”世界とは、人の数。見ることのできるだけ数がある。”僕や私もあなたや君の見る世界はそれぞれ微妙なズレがある。個人差とはそういうことだと思うんだ。例えば空だ。空は青いけれど、その青は俺が見ているものとお前が見ているものと同じ青なのだろうか？ 実は全然違うものを青だとお互い認識しているだけなんじゃないだろうか」

そこまで言うと兄は一度言葉を切り、私を見やる。

私は黙つてこくん、と頷いた。

「生きている中で、人は”嫌”という感情を感じる。それは当たり前のことだ。その”嫌”を乗り越える方法は人それぞれだがその方法の一つに楽しいことを考へるというものがある。いわゆる空想や妄想に値するものだ。人間誰しもが「もしもこうであつたら」とか「こうなつたらいいな」ということは考へたことがあるはずだ。ただしそれはただの一時の考へでありリアルではない。でも、優はあまりに過度なストレスを受けてしまつたせいでその妄想が優にとつてのリアルになつてしまつたらしい」

妄想が現実に。それがドランカーという病気の正体だらうか？「ドランカーはすなわち妄想そのもの。誰しもが持つてゐるものだが優は……それが大きすぎた。この間まで使用してゐた薬の禁断症状も相まって……優はこの世界に嘘をつき始めたんだ」

いまいちよくわからない。

私は兄につまらどういうことなのか簡潔に話してほしいといった。すると兄はわかつた、と頷くとまた話し始める。

「優はもう俺の存在が見えないらしい。そして愛、お前は妹として認識されない。お前は優の世界でいうお手伝いロボットだと認識される」

それはあまりにも唐突な。

「あいつは自分の中に自分の世界を作つた。そこに本来の俺たちはいない」

存在の全否定。

姉に認められない世界は姉の中で動き出す。
そこに……私たちはいない。

私はあまりのショックに床に膝をついてしまう。

“私”を“私”として認識してくれない？ だったら私は一体なんだというのだ？

「これから俺たちは優のために一つ芝居をいつ。……この意味がわかるな？」

……わからない。どうして、どうしてこんなことになってしまったのか。

「俺は優の世界（視界）から消える。これからは愛、お前が一人で優を手助けしなければならない」

……無理だ。

私はピエロではない。

お手伝いロボットになれ？ それこそ私は……私は。

「操り人形じゃない……」

「愛……」

でも、それでも私は……演じなければならぬ。
愛する姉、優紀お姉ちゃんの為に。

私は自分の胸に手を当てる。

……鼓動。それはまぎれもなく生きている証。
そして……それは今ここで潰える。

「今ここで私、水無瀬愛璃は死んだ。今ここでいるのは……」

……人形。

「……さよなら、愛璃。そして」

きつとこれが最後に流す涙になるだろう。

ロボットなのだからこれから未来永劫、涙も流さないし、笑いもしないし、電気羊の夢も見ない。

「優を頼んだぞ……” IRI A ”

なるほど……AIRIの逆読み、IRIA。
裏返し（Reverse）の私を表すにちょうどいい。
こうして私はロボットになつた。

そうして兄は世界から消えた。

私が求めていたのは幸せじゃなかつたのに。

私は”普通”が欲しかつただけなのに。

「…………ふふ」

涙は枯れたのか、それともロボットだから流れないので、
笑つた。

ロボットなのに、まだ笑えた。

そんなみじめな私が、笑える。滑稽だ。

運命を受け入れた時の話

水無瀬優紀。私のお姉ちゃん。

その姉は自分の見ている視界……すなわち世界を変えてしまつフ
ィルターをかけてしまったといった。

姉の見ている世界と真実の世界は違つ。

私とお兄ちゃんは姉の社会復帰を手助けするために芝居をうつたな
ければならなくなつた。

なぜそうしなければならないのか。

例えば、姉の世界では私は口ボットとして認識されている。

しかし私は本当は人間であり、口ボットではない。

そこで私がお姉ちゃんの前で食事をしたとしよう。食事などでき
ない口ボットが、だ。

するなどどうなるのか。

”姉の世界の中でもつとも自然な形でその事柄が認識される” の
だ。

まあつまり私が食事をして、「ほら、人間だよ」と言つても”口
ボットがノイズを出していくて何を言つているのかわからない”等の
理由でのらりくらりと避けられる、ということだ。

しかしそれは認識の誤りを強制的に捻じ曲げてしまうことである。
それはすなわち脳に多大な負担をかけてしまうことになり、症状
が悪化してしまう可能性がある。

だから私はお姉ちゃんが頭の中で描いた通りの世界の住人として
演じることになつたのだ。

お姉ちゃんの世界をまとめてみるとこんな感じ。

- ・ 基本的に世界設定は現代と同じ。しかしあ手伝い口ボット制度な
るもののが存在しており技術レベルはどうやら向こうの方が上らしい。
上記の理由から、身内の私は口ボットと扱われるようになつたら

しい。

- ・姉は五体満足である。無くなつた右腕は存在していると認識されていかるらしい。認識の齟齬が発生しないように姉が右腕を使おうとしたら手伝つてやらねばならない。

精神的にも活発な少女である。

- ・富子と春香、という同性の友達がクラスメイトとして存在しているらしい。返事の受け答えなどはすべて姉の脳内で完結しているらしいので対処としては特になにもせずとも問題はない。

- ・P.P.ファイト、という格闘ゲームのチャンピオンだという設定らしい。このため週に何度も通つたこともないゲームセンターに足を運ぶという。

- ・私は妹ではなく、いない親代わりに雇つたお手伝いロボットとして認識される。そのため人間のような行動は控えなければならない。兄は認識されなくなつたといつ。すなわち、兄は姉の前に姿を現してはいけない。

- ・地元の地形が今から8年ほど前に見えているといつ。近日、自宅のすぐそばに建築されたアパートは認識されていないので兄はここに住むことになる。

- ・時々、”ナナ”といつ言葉をつぶやく。理由は不明だが前述した架空の友達とはまた少し違つてしまつ。
- ・たまに空を飛ぶらしい。一見、意味不明だが一応本人はそういうている。

- ・運動神経もなかなかのものらしい。しかし実際とは異なる体の動きをしてしまうため車いすにて抑制する。
- 押してあげると自分で歩いていると錯覚しているようだ。

・車いすに乗っている間は私の姿を認識しない。理由は今のこと不明だがどうやら車いす搭乗中は自分で歩いていると認識しているための脳内処理と思われる。

この性質を利用して日常生活の世話をすることとする。

……以上がだいたいの姉の脳内の設定である。

まだ他にどのような設定があるかは不明なのであまり無茶な行動はしないように、と医者に言われた。

病院のフロントにある長椅子に座りぼーっとしている姉を見て私は唇をかみしめ、歩み寄る。

姉がこいつを見ている。

その目に映るものは妹としての私ではなくて……ロボットである私。

なんと声をかけたらいいのだろう?

考えろ、私。

私はロボット……ロボットなのだから。

「…………帰りますか?」

敬語を使ってみる。

なぜ敬語なのかは、昔読んだSF小説のロボットは敬語だったからといふ単純な理由からだ。

「…………うん」

姉はそう頷くとさつさと歩きだそうとする。

私はあわてて制止をせると姉を車いすに座らせ、私は後ろから車いすを押す。

そして病院を出ると家を目指して私は歩き始めた。

「ねえ……IRIA」

「……っー……はい、なんでしょうか？」

IRIA。

それが私の名前。

「なんで私はあんなところにいたんだろう?」

それはつい先ほどまでいた病院のことを指しているのだろうか?

私はなんと答えればいいのか戸惑って口を濁してしまつ。

「私ね、思うんだ」

カラカラ、と車いすが動く音だけが鳴る。周りの雑音はない。こ

こは私たちだけの世界なのだから。

「今ここにいる私は3分くらい前に神様によつて記憶とかそういうのをうまいこと作られて存在してゐつて言われたら多分信じるよ」

「……えつ?」

その言葉はまさに今の状況の的を射でいて。

私は思わずルールを忘れてしまつ。

「そうですつ……いや、そうだよお姉ちゃん!」

「IRIA……?」

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんの記憶はちよつと前に作られて、本当の世界はつ」

「あははは、『めんね。IRIAには難しそぎた話かな? 私のこ

と”優紀ちゃん”なんて呼ぶなんて可笑しいの。それにノイズだら

けで何を言つてるのかわかんないよ」

ぐすぐす笑いながら姉は言つ。

「……そつか。

認識の曲解。

姉の世界が崩れぬよつて脳が強制的に行つ、いわば防衛反応。

これが発動してとこつことなつまつ、症状はさらに悪化してしまつたといふこと。

私は少しでも症状を和らげよつと、どんな言葉をかけねばいいのかと模索した。

「わ……私はずっとお姉ちゃんって呼んでますよ？」

その結果が、これ。

現実を認めたくない私とロボットに徹しよつとする私の入り混じつた中途半端な言葉。

姉を姉と呼び、そして敬語を使ってみる。

……私は、きっとお姉ちゃんって呼び方だけは変えたくなかったのだと思う。

私がどれだけ役を演じようと、お姉ちゃんはお姉ちゃんだから……。

「あ、そうだっけ？『じめん』『じめん』なんか最近度忘れがひどくじね」

姉は簡単私のことを信じて自分の度忘れの件について苦笑する。

「いつかきっと、思い出せますよ」

その言葉はもつともっと別の意味を含めて言ってみた。いつかきっと、いつの世界のことを思い出せるよ、と。

「そうだね……思い出せたらいいなあ」

思い出せる、思い出させてみせる。

香氣に鼻歌まで歌う姉に微笑みかけながら私は心の中で決心する。今、すぐそばを駆け抜けていった車の雑音は姉には聞こえたのだろうか？

姉が見ている空の色は、私の見ている空と同じ色をしているだろうか？

私の思いは……姉に届くだろうか？

……これが私が運命を受け入れた時の話。

そしてここから最後の結末があんな風になつてしまふなんて、私は思わなかつた。思いたくもなかつた。思つてしまつた。

始日・春・

2010年7月13日水曜日……。
もうすぐ夏休みの時期だ。お姉ちゃんの学校も半日で終わるので
『気が楽だといえば楽だ。

あれから何も解決できない。その糸口すら見つかっていない。
今日もいつも通り、お姉ちゃんを起こしに行く。

「起きて、お姉ちゃん」

私は姉の身体を優しくゆする。今日も学校があるので。起きても
らわないといけない。

「学校、行かなきゃいけない時間だよ」

「ん……んつ……おはよウーラー

「おはよお姉ちゃん」

この寝ぼけた顔であぐままでしているのが私の姉、水無瀬優紀。
どこにでもいる女子高生を演じている、嘘つきの女の子。
そして無機質な声でしゃべっているであろうこの私は人型生活サ
ポート用『ミニユニケーションロボット、IRIA。らしい。
お姉ちゃんは私がずっと前から面倒を見ている大切な人。
私の守るべき、人。

「お姉ちゃん、『』飯できる」

「ありがとう、すぐに行くよ」

短いやり取りでそれだけの会話をすると私はいつたん姉の部屋を出る。

そしてすぐドアを開け姉の部屋に入る。

姉は一人では着替えができないのだ。

だからこうして面倒な手順を踏めば、姉の世界を騙すことができ

る。
私は一言も言葉を発することはせず、ただ黙々と着替えを手伝い、姉は制服へと着替え終える。

「着替え終える私。これで学校にいく準備は完了だ。もうすぐ夏休みだ、学校にいつても特にこれといつてすることは少ない。だからといってサボることもない。ただなんとなく流されて過ごす日々。それには意味なんてないのかもしねりない。」

姉の、独り言。

まるで誰かに見られているような、その見られている誰かに対してモノローグを語っているような、そんな語り口だ。

「うーん……案外そんなもんかもしれないなあ……」

意味のない日々。

お姉ちゃんにとつてはそうかもしれない。

でも、私にとつては、私たちにとつては意味のある一日一日だ。

そんな独り言を呴きつつ、姉はリビングへ向かう。

私もそれに続き、リビングへ向かい先回りをしてキッチンまで向かう。

「今日は和食ですよ、お姉ちゃん」

「……苺ジャムのパンはないの？」

「あつまかよ？」

「なんでそれを出すがないの？」

「いえ……特に意味はないんですけど……」

とこりうか、朝食に白ごはんお米はお姉ちゃんの日課だったはずだ。話しが今更すぎてもよく理解できない。

「あのね、H.R.I.A.」

やれやれ、とこりつた風にお姉ちゃんは説明を始める。

「H.R.I.A.は充電好きだよね？」

「はいです、大好きですよ」

充電とこりの多分ロボットとこり設定柄、私がなにかしらのHネルギー補給を日常的に行つぱぢあわつことを指してこりのだらう。

「それも家のコンセントであるのが好きなんだよね？」

「はいです、人間のよつて言葉でつまく表現できかねますが

「それをアルカリ電池で充電されるとどういふ事？」

「いいですけど……嫌ですね。なんといつたら良いのかわかりま

せんが「

「そうそれ、”別にいいけど嫌”なの。今私そんな気持ち」

「申し訳ないです」

「いいのいいの、どうしても嫌！ とかじゃないしね」

お姉ちゃんは片手をひらひら振りながらパンをかじる。

「ロボットだつて人間の子どもと同じ。わからないことは説明してやらなければならない。ただ物分りが良すぎて融通が利かないことも多々あるがそれは仕方のないことだ。ただこうしてともに生活をしているとそれだけ私の行動パターンつていうのかな？ そういうものをインプットしていくものだから教育・指導はしなくてもよい。なのになぜ私がこうしているのかというと……。人間と見ているから……かなあ」

いつもの語り口。きっと心の中で思っていることが自然と口に出てしまつているのだろう。

私はその言葉に割り込むようにして話しかける。

「私ですか？」

私のことを人間として見ている？ 私のことはロボットとして見ているのではなかつたのか？

「んー、そうそう」

「私を、人間として……ですか」

思わず言葉に詰まつてしまつ。

なぜならそれは大正解だからだ。なんだかやるせなくなつてしまい、自嘲氣味に笑つてみたりしてみる。

「じゃあ聞くけどさ、私とIRINAってどんな違いがあると思ひっ？」

「えっと……それは……」

違ひ……。

違ひなど、ない。

私は人間で、お姉ちゃんも人間だ。

違ひがあるとすれば、それはお姉ちゃんのほうだ。世界からほんの少しだけ、ずれたところにいる。

でも、そのずれはオーケストラの演奏で音を外してしまつくらいの致命的なずれ……だけれど。

「演算しても駄目だと思ひ。これはそういう種類の問い合わせじゃないよ

「……はい」

当然のじとく私はロボットではないので演算なんてことはしていないが、とつあえず頷いておく。

「じゃあ、私学校行つてくるから、帰つてくる来るまでの宿題ね」

お姉ちゃんはそう言い残すとイスから立ち上がり、玄関へ向かう。

「これ、お弁当です」

「あ、あつがとつ」

お姉ちゃんにお弁当を渡すと、私は車椅子の準備をする。

「じゃあ、よく考えてみてね。いつときまーす」

「はーです。こってりうしゃー」

そう言つて私はお姉ちゃんを車椅子に乗せて玄関を出る。
私よりも背が高いのに、軽い身体だ。

そして私は学校へ向かう。

今日もまた、お姉ちゃんの”無駄な日々”が始まるのだ。

「家でじつとしているつー。リーハ”ソラ”の狭間なのだかーー」

お姉ちゃんは陽気に歌なんて歌つていた。

私はそんな歌は聞いたことがなかつたけど、その歌詞にはどこか
デジヤビュに似た感覚があつた。

「コントラバスに乗つかつてー」

始日・春・（後書き）

勘のいい方ならもうつづいていふと思ひますが、ここからの話は第一章と照らし合わせて読むことにより一層、物語の深みを知ることができます。

それではこれより、IRINAもとて愛璃の視点から見た話が始まります。

テセウスの船

「そりゃ、たとえば”テセウスの船”だ

機嫌よく歌つているかと思えば、姉は突然口を開いた。
テセウスの船……確かにそれはパラドックスの一つだつたはず。
ある物体（この場合は船のことだ）を構成している要素（たぶん
船の部品とか）を全て置き換えた時、はたしてその船は基本的に同
じでありますかという話だ。

まあ、それを今なんでお姉ちゃんが話しているのかまったく理解
できなけれど。

「IRIAの頭パートを変えてみる。これはIRIAですか？　は
い、IRIAです」

「IRIAの身体パートを変えてみる。これはIRIAですか？
はい、IRIAです」

「IRIAの手足パートを変えてみる。これはIRIAですか？　は
い、IRIAです」

「IRIAの顔パートを変えてみる。これはIRIAですか？　は
い、IRIAです」

「なりば……」

お姉ちゃんは少し考えて、数秒止まつたかと思えばまた口を開く。

「IRIAの記憶をつかさどるハードディスクを変えてみる。……

「これはIRIAなんだろうか」

「思えばどこからがIRIAでどこからがIRIAじゃないのか、なんて誰が決めるのだろうか？ それは主觀によって変わってしまうものだ。もしかしたらIRIAの頭パートを変えてしまうだけではIRIAじゃなって人もいるかもしれない。そしたらだよ？ もし私が髪型を変えた時点でそれは私じゃなってことになつたら”私”ってなんなんだ？ 私は髪の毛なのか？ もし記憶喪失になつてもはたしてそれは私が？ 記憶喪失になつた私が私じゃないなら今の私って記憶なのか？ それとも顔？ 顔が変わつたら私じゃなくなるのか？ だつたら……」

「”私”って誰だ？」

姉の言葉はどんどん早口になつていいく。
不安げな表情を余計に曇らせていくながら、言葉は饒舌になつていいく。

「これは砂山のパラドックスにも共通するものがある。たとえば私の腕が一本なくなるとする。……これはまだ水無瀬優紀だ」

仮定の話でお姉ちゃんは自己質問していく。
まあ腕がないのは”たとえば”でもなんでもなく本当の話で微妙に目的を射ているのが恼ましいところだ。

「もう片方の腕がなくなつても私。足がなくなつてもまだ私。死んで物言わぬ屍になつても……それは水無瀬優紀」

「火葬して灰になつた燃えカスも私？ だつたら元素のCも私？ なら物理の授業で私が出てきているのか？ そうじやない、Cはみんなだ。だから灰は固有名詞じやない。だつてみんな灰なのだから」

「だつたら私つてなんだ？ 私つて誰だ？」

「灰だけなのは私じやない。腕だけなのも私じやない。脳みそだけなのも私じやない。全てが合わさつて私なんだ」

「……だから」

お姉ちゃんは空を見上げる。
今日も代わり映えのしない空。
ずっと変わらないであろう空だ。

「顔が違くても、声が違くても、記憶だつて違くても……」

私ははつとして足を止める。
どこかで聞いた……言葉？ いや、そうじやない。
頭の端つこのほうでチリチリ、パチパチとなにかがはじけ、私の思考をくすぐる。

「私は私でいられたら、それでいいなつて。誰かが私を私だつて、わかつてくれたらいいなつて思うんだ」

それは誰に対しての言葉なのだろうか。
お姉ちゃんにはなにが見えているのだろうか？
誰と……話しているのだろうか？

「IRIA……私は、誰？」

……えつ？

私は見えていないはずではなかつたのか？
でも、今確かにお姉ちゃんが私を。

「……なーんちゃつて、ね。ちょっと悲壮感漂わせて見たりするの
でした」

……独り言、冗談だつたのだろうか？

いや、それにしてはなにか真に迫るような……。

「和真か……急に人の妄想に入つてこないでよ」

和真……兄の……名前？

兄は……お姉ちゃんの世界から消されてしまつたのではなかつた
のか？

私は周りの様子を確かめてみる。

もちろん兄はいない。

そりやそうだ、お姉ちゃんは兄のことを”和真”なんて呼んだり
しない。

すると……その”和真つていうのは……誰……？”

ねえ、お姉ちゃん……あなたの世界には……何が映つているの？

「無限……」

なおも、お姉ちゃんの謎の咳きは続く。

この咳きが、元の世界への帰還の拒絶を表しているようだ……。
お姉ちゃんが、帰つてきたくないよつていつててるみたいで……。

「お姉ちゃん……」

だから私はお姉ちゃんを抱きしめた。

ねえ、お姉ちゃんは私の体温をどう感じるの？

私は口ボットだから冷たい？

それとも今は車椅子だから……なにも感じないの？

「嫌だよつ……」

嫌だよ……そんなの……。

「……ひつへ……嫌だよおつ……」

思わず漏れる嗚咽。

出口なんて見えない、回復の余地もなし。

どこへ進んでも、どこく進んでも、行き止まりの迷宮。

私は……どうしたら救えるかこうの……？

「どうしたの急に？」

「えつ……？」

お姉ちゃんの言葉にはつ、とする

私の思いが……通じた？

私が……見えるの？

「お姉ちゃん！ 私……私つー。」

抱きしめて、ただいまつて言つてほしつー！
もう大丈夫だよつて、もうなんともなつよつて……私のことを抱
きしめて……。

「……なうば……神はなにでできてるんだら？？」

「お姉ちゃん……？」

……お姉ちゃんは私を見てなどいない。

その視線はただ虚空を見ている。

虚ろな瞳で、表情で……ただ虚空を見やつしていた。哲学者になりきった姉の……ただの独り言。

「もう嫌つ……」

もひ、嫌なんだ……。

こんなお姉ちゃんを見るのは……嫌なんだ……！

「誰か助けてよお……誰かつ……あつ……ぐうう……！……？」

渦巻く思考。

あふれる感情。

逃げ場もなく膨れ上がったそれはダイナマイトの爆発のように弾けた。

バツッ。

瞬間、私の脳から大事なものが今まで聞いたことのない変な音とともに”切れた”。

ほり、見てこらん。

脳みそって大事でしょ？

ちょっと千切れちゃったくらいですぐおかしくなっちゃう。狂つちやうんだよ。

「あ……」

視界かくN_o回N_o

上にいつて、下にいつて、私の口に入つていつて、お尻からきたそれは私の大事なところへと進入して子宮へと到達する。ほら、ここが赤ちゃんのできる場所だよ。暖かいでしょう？

「あつたかい……あつたらつたたつたり……つたたかいまや

もうあんしん、とてもあたたかい。

ほら……たくさんのがいじょうだよ。
おねえちゃんからじゃなくともたくさんもりれるんだよ。
ここがこわれてよかつたね。

ろぼつとだね。

File Note Found . . .

機械になつた妹は世界を超える夢を見るか？

学校に着く。

教室に入ると、お姉ちゃんのクラスメイトの人たちからいぶかし
んだ視線が送られる。

この視線にも正直慣れてしまつた。

お姉ちゃんはといふと、富子、春香と呼ばれる架空の友達と樂し
そうに会話している。

クラスメイトの人たちからは「相変わらず『持ち悪い』等の言葉
が飛び交う。

私はそんな言葉が聞きたくなかった。

聞きたくなかったので、聞こつとしないと思えばそれらの言葉は
私にはまったく聞こえなくなつた。

外の言葉 穢れたナイフの雨を完全にシャットアウトできるの
だ。

不思議なものだつた。

コツさえ掴んでしまえば後は簡単だつた。

人間というのはよくできているなあ、といつのが私の感想だつた。
授業が始まると、私は授業参観の親さながらに教室の後ろに立ち、
お姉ちゃんを見守つた。

授業中、お姉ちゃんはずつと携帯を弄つていた。

もちろん、先生はそのことには気づいているが、あえて何も言わ
ない。

医者からも、そう言われたからだ。

お姉ちゃんの社会復帰の為だ、と。

まあ学費はちゃんと払つてるし、他の生徒に迷惑もかけていない
ので両面の間はこれでいいそうだ。

授業が終わり、周りが騒がしくなる。

そんな騒がしさの中、私は声をかけられた。

「おはよー!……愛璃ちゃん」

声の主は、同じクラスメイトの神田直人かんだなおとだつた。気弱そつな見た目をしているが、なにかと私たちの心配をしてくれている男子だ。

「おはよー!」さあ、直人さん

私も挨拶し、会釈する。

「なにか、新しい遊びを見つけたみたいだね」

直人さんはお姉ちゃんを見やりながら言つた。

”遊び”とはおそらく今、一生懸命に携帯を弄つてこなすことの話だろ?。

「はい、なんにでも夢中になることを見つかるのはここことですか」

私は純粋にそう思つていた。

せめて自分の中の世界の中だけでもなにかに没頭して、樂しくしてくれたらいいなと思つ。

「でもあんなに夢中になるなんて……一体なにをしているんだらうね?」

「確かに少し気になりますね……」

……しかし。

「私は家で留守番していることになつてゐるから、学校で姿を見せてはいけないし……直人さん、ちよつと見てきてくれませんか？」

「僕が？ まあ……構わないよ。じゃあ見てくんよ」

直人さんはさう言つてしばらくお姉ちゃんの側で携帯を覗き、振り向いたかと思うと眉に皺を寄せ妙にいぶかしんだ表情でこぢりこじりて来た。

「どうでした？」

「……なんか、凄い哲学っぽい感じの……難しいサイトの掲示板を見てるみたいだつたよ」

よくわからないが、もしかしたらお姉ちゃんの世界では別のものに見えているのかもしれない。

しかし哲学……か。

頭のいいお姉ちゃんのことだから、やつぱりなにをするにも一般人には理解しがたいものになつてしまつのは仕方のないことだ。いつもとは多少違つたところが見られたものの、大きな変化はなく一日は過ぎていく。

私はただそれを見ているだけ。

全ての私生活を投げたして、徹底して傍観者となるのだ。
しかしただ見ているだけではおもしろくない。

お姉ちゃんがどうすれば帰つてくるのか、いつもそれを模索しているのだ。

例えば、そつ。この世界の成り立ちから模索する。

これは仮定であり思考実験だが、まず反射率100%の鏡を一つ用意して、合わせ鏡とする。

ひとつの鏡の中央に穴を空け、そこから奥を覗き込む（この場合その穴には光の漏れが一切ないと仮定する）。

そこには”鏡に写った自分の目を写した鏡を写した鏡”を写した鏡、とループする鏡”がある。

反射率は100%なので事実上、無限個の目が存在することとなる。

有体に言えば、それは一種のフラクタル構造であり、その全ては大きさは違えど全て同一であるといえる。

しかし、そこで一瞬瞬きをしてみる。

鏡に映った目も閉じるのだが、像が写る速度は光の速さを超えるため、これらが目を開いた時、無限個先の目は閉じているはずである。

このようす、全てが同一と仮定された中でも真は偽である場合が想定されることがある。

なぜこうなったのか？ それは先ほども述べたとおり、全ての事象は光速を超えることができないからである。

それぞれの鏡に映った目が閉じるのはほんの一瞬のズレがあり、微々たるものでもそれはいずれ人間の目でも観測できるようなズレになる。

これは今朝お姉ちゃんが言っていた”テセウスの船”と同じ。

一枚目の鏡は”同時に目を閉じた”。そして一枚目も同時であるといえる。

そして三枚、四枚目となつてもそれは変わらない。

だが無限先の鏡は、もはや同時に目を閉じてなどいない。いわば高速で倒れていくドミノ倒しだと思えばいい。

”一枚前の鏡の目が閉じる前に、現在の鏡の目が閉じる”ことは決してない”ということだ。

しかし、同時である、同時ではないといつ一つの答えがあつたとして、その違いの境界線は果たして何枚目の鏡にあるのだろうか？ もしもその鏡を見つけることができたなら、それが意識・認識の

境界線。

白と黒の間、正と負の間、1との間、そして……お姉ちゃんの世界と、私の世界の間。

こいつを説明することができれば、どうなる？

一つの事象は溶け合い、一つになるのだろうか。

お姉ちゃんを、救い出すことができるのだろうか？

……いや、これは妄言か。

そもそもいつからの鏡が同時でなくなつたか、などとこいつは観測した人物の主觀で決められる。

いわば”一人一人に見えている世界は違う”のだ。

私は哲学者などではない。

立証されないものではお姉ちゃんは救えない。

他にも方法は無くもない。

例えば、群速度と呼ばれる速度が光速を超えることが観測されている。

この群速度は情報の伝達の速度を意味するものであり、光速の3倍の速度を観測した事例もあるらしい。

イメージとしては、AとB、一人の人間がそれぞれ宇宙空間におり、一人は数光年を超える位置に居たとする。

この時Aはとてもない長さの棒を持つており、それはBの位置まで届いている。

そしてAが棒を引っ張れば、Bは動いた棒を見て、”Aが生きており、棒を引っ張った”という事象を光より速く観測することができる。

このような異例な情報伝達方法があるのなら同じ考え方で、この世界と隣り合つた別の世界の境界線を超えることができるのでは？

それにはまず先ほどの例のような長い棒に代わる”私からお姉ちゃんに届いているなにか”が必要だ。

まず思い浮かんだのは、言葉。

いや……言葉はそのまま伝わらない。

たとえどんな言葉を投げかけようとも、お姉ちゃんにたどり着く時には別の言葉となってしまってこる。もつと直接的に伝わるもの……。

痛み、とか？

いや、お姉ちゃんに暴力をふるつゝもりか？

というか、仮に痛みは現実世界と同じだとしてもそれがなんだといつのだ？

ただお姉ちゃんは痛いだけじゃないのか？

駄目だ……棒は見つかったけど、それが動くことが何を意味するかがお姉ちゃんにはわからない。いや、まあ”殴られた 痛い そうかここは別の世界だったんだな”ということを理解したりといふほうが無茶な相談だけビ。

……と、そんなことを考へていると今日の授業はもう終わっていたようだ。

次々と生徒たちが教室から鞄を持って出て行く。

「では、今日もあそこに行きますか？」

私はお姉ちゃんの車椅子を押して教室から出ながら聞こえていいだろ？が、一応話しかけてみる。

「さあて……放課後はなにをしようかなあ……？」

お姉ちゃんはもう呟くが、目的の場所は既にわかっている。
私はそれから何も言わずに、野中F.R.T……ゲームセンターへと向かった。

云わらない言葉、繋がる想い

「ゲームセンター」に着いた私はさっそく店長に呼び止められた。

「またあんたらか……」

「ええ、それ相応の代金は支払っているからいいんですよ?」

店長の男は呆れ、あきらかにお姉ちゃんを変な目で見ながらそう言った。

私は表情を変えることなく、あつけらかんとした風を装つてみせた。

「ち…… の言いつけがなけりや、こんな一人……いや、一人か。してやるのこよ……」「

なにやうびツブツと言しながら店長はゲームセンターの奥へと消えていく。

正直言つと店長は見た目も素行もとも怖いのであまり会いたくない。

今でも両手足が震えているくらいだ。

それでも、あんなに怖そうな人が私たちを追い払えないのはわけがあつた。

実は私には毎日24時間365日、鈴付きをサポートする”ヘルパー”として勤労した分が国から給料として支払われているのだ。

それは私用に使つていいくことなので、お姉ちゃんがここを利用するのを断られないように店長に少々のお金を払つて黙つていてもらつているのだ。

ただ、お金を払つているとはいあまり大きな態度でいるとひど

い目に会わされるかもしれない。

怖いことや痛いことは嫌だし、なによりお姉ちゃんがどんな目に会つかわからない。

だからこれからはもう少し大人しくしていようと黙つ。

ゲームセンターに入るとなつまち騒がしい音楽と人の声が私の耳を刺激した。

大勢の人で賑わう中を、車椅子を押しながら悠々と人ごみの中央を突っ切るのはなかなか勇気のことだつたが、視線を下に落とし、周りの人の視線と交わらないようつにすることでそれは達成できた。

お姉ちゃんの田当てのゲーム筐体は奥のほうにある。

ゲーム筐体とはいってもそれは電源の切られた、真っ黒な画面しか映つていらない筐体だ。

まあ、お姉ちゃんの世界ではそれがどうこうしたものに見えているのかはわからないが、お姉ちゃん自身はどうでも楽しそうなのできつと他のものに見えているのだろう。

私はそんなお姉ちゃんの後ろで、ただ見ているだけ。

今だつて、そう。手を伸ばせば触れられるのだ。だが触れてはいけない。触れてはならないのだ。

今、私があなたに触れたらどうなるのだろう?

見えない? 違うものに見える?

いざれにせよ、これ以上認識のズレを起こしてお姉ちゃんの病気を悪化させてはいけない。

触れられるのに、触れられない距離。

私とお姉ちゃんを隔てる世界の境界線が私を阻む。

どうしてあなたはみんなの違う?

どうしてあなたは違うものを見る?

どうしてあなたは違うものを見る?

「えへへ……、えへへ、そんなに楽しそうな顔をする？」

ただ立ち尽くし、見て居るだけの時間は過ぎてこへ。 キツツクシ
の帰る時間だ。

お姉ちゃんの分はおひがい、お兄ちゃんの分の晩御飯を作らない
といけない。

私は車椅子を押し、また視線を落としながら店を出て行つた。

「ただいまー」

夏といえどもすこしあたりが暗くなる時間、お姉ちゃんと私は家
に帰宅した。

車椅子からお姉ちゃんをおひがい、私はせりせりキッチンへ先回
りする。

朝、早起きして用意しておいたから揚げをレンジの中にこれあつ
ためる。

「お帰りなさい、お姉ちゃん」

「ただいまH.R.I.A」

お姉ちゃんはすっかり夕飯時の匂いにつられ思わずキッチンに顔
を出してきた。

「今日の「J飯はなに？」

「はー、今日はから揚げですよ」

一人で食事するにはとても食べきれないような、不自然な量のから揚げがキッチンに並べてある。

お姉ちゃんが食べ終わった後、お兄ちゃんにも食べさせたあげるためだ。

「つていうか凄い量……いまに始まつたことじやないけど。……そ、う、ヒリハはなぜかいつも料理をたくさん作る。まあ食べてみたら結構いつの間にか完食してこるのだが」

やつぱり不思議に見られていたみたい。しかし、お姉ちゃんが食べている分がなくなつていてるということは、いつの間にか完食しているという認識になつていたのか。

話をしている間にレンジの音がピーッと鳴った。
「ひやらから揚げが完成したよつだ」

「はい、出来上がりです」

そうして私は食器をテーブルに運ぶ。
お姉ちゃんはいつも手伝おうとするのだが、腕が一つしかないのにそんなことをせりられない。

ましてや”無い箸の腕があると思つてる”お姉ちゃんはどんな矛盾を起こした動きをするのかわからない。

そんなわけで、とりあえずお姉ちゃんの背中を軽く押しながらテーブルに着かせる。

「いただきまーす」

「はい、じゅわ」

お姉ちゃんが食事を食べ始めると私はいつも隣に座つて食事の手

伝いをする。

自分で食べられるから、といわれたらいつも

「私の仕事ですから」

と、譲つてあげない。

私はヘルパーで、お姉ちゃんの妹なのだ。ここはだけは頑固にいかせてもらう。

「まあ、そんな日常にもすっかり慣れてしまったので私はもうなにも言わない」

……？

今、お姉ちゃんは何か言ひていただろうか？

”もうなにも言わない”……か。

「こんなことを繰り返していたら私は料理はあらか食事の仕方まで忘れてしまうかもしれない」

「それはおおげさですよ、お姉ちゃん」

「おおげさといえば、こんな食事自体がおおげさだとおもつんだよねえ……。私は食事中、まつたく手をあげることなく終始 IRI A に”あーん”してもいいのだ。恥ずかしいというかみつともない感じもする」

……そうか、知らない間に迷惑をかけてたんだ。

やつぱりこじりいうことはただのおせつかい……なのかな。
でも、それは私の「仕事ですから、でしょ？」

私の思考にかぶさるよつにお姉ちゃんは言葉を続けた。
わかつてしまつたのだろうか、私の沈んだ表情が……。
でも、お姉ちゃんは嬉しそうだつた。
これはもつとお世話をもいい……つてことだよね？

「わかつてゐるのでしたらじつとしていてください。はい、あーん

「いつもの日常では私がIRIAのイニシアチブを奪つているのに
食事の時だけこの始末だ。このままやられたい放題なのも癪なので
反撃してやることにした。そういうやIRIA、私の出した宿題わか
つた？」

宿題とは、今朝いつていた私とお姉ちゃんの違ひの話のことだろ
う。

その答えをみちびけたのがどうかを、いま問われているのだ。

……私の気持ちは、いつでも沈んだまま。

必死に言いたいことも、触りたい時も、全部我慢しなければなら
ない。

この際、認識のズレというリスクを背負つても、本当のことを
言つたほうがいいのでは？

言つてあげたい。こつちに帰してあげたい。
だから……私はこつちに答えることにした。

「ないのです

ただ、一言だけそう告げる。

「あー……IRIAさん？　ないのです、とは？」

意味が伝わらず、聞き返される。

やつこりぐ、今度はより鮮明に伝わるよつて説明する。

「ですから、私たちに違ひはないのです」

「えつと……つまり私とエリカは一緒にいると、あのね……いくらなんでも違ひはあるでしょ」

確かに、にわかには信じられない話だ。

お姉ちゃんからしてみれば、一緒に過ごしていたロボットが実は人間だ、などといわれているのだ。

「まずあんたは食事しないでしょ」

「できない理由があるのです」

そつ、お姉ちゃんの前で食事をしようものならその瞬間に認識の強制力が働き、お姉ちゃんの病気は悪化してしまつ。だから極力お姉ちゃんの前では食事をしないようにしていたのだ。ロボットのようにつとめるために。

「そんなシステムを積んでいないからでしょ」

システム？ 食事をするシステム、ということへ。
そんなものは必要ない。私は人間なのだから。

「違います」

「なにが違うの」

「違うのです」

「だから何が

「お姉ちゃんにはわからなこと」です

もつて。やはり説明してもわからなことがあります。

違う世界の私が、なにを言おうともその言葉はまつすぐ云わらなり。

「あ？ なにそれ、お話をすんなうり説明をしてよ

……わからないなら教えてやる。

強制力がなんだといつのだ？ そんなもの、捻じ曲げて捻じ曲げて捻じ曲げて……もつてしまえば私の言葉は面くのではないのだろうか。

そう思った私は、真実を伝えることにした。

「私はロボットじゃない、人間だからです」

「ほら、もうやつすくべノイズを出す」

「ノイズなどだしていません」

云わらないはずはないのだ。

私の言葉は世界に存在するのだ。

絶対に伝わるものだ。

「あいつ演算処理に失敗したのね、今日はもつシャットダウンしな

れこ

演算処理なんかしてない、シャットダウンなんかできない。
私はロボットなんかじゃない。
どうして……どうしてわかってくれないの……。

「違うんだよー。」

「だからなにが」

「私は人間で、お姉ちゃんの妹なんだよー……」

「だからなにが！」

「ひつ……く……」

お姉ちゃんはなにも聞こえない。

私が見えない。

怖い。私という存在を認識されないことが怖い。

私がロボットじゃないって……証明してくれないことが怖い。

「じめんH.R.I.A……私はあなたを下に見ているとかそんなんじゃなくてただあなたならどう答えるか興味がわいただけだったの」

「いえ……お姉ちゃんは謝らなくていいのです。まだ不完全である私の不始末だから……」

そうだ、私はなにをやっている?

こんなことをしていればお姉ちゃんの病気は悪化していくだけだとこうの?」

「言葉を選ぶつて大変だなあ……私の思つてることがそのまま伝わればいいのに」

お姉ちゃんは悲しそうな顔をしてそんなことを言った。
お姉ちゃんの中ではロボットであるはずの、私に。
思つてこどがそのまま伝わればいいのに……か。

「伝わつていいよ」

私は笑顔で言った。

お姉ちゃんの思つていることはずつと口にでているんだから。こんなに優しいお姉ちゃんの気持ちなのだから。それは世界が違えども、ノイズが混じることなく伝わる。優しさはそのまま私に伝わる。

「お姉ちゃんの思ひはいづでも丸聞こえだよ」

「そうか、そりだつたね」

「……うんつ」

嬉しくて、ただ私のことも気にかけてくれるのだと。

そう思われているだけで私は嬉しくて、笑つて、お姉ちゃんと笑顔でいられるのだ。

描かれた世界線の式

食事を終えると、私とお姉ちゃんはのんびりとテレビを見ていた。お姉ちゃんの世界と、こちら側の世界の整合性を確かめるためにテレビの内容がどのようなものか、とにかくことを逐一話していた。その中で一つ、お姉ちゃんが少し妙な……『仮になる』ことを言った。

「これは証明問題……じゃないのかな？……へえ、結構おもしろいね」

見るとテレビに映し出された文字は、『女が邪悪である』ことを証明せよ』と表示されていた。
なんだろ？、差別がテーマの番組なのかな？

やつ思ってそのまま見てみると、それはどうやら日本のことわざをおもしろおかしく、無理やり数式にするところが珍しくなった。

一クだけ。

「やつですね、今のは凄くおもしろいこと思ってます」

正直な感想を述べた。

考えた人はとてもユニークな人間だろうな、と思った。

しかし、お姉ちゃんの口からでた返事は私の予想していない言葉だった。

「えっと……おもしろいって、なにが？」

「え……ですから、やつの証明問題ですよ」

「証明問題？」

「今テレビでやっていた……あつ」

すぐに私は、はつとして口を閉じた。
また記憶の改ざんが行われたのだ。

しかし何故？

これは果たして世界の真実に関係することか……？

”見えているもの、見えていないもの”の違い……それがわから
ない。

「……ナナ」

「……え？」

テレビを観賞しながら携帯の画面を一生懸命に見ていたお姉ちゃんが急に呟いた言葉。

ナナ？

「それは……人の名前ですか……？」

「覚えている……。覚えている……私の大切な……」

目は虚ろ、ただ空を眺め、その姿は私を捉えていない。
大切な……なに？

「……行かなきや……」

そう言つてお姉ちゃんは立ち上がり、リビングを出て行つた。

おや、うへ自分の部屋にいったのだろ？

「あつ……待つてお姉ちゃん……」

突如、震える私の携帯のバイブルーシモン。
どうやらそれはメールのようだった。
タイトルは”世界の真実”

送り主は……”電腦の少女”……？

そんな名前のアドレスは登録していない。
私の記憶違い？

いや、こんな名前は聞いたことも見たことも……。

『ぐぐり、と唾液を飲み込む。
手が震える。

このメールを見るべきか、なかつたこととするべきか。
世界の真実……それほどどのような解釈にもなじむ。

ただの妄言。

お姉ちゃんの病氣の真実。

情報認識の違い。

……見るだけ、見るだけならばまだどうもならない……はず。

そう思つた私は、メールを開いた。
まずははじめに添付ファイルがあつた。

「……これは……プログラムコード……？」

拡張子は JPEG……どうやら画像データのようだつたが、よくわからない図になにかのプログラムコードのようなものが描かれている。

「たくさん線に……これは球……かな?」

無数の線が縦に並んでおり、それらに のマークが描かれている。中央部分にあるものだけは、なぜか大きい。

```
w o r l d   l i n e   p r o g r a m
w1 = 2000 + year
world change(w1 = > coin toss
              ^
)
if (coin toss == 1) then
    auto(world1 == go)
else auto(world2 == go)
wait(30s)
auto(world1 == world2)
endif
>i24362 - 2360<
```

「ワールドライン……プログラム？」

プログラムらしき記述の一番上には、そう書かれていた。
ワールドライン……世界の、線……？
私には、これらがとても意味のあるものに見えた。
なぜだかは、わからないけど。

次に本文に目を通す。

携帯に届いたメールでは最多の文字数。

届いた内容はとても理解に苦しむものだった。

- - - - - 本文 - - - - -

想像してみてほしい。

夏の午後7時くらいの時間帯程度に、暗くなつた都市だ。
電車の走る線路……その高架下道路は影に覆われ、さらに暗いんだ。

どう？想像した？

……そして、人がたくさんいる。スクランブル交差点を人々が行きかう。

人々の歩みが止まると、今度は車が走る。右へ左へ、車たちが流れていく。

そんな中、交差点の真ん中を、少女は一人白いワンピースに身を包み裸足で突っ立っている。

人々の声、車の音、様々な雑音の中……少女は立っている。

その一つ一つを正確に聞き取ることはできないけど、ただ騒がしいということはわかるよね？

ただ、それでも何故誰も少女を氣に止めようとしないのか。道路のど真ん中に立つていてる少女を、何故誰も注意しないのだろう？

「これは独り言じやない。……そう、君に話しかけているんだよ。液晶画面の前に居るあなたに。」

あなたは自分が見ているものが、他のみんなが見ているものと十分狂わず一緒にものかどうかわかる？

自分が赤色と思っているそれは、言葉で言えばみんなもそれを赤色というだろ？

でも、実際に自分で感じている色合いとほかのみんなが感じている色合いは、本当に一緒にのかな？

自分が見ている世界は、他のみんなが見ている世界とまったく同じなのかな？

私は普段からそんなことを考えていた……あなたはそんなことを考えたことはある？

……なにも反応しないね、まあそうだろ？

だつてあなたたちにとつて、こうこう状況つてこののは”ここまではまあ、よくある展開”ってやつなんだろ？

……問題は次だ。

私たちが、”こっち側の世界の秘密”に気づけた後はどうするか、それが最大の問題だ。

今回は、こっちから積極的にアプローチを仕掛けていくことにするよ。

なにせこっちには優秀なメイドがいるんだ。

……？

本当ににも返事がこないね。
もしかしてあなたはどうしてこうなったかわかつていない？

……わかつた、なら説明してあげよう。

どうして”コインストス”一つで、世界の仕組みに気づけたかつて
ことをね。

なにもかも、意味がわからないみたいだね？
なら、納得させてあげる。

今、私を見ているあなたに、私が言った全ての謎を教えてあげる。
そんなもん知りたくねえ、電波乙、とか思つたなら携帯の電源を
落として寝るといい。

そのほうが健康的にもいいしね。

ただ、コインストスでどうやって世界の仕組みに気づくんだ？とか、
どうやって画面内の私があなたにこうしてミニユニークーションを取
れるんだ？とかそういうことが知りたいなら、このメールに添付し
てあるデータを見るといい。

そのデータには私たちが今まで過ごしてきた日々が記録されてい
る。

ちょっととしたタイムスリップ気分で見ればいいよ。ちょっとした
神の視線ってやつを体験してもらうことになるかな。

あなたはデータを読み進んでいくと、またこのシーンに出来つい
とになるだろう。

その時にあなたはどうするか、きちんと考えてね。

どうか、平凡で……それでいて幸せな日々を、今回ここを取り戻す
ために。

……衝撃だつた。

「コインストス一つで世界を変える?
そしてその答えが添付されているデータ……つてこと?」

私は怖くなつて携帯を閉じた。
このメールはいつたい誰から来たの?
なんのために送られてきたの?

様々な思考が頭を巡る。
気になる内容は他にもたくさんあつた。

液晶画面の前にいる、私。

画面の中には、あなた。

……どっちが真実?どっちが仮想?
いや、この問いはあまりに愚問。

メールの送り主はいる。現実世界のどこかに、いるはずなのだ。

電腦の中の少女……。

あなたは現実の人間なの……?それとも……。

少女の病状、状弱な状況

気づけば、もう一通メールを着信していた。

お兄ちゃん……和真お兄ちゃんからだ。

内容は「今日の会議を始めよ。今家の前にいる」だった。
会議、というのは私とお兄ちゃんの一人で、どうすればお姉ちゃんの病気が治るのか、またこれからどのように対処していくのかといふことを話し合うことである。

私は玄関まで小走り、扉を開けるとそこにはお兄ちゃんが立っていた。

「……メールを送ったはずなんだがな」

「『めんなさい』……ちょっとついかりしてて……」

本当は変なメールが来たことであつと慌てていた。
いつもこの時間にお兄ちゃんが会議のためのメールを送ってくるのをすっかり忘れていた。

私はとりあえずお兄ちゃんをリビングへ招き入れると今日の報告を始めたことにした。

「……優は、今日はどんな感じだった?」

表情は見えない。

ただ、淡々と私に尋ねる。
だから私もただ、答える。

「いつもながらに多少の認識のズレが……あと、ちょっと気になることが……」

「気になること?」

振り向いたお兄ちゃんの表情は意外そうな顔をしていた。
私は今日の出来事で気になつたこと……つまり、あのテレビを見
ていた時の出来事について口を開いた。

テレビを見ている最中に急に認識のズレが起きたこと。そして…
…。

「お姉ちゃんは”ナナ”って呼いてた」

「ナナ?」

「その後すぐに「覚えている。覚えている。私の大切な…」と咳
いていました」

「覚えている、覚えている、大切な…」

お兄ちゃんはすっかり考え込んでしまった。

私も一緒に思考を張り巡らせるが、解決の糸口は見えない。

「それって、人なのか?」

「だと……思います……」

「もしかしたらそれは……妄想友人『イマジナリーフレンド』かも
しない」

「妄想友人……ですか?」

「ああ、幼児期の女性にたまに見られる症状だ。架空の友人が頭の中だけに存在する精神疾患」

「それなら、富子さんと春香さんが既にいるらしいですけど……」

「優のその口ぶりからすると、そんなことよりも更に重要なことなんだろう?」

「更に重要なこと……?」

「今までの妄想友人の一人の扱いとなにが違うのだろう?」

「今までの一人の存在は優の”一人しかいない寂しさからの脱却”を表したと医者は言っていた。だが、今回のそれは明るい性格の”設定”である優の世界定義を自ら壊しているように見える」

「自分から……ですか?」

「そうだ、優には解離性同一性障害や精神分裂病といった兆候も後に見られるかもしれないと聞いている。今、優はそれに近い……もしくはそんな症状が発生しているのかもしれない」

「そんなん……だつたらなおさら治療を急がないと……」

「いや、むしろこれはいい兆候なんだ。言つたろ?”優は自分が望むままの世界で、想像した設定で日常を過ごす”んだ。もしあ前が何でも願いを叶えられるとして、そんな病状を抱えた日常なんて想像するか?」

私は首を横に振る。

そんな世界、断じて創造したりしない。

「そう、むしろこの病状は俺たちの見る現実世界の優の症状だ。それをあいつは自分で少しずつ理解している」

「そうか……お兄ちゃんの言いたいことがわかった。
つまりは……」

「お姉ちゃんの様子はおかしく、元気が無くなつていく度に少しずつこの世界に近づいてくるんですね？」

「そうだ、今まで認識できていなかつた”トラウマ”を直覚できるようになり始めているんだ。そのナナという存在は恐らく、優からすればなんのかわからない恐怖を紛らわせるための、防衛線の意味合いを持つてゐるんだろう」

お姉ちゃんが回復傾向に向かつてきている。

私はそれが嬉しいはず……嬉しいはずなのに、あんなに思いつめたような……元気のないお姉ちゃんも見たくなかった。

そんな……複雑な気分を抱えてしまつていた。

「あ、そうだ……あともう一つ……」

「そう、次はお姉ちゃんには関係ないかもしれないが、私が抱えた問題。

電腦の少女からの謎のメール。

そのことについて相談しようと思つた、そのとき。

「和真つー！」

「…………？」

思わず、息を呑んだ。

お兄ちゃんの名前を呼ぶ、その声の主はお姉ちゃん。
「じゅじゅ……？」

お兄ちゃんの姿はお姉ちゃんには認識されないはずじゃ……。
ところよりも、”和真”って……どうして呼び捨てに？

そんな色々な考えを張り巡らせてから、お兄ちゃんは口を開いた。

「え？　ああ、うそばんは”水無瀬”」

私はつい混乱した。

「じゅじゅお兄ちゃんは不思議がらない？」
「じゅじゅお姉ちゃんを水無瀬つて……？」

「悪い水無瀬、俺もつい歸るから……じゃあまたな

アハハハお兄ちゃんが出て行くひまわりの顔を、お姉ちゃんが掴み静止させる。

「ううと待つよ、なんであなたがううう……それもヒーリング

と

……お兄ちゃんをまるで珍しがらない。

いや、確かに珍しがつてはいるのだけれど……とにかくおかしい。

「まあ……ううと。もつい歸るわ」

やつぱりねと、お兄ちゃんはお姉ちゃんの手を振り切つて家を出

て行った。

お姉ちゃんはそれを見送り舌打ちをすると、今度は私に振り返る。
……なにか聞かれる。

私はなんと答えたらいいのだろう?

「ねえIRIA、和真と何の話してたの?」

……お兄ちゃんのあの対応は、なにかを……」お姉ちゃんの違和感を察知していた行動に見えた。

だから私は下手なことを言わないうつにする。

「……すこませんお姉ちゃん」

「どうやら言えない」とらし。ロボットにプライバシーはいらない、とまでは言わないけど私一人蚊帳の外みたいでおもしろくない」

お姉ちゃんの、いつものモノローグのような語り。

心の中の声。

私のことを気にかけてくれているんだ……。

「そう……じゃあ私も風呂に入つてくるね」

それだけ告げられると、お姉ちゃんはリビングから出て行つた。

……お姉ちゃんになにが起こっているのか、私にはなにがなんだかわからない。

「……ワールドライン……プログラム」

ふと、急に思い出したあのメールに書いてあつた単語を呟く。
今日は聞けなかつたけど、明日お兄ちゃんに聞かなきや……。

それまでは、このメールには関わらないで置いとつ……。

そうして私は携帯をしまい、明日の「」飯の用意を少しだけして、寝ることにした……。

神の視線と、夜の出来事　そして朝。

……深い夜の時。

我々が見る視線。暗い部屋、液晶画面を見つめる少女が一人。少女はナナ、ナナ……とうわ言のように呟いていた。

「姫竜さんはね、血が大好きなんだそうです」

画面には、真っ黒な背景に、真っ赤で不気味な言葉。見つめる少女はただ、こくんこくんと頷き、それは正しいそれは正しい……と繰り返す。

“あの時”……いや、“あの世界での出来事”を強く心に刻んでいるのか、少女のナナへの信仰は病的と言つていいほどだった。

午前三時、深い闇。

少女は糸が切れたように倒れこみ、意識を失う。死んだのか？

……よかつた、寝てしまつただけのようだ。

さて、ではそろそろ行こうか。時間がない。

あの少女を助けなければならぬ。はやくあの世界へダイブしなければ。

時刻は……そうだな、“私が生まれた日”がいい。生まれてから今までに、私が用意した世界のバグに、私が気づければそれでいい。そして時間で言つと、今日の暁ごろまでには気づきあのロボットに理解させてやらなければならぬ。

よし、プログラムの修正はこれでいいな。

私ともあろう者が、随分とお粗末になつてしまつたが致し方ない。準備は整つた。

これからしばしの世界旅行だ。

最後に向こうの私自身にヒントを『え』ておこう。さすがの私もノーヒントじゃ仕込んだバグに気づかないかもしないし。

そうだな……私が始めて携帯を手にする日以来、このメールが送信されるようにしておこう。

私はメールを作成すると、送信ボタンを押した。ついでだからあのロボットにも送信しておこう。

⋮

⋮

⋮ <送信完了>

これでいいか……。いくらなんでもこれだけ材料があれば気づくだろう。

まあ、そろそろお楽しみの世界旅行の始まりだ。

氣づけよ、私。世界の秘密に

……奇妙な夢を見た。

寝ている最中だとこりのに、お姉ちゃんが夜中に携帯を触つて、いるのを私が見て、いる夢。

私はそれから誰かにメールを送信して、……それから、

……思い出せない。

まあいいか、夢は夢だ。はやく起きて、お姉ちゃんの朝ごはんの用意をしないといけない。

「確か毎のジャムパンが、こいつで書いたつけ」

そんなことを思ひ出しながら、私はお姉ちゃんを起さず前にトーブルに朝ごはんの用意をしていく。

お姉ちゃんの望むように、ジャムパンを用意してあげた。

「褒められちゃつたりして? ……って、そんなことないよな」

自分で呟いた願望を一秒足らずに否定する。

何故? ……だってそんなことありえないもの。

「わい、と……お姉ちゃんを起さしに行かないよ……」

……褒められたり、したらここな。

なんて、ほんの少しあと思つてしまつのでした。

「あのセーラー」

「なんでしょ?」

テーブルについたお姉ちゃんは軽くため息を着いた。

私は、希望通り苺のジャムパンを振舞つた。

ちゃんと言われた通りにしていたはずだけど……田の前にいるお姉ちゃんはなんだか呆れ顔だった。

「なんだ」「田連續で苺ジャムなのぞ」

……え?

そんなはずはない、昨日は田の飯だつたはず……?

いや、昨日あたりからお姉ちゃんの様子は変だつた。(実際

には治つてきている証拠らしいけど)

このへりこの認識のズレはもつ当然のものかもしれない。

「『』みんなせい、すぐ別のものを用意します」

「大丈夫大丈夫、昨日も言つたけど”別にいいけど嫌”なだけだから、ね？」

メニューは間違つてゐるのに、自分が言つた言葉は覚えてゐる……。

とても謎な現象だ。これもお兄ちゃんに相談しないといけないかな?

「ほひ、はやく食べやせとよ。自分で食べやけりよ。」

そう言つて腕がないのに上半身を傾けるお姉ちゃん。

「だ、駄目です! 私の仕事です」

すぐさまパンを適度な大きさにちぎりお姉ちゃんの口へ持つていぐ。

危なかつた……大事な制服にジャムが付いてしまつといふだつた。「ん……んぐ、ずるいよH.R.I.Aは。だつてこんなに優しくて可愛いんだもの、なにも言えなくなつちやつ」

「そ、そんな」と……は

い、いきなりお姉ちゃんはなにを言つてゐるの?

褒められたのは嬉しい……けど……私、顔赤くなつてないかな?

「あはつ、照れてる照れてる」

……お姉ちゃんのほうがずるいと、私は思った。

なんだか、こんなお姉ちゃんの笑顔を見たのは随分と久しぶりか

もしれない。……いや、”生まれてからみたことある”よね？

……疲れてるのかな、お姉ちゃんの笑顔がちょっと思い出せなかつた。

「ほひ、はやく食べなさいよ。学校に行かなきゃ」

はやくはやく、と催促をされる。

私は慌ててまたパンをちぎり、口元に持つていつてあげる。

「は、はいお姉ちゃん」

いつもして、なんだかんだとありながら私たちは暮らしている。今はこんなお姉ちゃんだけど、私にとつてお姉ちゃんは最高の”お姉ちゃん”なのだ。

「(ー)馳走様」

「お粗末様でした」

早々に食事を終えると、お姉ちゃんはカバンを手に取り玄関へ向かう。

玄関先に置いてある車椅子に、(ー)へ自然な動作でお姉ちゃんを乗せてあげる。

「じゃあ、行つてくれるね」

「はい、こつらつしゃいです

こつらつしゃい、などとこいながら私はお姉ちゃんの車椅子を押して家を出た。

今日もまた、お姉ちゃんにとって無意味な一日が始まるのだ……。

お姉ちゃんがプロローグ

お姉ちゃんと共に家を出た私を待っていたのは、お兄ちゃんだった。

何故？昨日の出来事からお兄ちゃんがお姉ちゃんから睨んでいた。いつのはわかった。

でも……こんなに簡単に田の前に現れていの？

「なんでこるのね」

お姉ちゃんが、いぶかしむ様な表情でお兄ちゃんを見る。

「なんとなく、一緒に行」うかなど」

「まあいいけどね」

何事もないよ」と、まるでそれが当然……いつもの中常であるかのよつた振る舞い、やり取り。

お姉ちゃんの認識は劇的に変わった……？

それも、今までにない変化が。

「女が邪魔である」とを証明せよ」

しばしばすると、お兄ちゃんは憤り口を開いたかと思いつと変なことを言った。

……ああ、そうか。

これは昨日トレーニングでやっていたジロークの、証明問題の話だ。確かお姉ちゃんも一緒に見ていたはず。お姉ちゃんはすうりひと公式を話し、答えを証明してみせた。

「……こんな感じだつたかな？ まあわりと簡単かつ、ちょっと面白っこ話だよね」

「大正解だ、さすがは水無瀬だな」

お兄ちゃんが賞賛の言葉を送ると、お姉ちゃんは思ひがけない言葉を返した。

「 4月やんまとめスレで見たことあるしね」

「ん？ なんだそれは？」

お兄ちゃんは私をちらりと見て「こればどいつこり」とだ」とでも言いたげな表情をした。

私も知らない。この証明問題の話は昨日見ていたテレビ番組で知った情報では……？

「ああいや、じつちの話。……なんだ、意外とそつちの方面の知識には疎いのか」

お兄ちゃんの問いかけて、お姉ちゃんはなんなんだと話題を流した。

お姉ちゃんの言つ“そつちの方面”とはなんなのだろうか。

証明問題の知識は昨日のテレビではなく、どこか別の場所で知つたのだろうか？

だとするとお姉ちゃんの“そつちの方面”といつのは、あんな証明問題があるくらいなのだから、面白い話題であふれている場

所なのかもしれない。

「それで？」

「ん？」

「いや、「ん?」じゃなくてさ。なんでいきなりそんな話？」

「ああ、そのこと」

お姉ちゃんはさびしく述べてお兄ちゃんが昨日テレビでやっていた証明問題の話題を急に投げかけてきたのか、疑問に思つたのだろう。

お姉ちゃんは首を傾げながらお兄ちゃんを見つめた。

そんなお姉ちゃんの問い合わせに対してもお兄ちゃんは空を見上げながら、まるでその先に”誰か”を見るような視線を空に向けるながら意味深なことを言つた。

「俺とお前には、どれだけの差があるのであらうか」

「差? 特になことは……思ひなさ~」

お兄ちゃんの言葉に、お姉ちゃんはさらに首を傾げ、うーんと唸つた。

「いや、今の知識な。昨日テレビで見たんだ

私もそうだ。

でも、お姉ちゃんはさびしか別のところで知つた。ところが風なことを言つた。

「せりきから話が繋がっているのかいなか、よくわからない。
「こつは一体何が言いたいのだろう」

お姉ちゃんの心のモノローグが口を通して声となる。
私にも、お兄ちゃんが話さうとしているとの意図が見えない。

「そりなんだ。なんチャンネル?」

「おじいは通常の話し声だらう。

お姉ちゃんはいぶかしみながらお兄ちゃんを見る。

「4チャンネル」

お兄ちゃんは端的に、チャンネルを告げる。
やうだ、私も4チャンネルの番組での問題を知った。

「でも4チャンネルなら私も見てたけどなあ……。そう、私も同じ
チャンネルを見ていたはずだがそんな放送は見なかつた」

……え?

いや、お姉ちゃんは確かに昨日私と一緒に見ていた……はず。

「夢でも見てたんじゃないの?」

「違うね」

お姉ちゃんの疑問を、ただ一言で否定するお兄ちゃん。
その後はパラレルワールドの話を用いて、お姉ちゃんの認識が私たちとずれてることをお兄ちゃんは知らせようとしていた。

しかし、それはお姉ちゃんが本当の世界に気づく要素にはなりえない。決して届かない。

何が邪魔をするのだ?
どうして届かない?
いい加減にしろ!

誰に言つてもない、私は心中で呟んだ。
誰か、誰でも良い。
私をこの悪夢から覚めさせてほしい。

そんなことはありえない、そう思いながら私は願った。
この時の私はどんなものにでも縋り付きたい気分だったのだ。
しかし、そんな願いがまさか今日叶つとは、この時の私は考えもしなかつた。

少女は世界の真実に触れた気がした

学校に着いてもすることは同じ。

私はただお姉ちゃんが過(こ)している姿を見ているだけ。

……しかし今日は決定的に違うことがあった。

圧倒的に日常から外れた異常は休み時間に起(起こ)った。

「おはよ(ひ)、IRINA」

……誰?

どうして私のもう一つの名前を知(し)っているの?

声に振り向くとそこにいたのは神田直人だった。

直人さんが……どうして?

「メールは届いたかい? 昨日”届くよ(う)に”送(お)たはずなんだけ
ど」

私の頭の中のシグナルが一斉に、けたたましく点灯する。
なにか危険だ、そしてそれよりもなによりも、この人は今までの
直人さんじやない。

「あなたは……誰、ですか……?」

私の喉から出た言葉は、ただ疑問を搾り出すことだけだった。

「誰つて、正真正銘”神田直人”さ。ちゃんと今の意思を持つて、
この十数年生きてきた本人だよ」

この人があのメールを送つてきた張本人?
今までと全然雰囲気が違う……。

……本当にお姉ちゃんを救う手がかりを持っているの?

「あの……メールのことは……」

「ああ、全て教えてやる。今、ここでは」

私は興奮していた。

あの不可思議なメール。

世界の秘密……人々が知りえないなにかを知つてゐる、この様子。
外から見れば私も、直人さんもおかしな人間に見えていただろう。
しかし、客観的に自分を見れないほど、今の私はなにも見えてい
なかつた。

どんなチープなファンタジーでも、お姉ちゃんを助けてあげられ
るのなら……なんだつてよかつたのだ。

「ただし、今からこのコインをトスして表なら教えてやる。裏なら
”絶対に” 教えない」

そういうて直人さんが取り出したのは一枚の銀色のコイン。
拳銃のマークがあしらわれていて表、Rと一文字書いてある
方が裏だと、直人は話を続ける。

私は不思議でしようがなかつた。

ここまで大きな話をふつておいて、コイントスの結果によつては
教えてくれないだつて?

その行為になんの意味があるんだろう?

「納得いかない……といつ顔をしていろな」

私は黙つて頷いた。

果たしてその「イントスとやらには、どれほど意味があるのか」と……私が抱くその疑問は直人さん自身も予測していたらしい。

「強いて言つなら」の行為が話の全てだ

更にわけがわからなくなつてきた。

ただただ不思議でたまらない私に直人さんはペンと紙を差し出した。

「さて…… H.R.I.A、今は何年だ？」

「え？ エット…… 2010年……ですか？」

急に「何年だ？」と、尋ねられた私はとつさに反応して答えた。

「ならば、2010とその紙に書け」

言われるがまま、私は紙に2010と書き込んだ。まだまだ意味不明だつたが、疑問を投げるのは一連の流れが終わつてからにしよう。

「次は3つの数字を足して、答えが2010になるような式を書け」

私はじばりく考へると、「560 + 247 + 1203

= 2010」と書き込んだ。

なにか捻つたわけでもない、ただ無造作に思いついた数字を書いて、あとは2010に合わせただけの式。

「書けたか、それは”絶対に合っている”な？ 数字に間違いはない？」

やけに間違いがないかどうかを強調されて聞かれた。

3回も計算をし直して、それが絶対に合っていることを確認する。

「では、その紙は丁寧に折つて大事に持つておけ」

その言葉に従い、意味のなさそうな数式を書いた紙を折ると両手でぎゅっと握った。

なんだか、テレビでこういつの見たことがある。手品かなにかをするんだろうか？

「……そして、じいじからが話の本番だ。今からじいじを上に弾く」

そうして直人さんの手には先ほどの銀のコイン。直人はそれを自分の親指に乗せる。

「今から俺はコインをトスし、表なら真実を教える。裏なら教えない。これは絶対だ……絶対にこのコインに俺は従う」

まるで直人は私にではなく、自分に言い聞かせるように言った。

そして、コインが宙に舞う。

そのすぐ一瞬後にパシンッ、とこつ音と共にコインは手の甲と手のひらを合わせキャッチされる。

「……結果を見るぞ」

直人さんがゆっくりと手を退かせる。
私は生睡を飲み込みながらそつと覗き込む。
そこに描かれているのは……。

「拳銃のマーク……表だ！」

私は思わず声をあげる。
これで私はこの不可思議な行為の意味と、あのメールについて教えてもらえるのだろうか？

「ああ、教えてやるよ。その前に……」

直人さんは「インをポケットに突っ込むと、口元を歪ませて私に尋ねた。

「今日は何年、だつたか？」

「2011年ですけど……？」

さつきも聞かれたので、さつと答える。
この問い合わせがあるのだろうか？
それとも……私はからかわれているのだろうか？

「さうか、ならお前がさつき書いたメモを開けて見せてくれ

私は両手に持ち続けていた紙を広げて見せた。
そこに書いてあるのはもちろん、今年の年号とそれに合わせた数式が書いて……え？

「へえ……」「560 + 247 + 1203 = 2011」
か。IRIA、これ間違えてないか？」

紙を覗き込みながら直人さんは2011の部分を指差す。
そんなはずはない。

さつき3回も確認したのだ。

数式に間違いはないはず、……でも、この式の答えは2010……
それはつまりこれを書いた時点では2010年だったといふこと……
？

そんな馬鹿なことがあるはずがない。

ただコイントスをしただけで……こんなこと……。

「……なにをしたんですか……？」

「ただ、コインをトスする前に表裏の結果による行動を決めただけ
だ。ただそれだけでこの世界の年号に関係する数字は認識上でだけ、
1足される。だから年号に関係ない数字は変わらない。……式に間
違いが生じたのはこのせいだ」

そう、式に間違いがある……本来の答えは2010で、私は今2
011年だと認識しているのだから、これを書いてからもう1年は
経つたはずなのだ。

ただ、周りの景色は変わらない。

生徒のみんなの顔も変わらないし、みんながなにかに気づいた様
子もなく、どうしても1年経ったようには見えない。

「どう……して……？」

「これがこの世界の原理、真実……バグとも呼べるな。結果がラン

ダムに変わる「インの表裏によつて行動が分岐する時に限り、この現象が起きる。さつき俺がやたら強調して宣言したのもこの現象を起こしたかったからだ」

意味が分からぬ。

なぜ？どうしてそんなことで、こんなことが起きる？

この世界は……「」の世界は一体……。

「」の世界は……なんなんですか……？」

「何回この現象が起つて、本当は今が何年なのかは知らないが俺なりの考えがある」

そうだ、今は2011年。

でも、こうして知らないところで年数の数字だけ変わっているのなら、本来の年号がわからない。

思考を張り巡らせ悩む私に、直人は言い放つ。

「この世界は、何者かに作られた電腦世界 サイバーワールド……電氣信号の世界かもしれないということだ」

妄想の銀の弾丸 シルバー・バレット

「電腦……世界？」

直人さんが言つた言葉。それは私が今まで信じてきた世界の構造そのものに対する反抗だった。

電腦世界……お話の中でだけ、聞いたことがある。

私たちは電子的な存在で、そしてそれを観測している“上位の観測者”がいるというUFのお話。

2010の記述がどのような理由で2011に変わったのか……しかしその考えなら、こんなバグもあるのかも知れない。
いや……もしくは……。

「誰かが意図的にこうなるような……直人さんが気づけたように、この世界の住人が違和感を感じるように工作されているのだとしたら……」

「この世界が電腦世界だという前提があるのならばそうかも知れない。何故そんなことをしたのかは不明だが……」

と、思考を巡らせており内に休み時間が終わり、授業開始を告げるチャイムが鳴った。

「……IRIA、もう少し話がしたい。屋上へ行こう」

「え……でも、お姉ちゃんが……」

「どうせ一日中携帯弄つてゐるだけだ。お前も今までずっと退屈な毎日だつて……思つていただろう?」

「……それは……」

確かに、思つていた。

私はただ見ているだけだもの。

私は学校にも通えない、ただお姉ちゃんの生活を見て……それだけ。

「……わかりました……」

そうだ、私にだつて少しの自由はあつてもいいはず。

それよりも、この話はお姉ちゃんにとって大事な話だから……許されるよね？

そうして着いていつた先は屋上。

空はまるで世界の破滅を意味するかのような、禍々しい紫色をしていた。

このよつな比喩をするのも私の心がきっと不安だからだ。

「……そのコインは、一体どうで手に入れたんですか？」

私は聞いた。

このようなコインが普通は手に入るはずがない。
例えここが私が信じてきた世界でなくともだ。

「……貰つたんだ、女の子から」

「知り合いでですか？」

「いや、まったく知らない。これは運命を変えるコインだと、やつて渡された」

「運命を……変える?」

「ただ信じれば良いと、やつていた。これは妄信の銀の弾丸
シルバーバレット とこいつらしてこいつらしてこいつらしてこ

「妄信……?」

「信じていればその通りになるとか……そういうことじゃないかと思つていてる。現に不可思議な自体は起きている」

そう言つと直人さんはさつきのコイン 銀の弾丸を取り出して見せた。

「それに……こいつの効果は世界の年号を変えるだけじゃない

「え?」

「コインによつて決められた行動……それにより分岐する世界……
俺はそれを体験した」

「分岐する世界を……体験……?」

「俺がお前に世界の真実を教えなかつたパターンの世界の結末……
それはとても汚くて、それでもお前達は幸せそつた」

「……私達になにが起きたんですか」

可能性の未来。

私がこの世界の秘密を知らない結末。
それを直人さんは見てきたといふ。

「……お前はロボットとして生きた。そして水無瀬優紀は死んだ」

お姉ちゃんが……死ぬ？

私がこの話を聞かなかつた世界で……お姉ちゃんは死んでしまつ？

「水無瀬優紀の唯一の救い……畏怖の対象である”あの女”に勝つ
こと、それができなかつた」

あの女。

私が知つてゐる人だらうか？

少なくともナナという人のことではなさそうだけど……。

「お前にとつてはこちらが正解の世界だらう。この世界ではまだ何
が起きるか分からぬ。水無瀬優紀が死ぬこともまだ……」

「……お姉ちゃんは、じつして死んでしまうんですか」

死因。

それがわからなければ、今後この世界でもお姉ちゃんの死を防ぐ
ことができない。

「死んだといつよつは……ここから上位の世界、ここが電腦の世界
ならばそれは現実の世界といつべきか。そこに還つていつたんだ」

それはつまり。

現実の世界から何かしらの方法で意識、人格といったものをこの世界に送り込んでいいのならば……お姉ちゃんは元の世界に帰ったということ?

しかしそれはこの世界では死んでしまうとこ「う」こと。
どちらが正しいのだろう?

私はこれから何をするべきなのだろう?

……いや、答えは決まっていた。

「私……お姉ちゃんと一緒に居たい……」「この世界”で……」

そうだ、元の世界がなんだというのだ。
大切なのは今、そう……今なのだ。

「……そりが、ならこれをやる」

そう言つて直人さんは銀の弾丸をこちらに投げた。
私はびっくりしたけれど、それをキャッチして空にかざすとまじまじと見つめた。
それは鈍く輝いていて、希望を託すに相応しい魔性の魅力がこもつていた。

「

私はそう呟くと、銀の弾丸を指で弾いた。

「これから世界は、木の根のよつに拡散し、分裂していくことだらう。

そしてその木は葉を宿し、いざれそれは運命の書かれたアカシャの葉へとなるだらう。

どうか、私に幸せな日常をくだれ。

「ほんとうは、私の愛した日々よ」

そして私は銀の弾丸を手の甲でキャッチした。

ドランカー。

今、世界を騒がせている怪病であり、その解説が急がれている。症状は、過度の妄想思考による現実逃避。重度の精神疾患。

俺の両親はドランカーのことを解説する研究員だった。両親は研究ゆえに家に帰つてくることは少なく、俺は妹と一人で平凡な毎日を暮らしていた。

息子である俺はと、なんでもない学生生活の毎日。……だつたはずなんだ。

ある日、両親がドランカーを患つてしまつた。

とても研究を続けられる状態ではなくなつてしまつたので、病院へと搬送された。

残された俺と妹の二人は、平凡な毎日を暮らせなくなつてしまつた。

両親が働けなくなつてしまつたので、まずお金が無い。

最初のうちはなにもせずとも貯蓄があつたのだが、収入が無ければいざれ崩壊する。

「一人で学校を辞めて、働く」

そう、提案するつもりだつたんだ。

普通の生活をするためには、そうするしかないから。

でも、俺がその話を切り出そつとする直前に妹が言つたんだ。

「私はドランカープロジェクトの研究員になりたい」

ドラランカープロジェクトの研究員。

ブランド中のブランドの職業。

かつて両親の職業であった研究員に、妹はなりたいといった。

どうして？

俺は聞いてみた。

ドラランカーが発症する原因は分かっていないが、発症確立はドラランカーを研究している研究員が多いそうだ。

それに、研究員になるには常人には計り知れないほどの学力が必要らしい。

国が有するドラランカーについての研究者養成学校。

その学校を卒業しないといけないのだが、養成学校は毎年5人しか入ることができない。

入学するには何千人という天才から5人という枠を奪い取らねばならない。

気が遠くなるような勉強が必要だらう。

正直、人生を楽しめたもんじやないと思つ。

それなのに、何故？

そこまでしてどうして研究員になりたいのだらう。

すると妹は言つた。

「お父さんとお母さんを、助けたい」

…… どうか。ただ、助けたいだけなんだ。

高収入だとか、ブランドとかでなく、ただ病気の両親を救いたい

だけ。

偉いな、お前は。

俺は今まで研究ばかりでまったく構ってくれなかつた両親を憎んでさえいたというのに。

それを、助けたいだつて？自分の人生を潰してまで？

そんなの、理不尽だ。

「ただでさえ俺達から普通の生活を奪つたのはあいつらなのに、それを救うために自分の人生を諦めるのか？」

少々キツイ言い方になつたが、俺は思つたことをはつきりといつた。

人並みとは言わない。ちょっとでも幸せに暮らしてほしいんだ。そんな、勉強の毎日で苦しい思いをしてほしくないんだ。すると妹はこんなことを言つたんだ。

「奪つたのはお母さんやお父さんじゃない、悪魔の病氣ドランカーダ。私がそいつをやつつけん」

確かに、そうだけど……。

両親だつて、なりたくてなつたわけじゃない。それもわかつてる。最大の原因の発端がドランカーだつてこともわかる。でも……。

……。

いや、それが妹の望むことならば叶えてやりたい。

妹が両親のために人生を賭けるというなら、俺はお前の夢のために人生を賭けよう。

学校を辞めるのは俺だけで十分だ。
中退がなんだ。

仕事なんてなんだつてやってやる。

妹が、ドランカーになつた。

学校で虐められていたらしい。それでも、学校内のことに関して
俺はなにすることもできなかつた。

妹が通つていたのは学力は普通の高校だつた。

そう、ドランカーになることは諦めたのだ。

最初こそ頑張つていたのだが、精神をボロボロにする程の勉強、
勉強勉強勉強の毎日。

趣味など持つての他、ドランカーに関する知識以外を得ることなど
まったくせず、世間のことを探ることもなかつた。……耐えること
が、できなかつた。

嘔吐をするのは一日に一度や一度ではなかつた。

医者からも、このままでは死んでしまう、と。

。

。

見かねた俺は妹に「頑張らなくていい」と言つた。

壊れかけた妹は笑顔を見てくれた。だからその時はそれが正解だと思っていた。

普通の高校に入り、やつと妹は悪夢から解放され普通の女の子として過ごすことができるんだと思つていた。

でも、人とまったく接触することなく過ごしてた妹はまったく空氣に馴染めず、友達を作ることができなかつた。

だから、学校ではまるで息をするかのように勉強をしてしまつていた。

小さな頃から、ずっと勉強をしていた……もう勉強するのが癖のよになつていた。

教室の窓の外に閉じ込められたり、椅子に接着剤を塗りたくられる、遠征旅行での遊園地で一人置きざりにされる等……。

そうとう辛かつたのだと思う。
時々虐められたことを思い出しては、頭が痛い、火花がパチパチするみたいに痛むと、そう言つていた。

……忘れられることができないのだろう。そんな発作が起ころるたび、俺は側についてやることくらいしかできなかつた。

ドランカーになつたのは過度なストレスを受けたことが原因かもしない、と医者は言つていた。

勉強の毎日でのストレス、そしてそんな毎日を送つたせいで虐められ、そのストレスで……。

……最初の選択が間違つていたのだ。

勉強なんてさせず、楽しく過ごさせていればよかつたのに。

もし時間を戻せるなら、俺はある時の俺を止めたい。
そうすればこんなことにならずにすんだのに……。

そんなことを考えながら、アパートのベランダから空を見つめる。
この空の色さえ、きっとドランカー達からしたら別の色に見えて
いるのだろうな……。

今は晴れてるけど、あいつらの世界では雪とか降ってたりして。

「……そんなことも、ありえるんだよな。ドランカーの人たちには
誰に言つてもなく、俺はそんなことを呟いていた。
……そんな時。

「……雪？」

雪が降ってきた。

馬鹿な、今は夏だぞ？まさか俺もドランカーに？

手を伸ばし、雪の一つを捕まえる。

……冷たくない。

よく見てみると、それは紙で作られたものであった。

どうか雪ではなく紙吹雪だったのか。

ホッと一安心をする。それと同時に、ある疑問も沸いてくる。

降ってきた雪は人工物だとわかった。つまり今この瞬間、上から
降らせている人物がいるはずだ。

「……ひょっと見てくるか

俺は玄関から外に出ると、アパートの屋上を手指した。
なにしろ雪と間違えるくらい降ってきた紙吹雪の量は異常だった
のだ。

そんなことをする暇人がどんな人物なのか、気になるじゃないか。

暗く狭い階段を上り、屋上へのドアを開ける。

そこには、妹そっくりの車椅子に乗った少女がいた。

「…………君は…………？」

「私は被験者N.O.7…………”ナナ”」

血口土張の鎗

「ナナ……？」

田の前の、妹に似た少女に圧倒的な違和感を感じ、思わずその名前を反復してしまう。

顔立ち、声、なにからなにまで妹と似ていた。

しかし、この少女には妹とは決定的に違う部分があつた。それは

……。

「右腕が、ある……」

そう、田の前の車椅子の少女は妹と違い“右腕がある”のだ。
それがこのナナという少女と、妹との決定的な違い。

「右腕……？」

俺の言葉に反応して自らのその細い腕を不思議そうに見つめるナナ。

「あ、ああ……今はひつけの話」

どうやら俺の言動で彼女を不思議がらせてしまったようだ。
まあ、不思議といえば俺もこのナナについての疑問はいくつもあるのだが。

「名前……」

「え？」

「名前……教えて」

あ、そういういえば俺はまだ名乗ってなかつたつけ。
あんまりに妹に似てるものだから、ちよつと動搖してしまつてい
るようだ。

「俺は水無瀬和真、えつと……ナナちゃんだつけ。こんなところ
何してるんだ？」

「紙吹雪を……降らせている……」

……まあ、それは見たらわかるが。どうして降らせているのかを
聞きたかったのだが。

「……どうして降らせているか……？」

「せうせう、どうして降らせているんだ……つて、あれ……俺声に
出しちたっけ？」

俺の思つていたこと。紙吹雪を降らせる理由が知りたいくらい
と。

考えていたことが、田の前の少女の口から発せられる。

「世界には」

「はい？」

「世界には、たくさんの形がある。元は一つだけ、世界を見る人
の感じ方、その感性の数だけ世界がある」

俺の疑問はスルーされ、ナナは散らせた紙吹雪を眺めながら、ある一人のドランカー研究者の有名な言葉を呟いた。

別に、俺だって少しくらいはそういう知識だつてある。もちろん知つているさ。

だから、俺はその言葉の続きを紡ぐ。

「……しかし、その”元の一つ”を見ることができる人はいない。世界を有りのままに感じることができる人などいない」

するとナナは驚いたようにこちらを見て、更にその続きを語りつ。

「ならば、正常な人などどこにもいない。我々は皆、ドランカーなのではないだろ？」「

言い終わったその直後、屋上に風が吹き、舞い上げられる紙吹雪たち。

そしてそれらはやがて浮力を失い、町の中へと吸い込まれていく。風の音も、紙吹雪が散る音も無くなつた静寂の中で、ナナは俺に問いかけた。

「あなたは、ドランカー？」

俺は言葉に詰まつた。

どう答えていいのかわからなかつた。

さつきの言葉の後ならば、人類は全てドランカーである。つまり、あなたは人間か？と問われていることと同義であるのだ。

「さつきの言葉を受け取ったまま答えるとしたら、俺はドランカーだわうな」

だから、有りのままを伝えた。

俺だつて、感じている世界は寸分違わず他人と一緒にどうしようと
はないだろう。

そういう意味では、俺もドランカーだといつことだ。

「答え」

「うふ?」

「さつきの質問の、答え」

さつきの……といつと紙吹雪を降らせていた理由はなにかといつことに対する答えのことか?

それに対して、変な「ミュー」ケーションのといつ方をする子だな…。

338

「今日、7月20日。この町に雪が降りました」

「違う、君が降らせたんだ。ただの、紙を」

「それはあなたの世界。他の人の世界では、さつきが降っている雪が降ったという体感になりかねない。

他の人……ドランカーのことか。

確かに、俺が一瞬見間違えたくらいだ。ドランカーならば本当に雪が降ったという体感になりかねない。

「……世界には、たくさんの不安であふれている。あるはずの無い

ものに怯えている人がいる

……うちの妹がまさにそんな状況だ。

勝手に世界を自分の中に作って、現実から怯えて……。逃げ続けているんだ。

「私の友達が……ドランカーなの」

「……やつ、だつたのか。可哀想に……」

氣狂いの病氣、ドランカー。

身内にその患者がいれば、その苦労は痛いほどわかる。

「でもね、その友達はいなかつたの」

「え……いない……？」

”いなかつた”とはどうこうことだ?
……まさか!?

「想像上の友達 イマジナリーフレンド ……ドランカーの人を見
る、幻影……空想の人」

やはり、そうか。

できるだけ視界から外していたのだが、どうやら本物だったらし
い。

”あの首に提げてある青色の鈴”は……！

「私はドランカー。この世界で夏雪を見る人の一人」

ちりん、と鈴の音が鳴る。

精神病を患っていますという……自己主張の鈴が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1020o/>

You & I -Reverside Drunker-

2011年10月10日10時24分発行